

目指せ二連覇!!

ストレイカー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの大洗連合と大学選抜との北海道決戦の翌年2月、1年近く大洗女子学園戦車道の教官を務めた蝶野亜美が離任することになった。

そして新教官指導のもと大洗女子学園戦車道は二度目の優勝を果たすべく新体制で更なる特訓に励む。

しかし新教官は西住みほにとつて少々思うところある人物であった。

目 次

プロローグ・涙のお別れです	1
登場!!新教官です	4
ニューフェイスです!	15
走り出します!	25
練習試合決定です!	36
練習試合・知波単戦です!	48
発動・いらいら作戦です!	61
決着・そしてライバル達です!	79
抽選会・強敵ゲルダム高校です!	97
熱砂の攻防・アフリカ軍団です!	113
対決・うずまき作戦です!	125
逆襲のゲルダム軍団です!	138
切り札と約束です!	148
2人の『のりこ』です!	162
聖グロリターンマッチです!	177
絶体絶命・恐怖のブラックプリンスです!	191
激突!!梓ＶＳオレンジペコです!	203
番外編	237
新チーム命名です!	242
お祝いです!	224
練習試合・ショートです!	217
大洗応援団誕生です!	252
謎の男です!	1

キャラクター紹介

キャラ紹介その1です！

キャラ紹介その2です！

キャラ紹介その3です！

キャラ紹介その4です！

プロローグ・涙のお別れです

大洗女子学園学園艦廃艦騒動と大洗、聖グロリアーナ、黒森峰、プラウダ、サンダース、知波单、継続、アンツィオ戦車道高校連合と日本戦車道大学選抜チームとの熱き戦いは高校連合の勝利で幕を閉じ、無事（約1名無事ではすまなかつたが…）大洗学園学園艦は存続することになつたのだつた。

まさにドリームチームとなつた各校代表選手達はそれぞれの学園に帰還。つかの間の休息の後、来年の全国大会へと向けて各校更なる訓練に明け暮れた。

そして：翌年2月

「私、蝶野亜美は本日をもつて大洗戦車道の指導を離職致します。」

大洗女子学園が赤く夕陽に照らされるいつもの放課後、戦車道履修生達の前で蝶野教官は別れの挨拶を始めた。日本戦車道連盟の強化委員の一員として無事誘致成功となつた世界大会開催のため今後多忙を極める彼女は大洗女子学園を離れなければならなくなつてしまつたのだ。

「この学園で皆さんと出会つたことは私の財産です。皆さんのひたむきな姿、試合での勇姿、互いを助け支え合う心、私は決して忘れません。」

そう言いきる姿を目の当たりにした履修生達は嬉しさと共に寂しさを感じていた。素人の集まりだつた自分達にぎつくりとしつつも的確な指示を与える、戦車道の心意気を隊長の西住みほと共に教えてくれた蝶野教官に皆感謝していたのだ。

「蝶野さん、本当にありがとうございました。」

履修生達の集まりの中央から歩み出た隊長の西住みほはしつかりと正面から蝶野教官に感謝の言葉を述べる。

「西住さん、今年は昨年以上に苦しい戦いになるわよ。デイフエンディング・チャンピオンだから、頑張つてね！」

蝶野教官の右手がみほの左肩にのせられる。角谷杏をはじめ3年生組も去り、みほの双肩には今まで以上の責任とプレッシャーがかかることだろう。彼女は今一度気を引き締めて口を開いた。

「はい！蝶野教官の教えと、生徒会長達の学校への深い想いを糧に、頑張ります！」

「その意気よ！」

みほの肩にかける手を片手から両手にして力をこめる。蝶野教官の意志と力が身体の中へと流れ込んで来るかのようであった。

「来月着任する私の後任教官は私の後輩でとても頼りになるから、きつと力になつてくれるわ。」

みほにそう伝えて蝶野教官はその視線を少し上に上げてゆつくりと履修生達の姿を目に焼き付けた。

「皆さんも、西住隊長のことをしつかりとサポートして、素晴らしい大洗学園戦車道に邁進して下さい！」

「「「「はいっ！！」」」

蝶野教官最後の訓辞に履修生達は大きく、そして力強く答える。そのうち何人かの目には涙が浮かんでいた。

そして…

「「「「蝶野教官、ありがとうございました！」」」

改めて一堂の心からの感謝の言葉。それが蝶野教官の両目を潤ませてしまう。彼女は大洗に来て良かつたと心から思ったのであつた。

『辞令・陸上自衛隊霞日駐屯地教導科所属羽村葵二等陸尉

3月〇日付けを持つて大洗女子学園戦車道教官に任ずる。尚同行する人員と車両その他の装備に関しては一任する。』

宮城県仙台市、陸上自衛隊仙台霞ヶ丘基地教導科執務室の窓際のデスクに座る羽村葵は渡された辞令を読み返す。何度も読んでも内容はそのままだ。

「蝶野先輩からの差し金かな…。」

机の上に辞令を置きデスク上の電話を取る。

「当直室、教導科の羽村二尉です。これから読み上げる人物に終業後第三小会議室まで来るよう伝えて下さい。」

電話をかけながら椅子を回して窓を正面に固定する。窓の外は暗く今にも雨が降りだしそうであった。だが彼の目にはその雲よりも遠くさらに先、大洗の海に浮かぶ巨大な艦の姿が浮かび上がつていた。

続く

登場!!新教官です

学園艦：それは教育目的に造られた海に浮かぶ巨大な舟。さながら空母のようなシルエットを持つがその甲板部分は1つの街となっている。

茨木県大洗を母校とする学園艦大洗女子学園はその日、大洗の沖合に停泊していた。日本海軍の空母翔鶴を彷彿とさせる見た目。この舟は全長にして7000メートルを超える巨大船であるが学園艦の中では小さい方らしい。その艦上を一機の輸送機が飛行していく。自衛隊が輸送などに使用しているC—2改輸送機である。

羽村葵は空中からその巨大さをその目で見て実感していた。

「でかい…。」

聖グロリアーナやサンダースに比べれば小さいものだがそれでも慣れない葵には大きく感じられる。

「羽村」尉は学園艦の上空を飛ぶのは初めてですか？」

隣に座る部下、筑波さつきの質問に葵は答える。彼女は学園艦の出身だから珍しくないのだろう。

「見下ろすのは初めてだな。」

先日荷物を新居に運び込んだ際に連絡船から娘と一緒にその巨艦ぶりを見上げ驚いた。今日このことを娘に話すことが少し楽しみになってきた葵だった。ちなみに葵と3人の部下の中でその人生において学園艦に来たことがないのは葵だけだった。

「まもなく降下ですから車内へ。」

輸送機の乗組員にそう言われた2人は格納スペースの戦車に乗り込む。いよいよ着任する瞬間が近づいてきていた。

午後からは選択履修科目の授業が控える昼休みの大洗女子学園。栗色のショートヘアの女の子と同じくショートヘアでブラウンの所々癖つてがあると見受けられる女の子が2人並んで大洗女子学園の屋上に佇んでいた。

「西住殿、一体新しい教官とはどんな方でどんな戦車に乗ってくるのですかね？」

「うーん、分からないな。蝶野さんは頼りになる後輩って言つてたけど…。」

西住みほと秋山優花里は屋上のフェンス越しに町並みを眺めながら会話する。本日いよいよ着任する新教官がどんな人物か優花里は気になつていてるようだ。

「非常に楽しみであります！戦車談義などできれば良いのですが。」「うふふ…。」

などと言つている2人の耳に接近してくる飛行機の轟音が聞こえ始めていた。

「西住殿、もしやあの輸送機では？」

「蝶野さんが来たときを思い出すね。」

ちよつと時間は違うがだいたい前回もこんな感じだつたと思う。確かにあの方角から輸送機が接近してきて、

「格納庫を開けて…」

みほがそう言うと格納庫が開き

「駐車場に戦車を降下させて…」

優花里が続くと格納庫内の戦車がC—2改輸送機から大洗女子学園学園艦へのLAPESによる降下を行い

「一番奥の学園長の車に…」

2人が声を揃えると戦車が学園長のスポーツカーに激突。

「…」

まるで再現フィルムかのどとき現実にみほと優花里はフリーズせざるを得なかつた。

「ま、まるである時みたいねえ、優花里さん…。」

「ま、まあ戦車で踏み潰さなかつただけましじやないでしようか？西住殿…。」

前回は蝶野教官が乗った10式戦車が学園長のスポーツカーに激突した後、ご丁寧にも踏み潰したのである。

そして優花里は降りてきた戦車を改めて確認するとそんな些細（？）な事故のことなど吹っ飛んでしまう。

「西住殿!!自衛隊の74式戦車ですよ！」

74式戦車、その名の通り1974年に自衛隊に正式配備された二代目かつ第2・5世代目の主力戦車である。10式や90式と比べると丸みのある流線型のボディが特徴。数々の映画やアニメ、ドラマにも登場し、40年以上現役を続けている。

「私は子供の頃に一度だけ乗ったことがあるんです！夢のようでしたがまた出会えるなんて！」

みほは以前優花里の部屋をあんこうチームのメンバーで訪ねた際のことと思い出す。彼女の部屋にあつたアルバムに幼い優花里が74式戦車の上に座っている写真があつた。

「西住殿!!早速行つてみましょう！」

優花里はそう言つてみほの手をとると途端に駆け出した。苦笑いを浮かべながらもみほは優花里の手をしっかりと握つて階段をこけないように注意しつつ駆け降りた。

ちなみに最後の一段を踏み外したと後に優花里は証言する…。

みほと優花里が戦車道で使用するグラウンドに向かうとすでに数人が集まり教官の登場を今や遅しと待ち構えていた。

「みぽりん!!ゆかりん!!」

集まりの中からそんな声がする。あんこうチームの通信手武部沙織、みほ達2人をこのような愛称で呼ぶのは校内で彼女だけである。

「ねえねえ見た!?また学園長の車に突っ込んでたよね！」

「毎度毎度壊されるような所に置いてる方も問題かと…」

「せつかくの昼寝を邪魔された…。」

沙織の言葉に続くように同じくあんこうチームの砲手でロングの

黒髪の似合う大和撫子五十鈴華が発言し操縦手でこれまたロングの黒髪に白いカチューシャがトレードマークの冷泉麻子が眠気たつぶりの顔でぼやく、あんこうチームの集合である。

安眠を妨害されご機嫌斜めになつた麻子以外の面々がグラウンドへと入ってきた74式戦車に視線を向ける。ゆっくりと前進して履修生達の集団の前に左側を向けて停車した。

「すゞいすゞーい!! 74式だあ!!」

1年生の操縦手阪口 桂利奈が両手をバタバタさせて喜んでいる。アニメや特撮が大好きな彼女らしい反応。

そしてすぐに車長席から蓋を開いて乗員が姿を現したが、それを確認した一堂から「えつ?」「あれつ?」といった声が上がつた。なぜならば…

「大洗女子学園戦車道の諸君、私が新教官に任命された羽村葵です。」

戦車の中から現れたのは迷彩柄の戦闘服に身を包み、キャップにサングラスをかけた「男性」だつた。見た目には身長は170半ばはあるだろうか、そして線が細い。一般にイメージされるような筋骨粒々のいかつい男ではない。

戦車の上から自己紹介をして降りてくると彼はサングラスをはずしながらみほの前へと歩いてきた。自然と周りにいた他のメンバーは彼と対面させるために数歩下がつて空間を作る。

「大洗女子学園戦車隊長の西住みほさんですね? よろしく。」

相手に確認しつつ右手を差し出す。握手の構えだと誰もが思いみほに視線を向ける。

「…あ、その…よろしくお願ひします…。」

少しどもりながらみほが握手をする。いつもの緊張する癖だと一同は思うが実はそうではない。彼女の瞳に浮かんでいたのは緊張というより困惑の色であつたがそれに誰も気づかなかつた。ちょうどそのタイミングでチャイムが鳴つた。

「では、これより早速訓練を行います。」

戦車道チームの一団は自分達の戦車を用意（卒業して不在となつたカメさんチームとヘツツァー、アリクイさんと鴨さんチームの3年生をのぞく）してグラウンドに再度集合した。整列した全員の前で新教官が口を開く。

「改めて自己紹介させてもらう。陸上自衛隊仙台霞日駐屯地からやって来た教導科二等陸尉の羽村葵だ。これから1年間は諸君らの教官として付き合うことになるのでよろしく頼む。」

それを聞きながら軽くトリップしてしまつている生徒がいた。

（なかなかの一枚目～！やだかつこいい～！）

最前列でみほの隣に立つ武部沙織であつた。
蝶野教官から一通りは伺つているが、今後は君達が昨年以上の実力を持つために…」

（あんな人と付き合えたら：いやいや、これはきつと戦車道を頑張つてきた私への神様からのご褒美よ！運命の出会いなんだ～！）

就任に際しての訓辞をほとんど聞き流している沙織の表情が若干のにへらとした笑いに変わる。こと色恋沙汰に関して知識はあるが経験の伴わない自分が今必要なのは異姓との交際であることを自認していた。しかし女子校ではなかなかそのきっかけは発生しない。それだけ若い男女にとつては学校とは重要な出会いの場である。

（でも、これから毎日あの教官と一緒に：神様ありがとうございます！）

なんとも都合の良い信心具合である。ともあれここで頑張つて今までに培つてきた恋愛テクを駆使すれば念願だつた彼氏を作れるかもしれない。見た目に彼は20代後半だがそれくらいの歳の差は特に懸念することではないと判断。内心沙織は燃え始めていた。

「そのために、我々も全力で君達をサポートする。よろしく頼む。」

そう言つて締めた葵が頭を下げる。遅れて大洗のチーム一堂も頭を下げて返礼した。そしてここで沙織にとつて重要な質問を投げ掛ける者がいた。

「羽村教官、質問です！彼女はいますかー？」

1年生チームの宇津木優季から質問が出た。それは内心沙織としても気になっていたことだけに心の中で彼女はサムアップした、「グッジョブ！流石我が弟子!!」と…。

「彼女はいない。」

キツパリと言い切る葵。沙織を筆頭に何人かが色めき立つ。やはりそこは年頃の女の子の集まりである。だが…：

「しかし俺には妻と娘がいる。」

その一言は予想外だつたらしい。

「えつ…!?」

「教官奥さんいるんですか！」

「子供さんおいくつですか～？」

最前列で白く固まってしまう沙織。バラ色の恋愛生活は早くも頓挫した。

「はは…馬鹿みたい…。」

「残念だつたな…。」

そんな風に隣から声をかける麻子。どうやら沙織の表情の変化から内心を読んでいた様だがその声が届かないほど沙織は真っ白になっていた。

その後葵と共に指導にあたる3人の部下（男1人女2人）を紹介された後一通りの訓練と模擬戦などを経て本日の授業は終わりを迎えた。各チーム戦車を倉庫にしまい整列する。すでに春の陽は傾き始める世界を赤く染めだしている。

「ありがとう、今日はまだ自分が君達のことを見抜いていいないと言うのもあり、非常にやりにくく感じた者もいたかもしれないのですがそれを謝つておく。明日からは君達をさらにレベルアップさせるべく我々も全力で訓練に挑むからそのつもりで。あと3週間もすれば新入生が来ることだろう。それまでにこれからの方針と上達、そし

て新入生にどうやつて接して指導するかを考えねばならないこともおぼえておいてくれ。以上解散!!」

「「「「ありがとうございました!」「」」」

声を揃えて頭を下げる。

「西住隊長、君は残つて教官室まで来ててくれたまえ。荷物は持つてきてもらつても構わない。他は気を付けて帰れよ!」

それだけ言うと葵は校舎へと向かう。後ろ姿もなかなか精悍だと思うが相手が妻子持ちでは…と思う沙織であつた。ちなみにもう1人の男性教官補佐はザ・自衛官な見た目で彼女持ちだつたとのこと。「早速の呼び出し、みぽりん大丈夫?」

「あ…うん、大丈夫だよ沙織さん。」

少しの間を置いて答えるみほ。だが沙織には少し氣になることがあつた。

「本当に大丈夫? 今日なんだかみぽりん様子がおかしいよ?」「正確には午後からです。西住殿、何か悩み事でもあるならお聞きしますよ?」

沙織の指摘に優花里が続く。午後の履修科目の授業が始まつてからどうにもみほは様子がおかしいのだ。

「指示が遅れたり、弾種を間違えたり、ただ事ではないですよ。」

「沙織さんの通信報告も聞き漏らしてましたし、いつものみほさんならあり得ませんよ。」

「私達はチームだ。だから困つてゐなら頼つてほしい。」

優花里が本日の訓練中の失敗を並べて華も発言し、普段ならすぐさま帰りたがる麻子も心配する。

「ううん、本当に大丈夫だから。じゃあ教官室まで行つてくるね!」

無理矢理感のある笑顔でみほは駆け出していつたが…

「みぽりん!!どこ向かってるの!?」

みほは校舎と反対側、演習コースへと向かつて駆け出していた。

「はつはつはつはつはつ!!みほちゃんは相変わらず慌て者ですなあ！」

教官室にて上着を脱ぎ黒シャツ姿になつた葵は両腕を組んで笑っていた。彼が座る椅子とテーブルを挟んだ向かいの席では思わぬ失敗をしてかしたみほが顔を赤くしてうつむき加減で座つていた。その隣にはくだけた口調の葵の姿に目を白黒させる優花里が座つていた。

「いやあごめんごめん。ほんとのことを言えば安心したよ。やつぱりみほちゃんはみほちゃんだつてね。」

そう言いながら立ち上がり備え付けのポットの前に行きお茶の用意を始める。

「しかしさか大洗で君の隊の教官になるとは思わなかつたな。」

手早く用意してみほと優花里の前に湯呑み茶碗を置く。

「あの羽村教官？西住殿とはお知り合いで？」

「ああ、10年ほど前かな？」

そう言つて自分の椅子に戻り湯呑み茶碗に口つける。

「ん？ちよつと薄かつたかな？」

などと言いつつもう一口啜り：「ま、こんなもんか。」と納得する。優花里も一口飲んでみたがちようど良いくらいに感じた。

「あまり他言してほしくないがね…実は僕も西住流を学んだ門下生なんだ。」

「えつ！男の人なのに!?」

「そう、僕は唯一西住流を学んだ男だ。」

彼の口から出てきた言葉に驚きを隠せない優花里。そもそも西住流と言わず戦車道とは乙女の嗜み。そこに男性が入るのは戦争のイメージなどもあつてタブーとされている。

「優花里さん、羽村さんが言つてることは本当だよ。」

みほが彼の言葉を肯定する。ならばこれは真実だと優花里は理解した。

「僕は昔から戦車道が大好きで、いつかあそこに行くぞつてテレビの

中を指差したもんだつた。でもそれが無理だつて知つたときは
ショックだつたよ。」

組んでいた両腕を机の上に肘つく様に移動させて彼は続ける。

「それでも僕は戦車道をするつて決めてた。華道や茶道だつて男もするつて言つてね。そして高校卒業する前に西住流を学びたいつて、九州の本家をたずねたつてわけさ。」

「私おぼえてる。羽村さんがお母さんに頭を下げて必死に弟子にして下さいつて頼んでた。」

「結局断られたけど、それからも何度も頼んで根負けするまで続けたんだ。そして条件付きで西住流を教えてもらつたんだ。」

『あなたを西住流の門下生として迎えますが、これだけは守りなさい。』

「一つ、むやみやたらと西住流の名を使わぬこと。一つ、西住流の教えを戦争に持ち込まぬこと。一つ、西住流を私利私欲のために使わぬこと。』

師が母が伝えた言葉を弟子と娘が暗唱する。優花里は黙つてそれを聞いていた。

『それから3年間、九州の西住家に住み込み弟子になつたんだ。』

昔を懐かしむような目でみほを見つめる葵。いつしかみほも顔色は元に戻つてお茶を啜つていた。

「すっかり遅くなつてしましましたね。」

「ごめんね優花里さん。」

「いえいえ、西住殿の昔話が聞けて良かつたです。」

すっかり薄暗くなつてしまつてから校舎を並んで出たみほと優花里。その後みほの子供時代の話も交えつつ今後の訓練内容の確認などを3人は話したが気づけばすっかりこの有り様。送つていこうか

?と葵が聞くが2人はそんなに遠くないから大丈夫と断つた。

「しかしさか教官が西住殿と縁のある方だつたとは。」

「う、うん。私も驚いたよ。」

今日のみほが少し歯切れが悪いのはそのせいであつたかと考えた優花里はさらに問いかけた。

「にしても西住殿の動搖ぶり、まだ何か秘密が…」

「な、何言つてゐる優花里さん!?」

動搖度レベルアップ。的外れだろうがさらに突っ込んでみる。

「ひょつとして西住殿は教官に好意が…」

などと適当に言つてみる。

「…」

みほは何も答えない。横目に見てみると街灯の明かりに浮かび上がつたのは先程よりも真つ赤なみほの横顔であつた。

「…うん。私、葵さんのこと好きだつた…。」

「えつ？」

思わず答へが返つてくる。つまりこれは…

(しまつたゞー地雷だつたゞー!)

優花里が思い至つたがまはや後の祭。みほはさらに口を開く。
「うちに来てから1年くらいかな…。葵さんが夏祭りに連れてつてくれて…たぶん意識してなかつたけどあれが初めてのデートだつたのかな?」

脳裏に蘇るあの日の思い出。

『葵さん、あれ欲しい!』

『ようし、射的は得意だ!見ていろみほちゃん!』

欲しがつていたボコられ熊のボコのぬいぐるみを一発で取つて見せた葵の姿が鮮明に思い出される。

「すみません西住殿、デリカシーが無かつたです…。」

優花里の声でみほの意識は現代に戻つてきた。隣を見るとシュンとした優花里がいた。

「優花里さん、大丈夫だよ。もう葵さんは結婚してるんだし…私気にしてないから!それに言うじゃないですか、『初恋は実らない』つて

！」

優花里の方に向き直つてまくし立てるみほ。自分の初恋は初恋で終わつたのだと言い切る。

「西住殿、私を許してくれるのですか？」

「許すも許さないも無いですよ！私達は友達だから！」

「西住殿…。ありがとうございます！」

その言葉が優花里の心に響いた。彼女はみほに最敬礼をして見せた。

「不肖秋山優花里、西住殿に一生お供する所存であります！」

その返答にみほは思わず微笑んだ。

同じ頃：

「ここが大洗女子学園…。」

すっかり暗くなり人気のなくなつた大洗女子学園の正門前に1人の少女が立つていた。

「見ててねお兄ちゃん！お義姉ちゃん！私、乙女の戦車道を極めてみせる！！」

右手で固く握り拳を作る少女が強く宣言する。大洗女子学園の次年度入学式まで残り3週間足らずであつた…。

ニューフェイスです！

学園艦は広い。とにかく広い。小振りな大洗学園とは言えど全長7000メートルを超えるこの舟の内部はさながら迷路も同じである。案内表示や館内地図など無ければ慣れない者などすぐに遭難してしまう。以前も武部沙織が後輩のウサギさんチームと戦車探しをしていて遭難してしまったことは大洗戦車道チームの面々にとつて記憶に新しい。

現実世界においては太平洋戦争中全長263メートルの戦艦大和艦内において度々行方不明者や迷子が発生していたという記録も残っている。

さて、これだけ大きい艦ともなると管理整備するのも一苦労であるがこれは航海管理学科などの学生と運営の仕事である。今日も今日とて彼らは艦内深くで仕事にかかっていた。

「先輩、何か出そうですねえ…。」

航海管理コースの2人の女子学生がそれぞれ懐中電灯片手に真っ暗な通路を前後に並んで歩いていく。こういう状況が苦手なのか後ろを進んでいた子が発言する。

「誰しもそう言うの。今まで私はお化けの類いなんて見たことも無いわ。」

そう言つて先輩と言われた学生はスタスタと歩いていく。後ろの後輩は置いていかれることを恐れて必死に追尾する。

「ここね。」

先輩の方が懐中電灯で用意してきた艦内地図を照らして呟く。通路の先で少し広い空間に出た。それは艦の側部から荷物を搬入するための場所であるが今は使われていない。

「えっと…一番倉庫二番倉庫つと」

懐中電灯の光を四方に向けてみると扉がいくつか並んでいるのを

確認してそちらに2人で向かう。程なく②と書かれた扉を見つけた。

「しつかしこんなところに備品なんか残つてゐるのかしらね？」

「と、とにかく始めましょうよお‥。」

情けない声を出す後輩を尻目に鍵を開けて扉を開放し懐中電灯で中を照らす。電灯のスイッチがあるはずと左から右へと動かしていく。

「ん？」

彼女の懐中電灯で浮かび上がったのは‥

「えつ？」

巨大な影だつた。自動車を上回る大きさ、上部から突き出た棒状の物体、圧倒的な存在感。

「先輩、これ‥。」

後輩も自らの懐中電灯の光をそれに当てる。小さな明かりの追加によつてさらに鮮明となつたその姿。

「‥戦車だわ。」

間違いなくそれは戦車であつた。

「戦車道とは乙女の嗜み、清く強き心を鍛え‥」

同時刻、大洗女子学園のホールにて選択履修科目のオリエンテーションが行われていた。壇上中央には隊長の西住みほが立ち、脇にはチームメイトの秋山優花里が立つて戦車道と大洗女子学園チームの昨年度の活躍をスライドを使って説明していた。

「こちらはプラウダ高校との準決勝の決着がついた瞬間です。Ⅲ号突撃砲がプラウダのフラッグ車であるT—34を雪中で待ち伏せて撃破。一方でこちらのフラッグ車である八九式中戦車はこのように中破されまさに紙一重の勝利でした。」

と言つた具合に説明をしていく。ほぼ無名校の活躍と快挙に新入生達の反応はあるものは息を呑み、あるものは羨望のまなざしを壇上へと向ける。

「なお履修希望者のために、明日の午後からの訓練に見学席を設けますので皆さんどうぞよろしくお願ひいたします。最後に西住隊長から一言。」

「み、皆で見に来て下さい！パンツァー・フォー！！」

多少震えながらも言い切つたみほ。やはり元来恥ずかしがりやなのである。

「…」

そして最前端よりに新入生達の中でもとりわけ真剣な表情の生徒がいた。肩ほど長さの黒髪に非常に整つた顔立ち。体育座りの体勢で両腕を組み、一真に壇上に視線を向ける。

「…来て良かつた。」

その小さな声は誰にも聞こえなかつた。彼女の周囲では同級生達が思い思いの集まりとなつて小声で話などしている。彼女はそんな中で1人であつた。

「…」

再び無言で壇上を見つめる。

「？」

すると袖へはけようとしたみほが立ち止まつた。それも件の新入生のいる辺りに顔を向けて。

「…」

ほんの1、2秒2人の視線が重なり、思わず両者会釈する。

「？西住殿？」

立ち止まつたみほに声をかける優花里。その声で我にかえつた慌ててみほが返す。

「あつ…何でもありません。」

それだけ言うと再び2人は袖に向かっていく。それを見上げていた彼女はポツリと呟いた。

「やつぱり来て良かつた。」

そう言つて満足そうな笑みを浮かべるのだった。彼女の名前は明日香澄（あすか・すみ）、あの日大洗女子学園の前で握りこぶしを作つて気持ちを固めていた女の子である。彼女は地元ではない東京からわざわざ単身乗艦してきた新入生であつた。

「まつたく何やつとるか!! グラウンド一周追加！」

その日の午後、例によつて戦車道履修生達は訓練に励んでいた。今彼女達は射撃訓練を行つており、各車用意された的を狙い停止射撃、行進間射撃を繰り返していた。

「スカッ、どこ狙つて射つてんだ！ グラウンド一周追加!!」

そんな彼女達へメガホンを使つて檄を飛ばすのは短髪に四角い顔、どつしりとした筋肉質なTHE自衛官と言える教官補佐の太田功三等陸曹である。ようやく季節的に似合い出した黒シャツに迷彩ズボンという出で立ちの彼は霞目駐屯地で射撃のエースであり、こと射撃訓練での失敗に煩い。目立つたミスには容赦なくランニングを言い渡す。最初は1ミスごとに五周と言われたが現在は一周に下方修正された。

「良いかあ？ 敵は常に動き回る。こちらはそれに対して臨機応変に擊ち込まねばならん！ 数で劣るなら腕で勝れ!! 戦車とは『月月火水木金』で学び培うものなのだ！ 敵を見つければ容赦するな！」

それが太田教官補佐の信条だつた。当初は困惑を極める大洗女子であつたが彼の真剣なに理解を深めてきていた。またペナルティーが課せられた生徒がいれば太田自らランニングに付き合うその姿に好感を抱くものさえいた。中でも特に…

「特訓こそ青春の花道!! 根性がものを言う!! 気合い入れてもう一撃!!」

「「おーっ!!」」

車長磯辺典子の声にメンバーが応える。八九式中戦車を担当しているバレー部4人のアヒルさんチームは太田の熱血指導に最も共感しているらしい。

「ようし！次は小休止後隊列訓練だ！全員車輛庫前へ移動!!」

太田の指示に従つて各車移動を開始。ちなみに本日参加しているのは八九式中戦車（アヒルさん）Ⅲ号突撃砲（カバさん）M3リー中戦車（ウサギさん）、三式中戦車（アリクイさん、カモさんの臨時混合編成）の4チーム。

IV号中戦車（あんこう）は車長と装填手、砲手が不在のため只今より参加、38tヘツツァー（カメさん）は乗員不在のため不参加、ポルシエティーガー（レオポンさん）は人員不足のため不参加。

「こちらです。」

西住みほ、秋山優花里は先ほどの航海管理コースの2人につれられて艦内深くに足を運んでいた。新たな戦車が発見されたとの連絡を受けた大洗女子学園戦車道チーム。今は一両でも多くの戦力を欲している彼らは直ちに現場へ向かつた。

「ここは管理している我々も何年も放置していた区画で普段は入れません。たまたま備品を探しにきたところ発見しまして…。」

そう説明しながら一堂を二番倉庫へと案内して鍵を開きどうぞと手で促す。

「失礼します。」

「今電気を…。」

みほがまず入る、そして続いて案内してきた航海コースの2人組が入つて電機のスイッチを入れる。

「こ、これは…。」

それは確かに戦車であつた。しかも今まで見つけてきた戦車に比べ保存状態が良好であると見た目にも思えた。森林迷彩模様に丸みを帯びた砲塔に片側に8つの転輪。この戦車は…

「センチネル…。オーストラリア製の巡航戦車!! しかも6ポンド砲搭載型です!」

続いて入ってきた優花里が興奮して言う。

「これなら戦力となりますよ!」

センチネル巡航戦車。鋳造による一体構造の車体をもつ最初の戦車であり、オーストラリアで大量生産された唯一の戦車でイギリス以外で造られた数少ない巡航戦車。イギリスの巡航戦車クルセイダーを手本とした車輌である。本来は2ポンド砲を搭載した車輌であつたが非力な2ポンド砲を6ポンド砲へと換装案が提出される。しかし前線で6ポンド砲が大量に必要とされたため計画は設計等で終わってしまった。

「でもどうしてこんな所にあつたんでしょう? それも6ポンド砲を搭載しているということは少なくとも戦後に手が加えられた車輌ということですし…。」

優花里が唸る。確かにその通りである。いつ? 誰が? なぜここに?なぜ6ポンド砲なのか? 疑問が多々生まれた。

「どこかしらに欠陥でもあるのかもしれませんがとにかく運び出しましょう。貴重な戦力ですし使えなければ転用することも出来ますから。」

ともかく使えるものなら使わなければ宝の持ち腐れである。みほはそう言うと機している回収班へと連絡すべく携帯を取り出した。

「おかしいですね…。」

生徒会室のテーブルの上に五十鈴華はいつくものファイルや資料

を広げて困惑していた。

「見つかりませんか…。」

その華の様子に会長机に座る現大洗女子学園生徒会長が声をかける。

「はい、それらしき戦車が存在したという資料はあつたんですが：試合に使つたとか整備を施した、主砲を換装した、どこから購入したというような資料がどこにもありません。」

華が調べを進めているのは本日発見されたセンチネル巡航戦車の資料である。しかし不思議なことにこれと言つた資料が無いのである。

「しかし戦車はある…。ミステリーですねえ。」

会長も両肘を机について頬を手にのせ考える。しかし答えは出ない。

「とりあえずそれは置いておきましよう。操縦系のマニュアルも無いのなら自分達で作成して下さい。コンピュータールームの使用許可を出します。戦車の登録等の書類は後でお渡ししますのでお願ひします。」

会長がそう言うと華は「はい。」と応えてテーブルの上に広げていたファイルや資料の束を手早く片付けて出ていった。

一方で再びグラウンド。小休止を終えて戦車隊は次なる

「X陣形から逆V陣形へ展開、同時に後進へ。」

監視用の櫓の上から背の高いボブカットの女性がグラウンドの戦車隊を見下ろしつつ隊列訓練の指示を出す。陸上自衛隊の迷彩戦闘服を着込んでいる彼女は太田と同じく教官補佐として着任した筑波さつき二等陸曹である。彼女は羽村葵教官が選んだ操縦手で霞日駐屯地でもピカイチの腕前を持つていた。

「後進しつつ砲塔を90度右旋回、只今より10秒後に停車して待機。」

その指示に忠実に従う大洗戦車隊。もともと結束力の高いチームだけに隊列運動はお手のものであつた。そしてこの間にもどつてきましたみほ、優花里、華の3人が合流する。

「どうだ？」

停車指示を出したところでさつきは後ろから声をかけられた。

「羽村二尉、滯りなく順調です。」

上がつて来た上官に敬礼し報告する。葵もまた敬礼で返す。ちなみに彼は太田と同じく黒シャツに戦闘服の迷彩ズボンである。

「よし、それじゃ次の項目に移つてくれ。」

「はっ!!」

葵の指示に答えるとさつきは通信機のマイクを手に取つた。

「これより森林フィールドコースの行軍訓練に移る。あんこうチームを先頭に各車一列縦隊へ。準備でき次第移動開始!!」

指示を飛ばすとすぐに戦車達は隊列を整えて進み始めた。そこでさつきは葵の背後に誰かいることに気付いた。

「羽村教官、その子は？」

葵の後ろについてきていたのは大洗女子学園の生徒であつた。さつきにはおぼえの無い顔であるため戦車道履修者ではない。

「グラウンドの様子を盗み見ていたからしょっぴいてきた。」

笑顔で紹介する葵。女子生徒は少しうつむき気味になる。

「すいません…見学は明日だつたのは分かつてたんですが…どうしても見たくて。ごめんなさい！」

彼女は身体を深く曲げて謝つた。

「まあ何か邪魔をしたわけではないし…俺は別に構わないが。筑波君はどうかな？」

「私も同意見です。」

2人の言葉に彼女は顔を上げる。

「えつ…それじゃあ…」

「見学して良いよつてこと。」

さつきがウインクして言うと彼女は一気に笑顔になつた。

「ありがとうございます！」

先程よりも心持ち深めにお辞儀をする女子生徒。ここで葵は問い合わせた。

「ところで君、名前は？」

「はい！明日香澄です」

その名前を聴いた葵が首をかしげる。

「明日香？」

そして顎に左手をあてて少し考えると…。

「思い出した！君は明日香耕作の妹さんだ！」

「えっ！お兄ちゃんを知ってるんですか!?」

思いもよらない言葉に澄が驚く。

「やつぱり。俺とお兄さんは同じ高校の同級生だ。どこかで見たような気がしていたんだ。どことなく耕作と同じような雰囲気だからだ。」

明日香耕作、葵の高校時代の友人で高校剣道で全国大会個人優勝もしたほどの男だった。現在は剣道の選手として、道場の師範代として活躍している。

「君とは何度か会つたこともあるな。しかし世間とは本当に狭いものなんだな。」

そう言つたところで通信機から声が聞こえた。

『こちらあんこうチーム、森林フィールドコースの予定地点Cに到着しました。』

すぐさまさつきがマイクで指示を出す。

「よろしい、では通常周回コースを回りフィールド内にて模擬戦を行う。戦車前進!!』

『了解!!パンツァー・フォー!!』

そこで通信は終わつた。スピーカーから流れてきた声を聴いた澄は葵に訊ねる。

「き、教官！今の声は西住隊長ですか⁈」

「ああそうだ。この後は模擬戦をするからしつかりと見ておきなさ

い。」

そう返すと彼は予備の双眼鏡を渡す。受け取った澄は嬉々としてそれを構えて森林フィールドを見る。そんな姿を葵とさつきの2人は実に微笑ましげに見て いるのだつた。

走り出します！

入学式から1週間を過ぎていよいよ大洗女子学園戦車道は新履修生を迎える時期となつた。オリエンテーションや見学会の反応もよく新入生が来ることは疑いようがなかつた。しかし：

戦車倉庫と隣接されたプレハブ小屋。ここは戦車道用のミーティングルームである。今ここに西住みほ隊長が一番奥の席に座り、その左右に先日副隊長に任命された金髪ショートカットにドイツ軍帽を被りコートを羽織つたエルヴィンと室内唯一の2年生で茶色がかつた髪色の澤梓が座り、各車の車長として体操服姿に濃茶のショートカットの磯辺典子（アヒルさん）、赤いマフラーがトレードマークの力エサル（カバさん）、猫耳をつけ長い髪と分厚い眼鏡で表情の分かりにくいねこにヤー（アリクイさん）、新風紀委員長の腕章を着けた黒のかつぱ頭のゴモヨ（カモさん）、作業着に茶髪のボブカットとそばかすが特徴のツチヤ（レオポンさん）がテーブルに座り、秋山優花里がみほの後方に取り付けられたホワイトボード前に立つていた。

「戦車道履修者の増員は疑いようがありません。独自アンケート調査によるとすでに20人近くの生徒が選択希望しております。」

人が集まるに越したことは無い戦車道。今年度まずはまずのスタートであるが：

「しかしグーデーリアン、全員が残るとは限らんぞ。」

力エサルの指摘はもつともだつた。ちなみにグーデーリアンとは優花里のソウルネームである。仮履修期間後正式に残るのは何人だろうか。実際に戦車道を始めて理想と現実のギャップから辞めてしまう人も考えられるが…。

「そこは私達がどれだけフォローして真剣にさせられるかです。」

質問に答える優花里。前回は履修者への大きな特典や生徒会の魅力的な煽動（プロパガンダ）、そして後に明かされる廃校の危機もあってメンバーは抜けることなく戦い続けた。今年度は特典も廃校の危機もない。背負うものが少ないに越したことはないがそれで人が集

まらなければ話にもならない。出来ればいなくなつた人員の補充と新戦車の乗員は確保したいところである。そんな中で優花里は朗報を報告した。

「元生徒会広報担当代理佐上円香（さがみまどか）さんと元ヘツツァー臨時装填手だつた真那園江（まな・そのえ）さんをスカウトしました。お2人とも履修を了承しておりますのでカモさんチームへの編入を予定しております。」

佐上円香、愛称サド香と真那園江、愛称マゾ江は以前ヘツツァーの装填手兼砲手だつた生徒会広報担当河嶋桃がアンツイオ高校に拉致された際に臨時に臨時で広報と装填手をそれぞれ担当していた学生である（もつとらぶらぶ作戦です第3巻「続・アンツイオ日和」参照）。とくにヘツツァー装填手の経験があるマゾ江が来てくれることに一同安心した様子を見せる。それにカモさんチームのルノーB1bis重戦車は本来4人乗り車輛があるのでより分担しての行動で負担の軽減と戦力の向上が見込まれた。

「履修生確保に関しては順調ですが、目下の問題は今後活動する上で必要になつてくる整備などであります。現在はツチヤ殿に頑張つていただいておりますがこのままで大会に出ても整備や修理が追いつかなくなると予想されます。」

この問題こそが実は大洗戦車道現段階での最重要課題である。「私達もお手伝いしていますが本格的な対策となると素人では手に余ります。」

優花里の指摘に梓が続く。当の自動車部新部長のツチヤが口を開く。

「ま、正直に言うと素人レベルがいきなり本格的な整備に回ると間違いないと怪我するからやめといた方が無難かな。」

「自動車部の新入生はどうなつている？」

エルヴィンからの質問にツチヤは首を左右に振つて答えた。

「一応見学や仮入部希望はいくつか来てるんだけど、戦車道に参加とその整備が付いてくるつて話したら及び腰になつちゃつて。」

「あ、あの…その…が、外部に依頼することはできませんかな？」

少しづつ小声になりながらねこにやーこと猫田が質問すると

「業者に依頼できるほどの余裕は我々には無い。」

ねこにやーの隣に座るカエサルの指摘に数人がため息をつく。どのつまりはそこなのだ。他校ならば専門の整備部がいたり、業者に依頼している。黒森峰に至っては自前の工場まで存在している。大洗が戦車道のおかげで存続でき、前生徒会長の角谷杏からは次代の会長に戦車道のバツクアップを厳命し、地元からも寄付や募金を県を通じて行われているがまだまだ潤沢には程遠かつた。ともかく現状でできることを優花里が提案する。

「それを言つても仕方ありません。自動車部では引き続き新入生を募集して当面は我々がツチヤ殿のバツクアップをしつつ方法を模索しましよう。」

「ところであの新しい戦車はどうなりました?」

「センチネルは完璧です。先日の夜に行つた夜間テスト走行も無事終了しました。新入生用の新戦力となると思われます。」

続いてゴモヨから出た質問に優花里が答える。センチネルは無事整備を終えていた。速力は最高時速43kmと改良されておりクルセイダーに匹敵する脚（本来のセンチネルは最高時速39km、クルセイダーは最高時速45km）、57mm6ポンド50口径砲もクルセイダー やチャーチル並みの攻撃力を持つている。大洗期待の新戦力である。「そもそもあの子は保存状態がとても良好だつたからそんなに手はからなかつたよ。梓ちゃんやねこにやーさん達が手伝つてくれたし。ありがとね、助かつたよ。」

「いえ、副隊長としても色々勉強しないといけませんし…。」

「ぼ、僕はその…て、手先は器用だから…何かに役立てたいなと…。」

梓は少し照れながら、ねこにやーはうつむき両手の指でもじもじとしながら返す。

「2人ともありがとうござります。」

みほの感謝の言葉にさらに2人は照れぎみになる。

「しかし、なぜあの戦車はあんなところに?」

カエサルが出したのは皆の疑問だつた。戦車に関する記録が少な

いのも気になる。使えるものなら使いたいのだが個人の持ち物である可能性も考えられなくもない。

「それに関しては事情を知ってる方に心当たりがあります。」

みほの言葉に全員が目を向けた。

その日の放課後：

「いらっしゃい！さ、上がつて上がりつて!!」

「お邪魔します。」

「失礼致します。」

みほと優花里は冷泉麻子の家から通学路途中に住んでいるとあるお婆さんの家をたずねていた。

「それで？私に何を聞きたいの？」

お茶をちゃぶ台に三つ用意して2人にすすめるお婆さん。彼女の名前は月江さん。実はかつて大洗女子学園で戦車道を履修していた人物で国際交流戦のメンバーでもあつた。

「はい、実は先日新しい戦車が学園艦内の閉鎖区画で発見されました。」

「学園内の資料にはほとんど記録が残されてないんです。それで月江お婆さんなら何か知ってるんじゃないかなって。」

優花里が今回たずねた理由を話してみほが続く。2人の言葉を聞いた月江は目を丸くした。

「おやまあ、まだ戦車が残つてたの？」

「はい、こちらです。」

優花里がケータイで撮影した巡航戦車センチネルを見せると。

「！」

月江は驚き、そして一旦ケータイをちゃぶ台に置いて改めて眼鏡をかけてから今一度画面を見た。

「…センチネル。」

月江の口から出てきた言葉にみほと優花里はお互いを見て頷いた。
「やつぱり…存知なんですね？」

優花里の質問に月江は嬉しそうに頷くと両目を閉じた。端からもそれは過去を懐かしみ、その情景を呼び起こうとしていることが見てとれた。

「まだ残つてたのね…。」

そうポツリと漏らす。みほはその瞼の裏に浮かび上がつたものが何なのか問い合わせた。

「お話ししていただけますか？」

「…」の戦車が大洗に来たのは今からそう…49年前。私が18歳の時だったわ。」

49年前、当月月江お婆さん達大洗女子学園戦車道一同はオーストラリアにて親善のためにメルボルン大学付属高校戦車道とのエキシビションマッチに参加していた。その2年前と前年にアメリカのアントリミティドクラスでの親善試合にて見事勝利をおさめたことで日本戦車道の名は世界の関係者達の間で一躍有名になつていた。

その試合の終盤、海岸地帯での戦いで月江が指揮する五式戦車が放つた一撃が自分達より一段高い位置にいた敵車輛センチネルの足元に着弾。続いて僚機の砲撃によつて白旗が上がつた。しかし…

「危ない！」

白旗が上がつたセンチネルの足元が崩れた。車輌は撃破判定のため動くことが出来ずにバランスを崩した。

「ああっ！」

月江はそのままセンチネルが斜面を滑落して行く様を見た。途中回転を挟みつつ海へと落ちてしまう。

「いけない！」

月江はすぐさま戦車を飛び出し駆け出した。

「ロープ用意して！牽引ワイヤーも!!」

「信号弾撃て!!」

「命綱下さい！自分が追います！」

残された2両の戦車が運営に事故を知らせ月江をサポートするべく迅速に対応する。こうしている間にセンチネルはどんどん沈んで行く。

「はあっ!!」

気合いを入れて月江は海に飛び込み数メートルを泳ぎセンチネルのキュー・ポラに立つと膝上くらいで水位は止まっている。どうやら沈みきつたらしい。月江は車長が出入りするハッチの蓋に手をかけた。だが水中では陸上とはまるで重さが違う。女子高生1人の力では開かない。急がなければ乗員達が水死してしまう。

「隊長!!」

命綱を持った五式戦車の装填手が追い付いた。

「手を貸して!!」

「はいっ!!」

2人がかりで取っ手を掴み渾身の力で開く。どうやら内部もほぼ水没しているようだ。

「早く!!」

月江が叫び、2人でまず蓋の真下にいた車長を引っ張りあげる。さらに月江が命綱を片手に車内に潜る。追い付いた応援も加わり総出で月江が車内で命綱を結んだ救助者を引っ張る。潜った彼女は限界まで息を止めて引っ張られる救助者を支える。

「運営のレスキューが到着した頃には、センチネルの乗員5人全員を

引っ張り出して介抱していたわ。」

そして月江は一服のお茶を啜つてささに続ける。

「どうやら全員落下した時の回転で気絶したらしくて自分達で脱出できなかつたの。」

「…」

月江の話を聞いていた優花里が無言で隣に視線を向けるとみほが目を見開いて固まつていた。

「彼女達はすぐに病院へ運ばれて、皆意識をすぐに取り戻したわ。幸い後遺症もなく皆五体満足だつた。翌日お見舞いに行つたら皆して涙を流してねえ。」

そこまで言うと月江はみほに顔を向けて口を開いた。

「西住さん、あなたは黒森峰で川に落ちた戦車の乗員を助けたんですけどつてね？」

「…はい。」

みほにとつて忘れることの出来ないことだつた。2年前の高校戦車道全国大会決勝戦、プラウダ高校対黒森峰女学園。悪天候の中川沿いの道であやまつて川へと落ちたⅢ号戦車を助けようとみほはフラツグ車を飛び出した。乗員は救助できたが、川から上がつたみほが目にしたのは白旗が上がつたフラツグ車であつた。黒森峰が十連覇をかけた試合はこうして幕を下ろした。

「あなたとは立場も情況も違うけれども私はこう思うの。人の命を助けるのに何の躊躇いがあるの？ 誰かの命を踏み台にして得る勝利はスポーツじやない。」

そう言いきると少しの間ができた。みほと優花里はその言葉をゆっくりともう一度頭の中で繰り返す。

「人それぞれの意見はあるけれど、少なくとも私はあなたの行動は間違つていたとは思わないわ。」

「月江お婆さん…。」

「あのお見舞いの時に見た彼女達の泣き笑いの顔を見れば、試合を中断してしまつた時のことなんて吹つ飛んだわ。」

そう言われてみほは思い出す。

『私、西住さんが大洗で戦車道を始めたって聞いて、嬉しかつたです！』

去年の戦車道全国大会決勝戦前にあの時助けたⅢ号戦車に乗つていた赤星小梅にかけられた言葉がみほの頭の中で再生される。小梅は助けてくれたのもあるだろうから礼は当たり前だ。しかしみほが行動していなければ生命の危機だつたのかもしれない。そしてあの時の事があつたから自分の戦車道があると今なら言える。また大先輩でもある月江お婆さんから伝えられた言葉にさらに自分は間違つていなかつたと思うとみほの目から涙が一筋こぼれた。

「…月江お婆さん…ありがとう。」

「ふふっ、あんまり泣いてるとべっぴんさんが勿体無いよ。話を戻すけど、日本へ帰るときに相手チームの子達がやつて来てセンチネルを私達にプレゼントしてくれたの。」

「戦車1輛丸々ですか!?」

月江の言葉に驚く優花里。月江は頷いて続けた。

「私達から贈る友情と感謝のしるしだつて言つてたわ。」

なんと気前の良い話だ。これが欧米の感覚と言うものなのだろうか。

「それで、センチネルは出場できるの？」

今日何度も驚きを感じていたみほと優花里に月江はたずねた。直ぐ様復旧したみほが返す。

「は、はい！協会の審査は無事通過しました。」

「来月練習試合でお披露目します！」

「そう！通過したのね！」

優花里が補足すると月江は感慨深げに頷いた。

「あの…センチネルを試合には一度も出さなかつたんですか？」

「そうなのよ。と言うか出せなかつたのよ。あの戦車は主砲と他に一部改造が施されてるのが原因で当時の規定に通らなかつたの。」「そうだつたんですか。」

通りで試合に出たりした記録が無いはずである。戦車道規定のた

めに当時出場できず練習にしか活用出来なかつたのだ。

「海外ではあれくらいの改造は普通なんだけど…。結局私達はあの子を後輩に託すことになつた。それからやつと許可が下りた頃に戦車道が廃止になつてしまつたの。」

「でも、使える戦車は全部売り払つてしまつたと…。」

確かに昨年度の準決勝の折、前生徒会長の角谷杏は使える戦車は全て売り払われ、自分達が使つてているのは売れ残りになつた物だと発言していた。

「当時最後の履修者と生徒会達の計らいでなんとか売却は免れたの。ただその後どうなつたかまでは私達は知らされなかつたわ。多分紛失か何かしらの理由をつけて隠したんじやないかしらね？」

どうやら過去にも杏と同じ考え方で戦車を守つた人物がいたらしい。大洗女子学園とオーストラリアの高校との友情の産物、値段なんてつけるものではない。そしてみほは結論着けた。

「それがたまたま見つかつたんですね。」

「あの子の活躍、夢のようだわ。必ず試合は見に行くわね。」

「はい！」

「ぜひとも来て下さい！」

月江が見に来るのなら全力で試合にのぞむのは勿論、センチネルの華々しいデビューモードを飾らねばなるまい。2人は力強く答えた。

「これでまた大洗はまた強くなるわね。」

「そうですね、戦力は上がりますが…。」

月江の嬉しそうな言葉に優花里が少しテンションを落として答えた。

「あら？ 何かあつたの？」

その様子から月江は何かを感じ取つた様だ。どうにも優花里はこういったことが顔に出てしまうタイプらしい。

「あ、その…」

「だ、大丈夫ですから。」

少しきよどる優花里をみほがフォローする。しかし月江は優しく問い合わせた。

「何か困ったことがあつたなら、自分達で抱え込まずに誰かに聞いてもらえば解決するかも知れないよ。私はもう戦車道はできないけど、何か役に立てるかも知れないでしょ？」

月江の好意が2人の心に響く。

「実は…」

みほが現在問題となつてている整備について話した。なんとかしなければ全国大会で大きな足枷となりうることでは月江にもよくわかつた。

「なるほどね…。整備の人手不足。」

そう言つて笑みを浮かべる月江。何か良い案があるのだろうか？「2人とも学園七番通りの裏にあるアミーノってスナック知ってるかしら？」

みほと優花里は首を左右に振つた。唐突に何を言うのだろう？

「聞いたところによるとそこのマスターは立花さんと言つて、昔自衛隊で戦車の整備をしていたそうよ。」

月江の口からもたらされたのは2人にとって思わぬ情報であつた。

翌週月曜日 大洗女子学園

「新履修希望の皆さん、私が隊長の西住みほです。」

ついに迎えた新入生を迎える日。戦車保管倉庫前にて新履修生が集まつていた。その数約30人である。初めてみほ達がここに集まつた時の倍近くである。

「まず本日は諸君らに我々が使つている戦車の説明と一通りの訓練に参加してもらう。」

みほの左隣に立つエルヴィンが続く。ちなみにここにいるのは隊長のみほ、副隊長のエルヴィンと梓、優花里に冷泉麻子、五十鈴華、武部沙織、各車の車長、そして教官補佐の駿河三枝（するが・みえ）三

等陸曹である。他のメンバーはそれぞれ室内での訓練やロードワークに行っている。

「では皆さんの気になる戦車へと自由に向かって下さい。それぞれの車輌の特徴や動かしかたなどを説明いたします。」

セミロングの黒髪、自衛隊の迷彩戦闘服にキャップ姿の駿河教官補佐の声で全員が倉庫内の戦車を目指す。ちなみに彼女は優花里と同じ戦車マニアである。

「では皆さん、説明よろしくお願ひします。」

新入生達はこぞつて戦車へと群がる。果たしてこの中から何人が残るのか。それとも誰も残らないのか。それはみほ達の双肩にかかるつていた。

練習試合決定です！

大洗女子学園の戦車道に新入生が入ってきたその前日のこと…。

戦車道が休みのある日曜日の昼下がり、カバさんチームの砲手左衛門佐はジャージ姿で居間で映画を観ていた。ちなみにカバさんチームの4人は2階建ての借家をルームシェアしている。

『魔界のうぬら、地獄へ戻れい！』

「もんざ、何観とるぜよ？」

片目を瞑り真剣な顔でテレビを見ている左衛門佐に居間へと入ってきたおりようが問い合わせる。彼女は半袖シャツとスパッツの上から半纏を羽織っている。ちなみにカエサルとエルヴィンは買い出しに出掛けている。

「映画「魔界転生（まかいてんしょう）」だ。」

「ふむ、柳生十兵衛が村正を手に転生した亡者と戦う映画ぜよ。」

そう言いながらおりようも腰かける。さすがに歴女揃いのチームでも戦国、幕末を好みだけあって時代劇には目がない2人だった。画面を見れば今まさにテレビの中では柳生十兵衛が妖刀村正を、宮本武蔵が木刀をして激闘を繰り広げていた。

ピーンポーン♪

突如場面に関係なく響く玄関の呼鈴。

「ん？」

「誰か来たぜよ。」

映画を止めて2人で立ち上がり玄関へと向かう。

「頼もう！」

呼鈴に続いて頼もうとの女性の声が…。

「な、なんと！道場破りか！？」

「ここは道場ではないし今時流行らんぜよ。」

左衛門佐の驚きによりようが突っ込む。玄関の曇りガラス越しに

数人の影を2人は認めた。

「新聞なら間に合っているぞ。」

「宗教もお断りぜよ！」

「どちらでもありません。我々は大洗女子学園の今年度の新入生です。こちらは戦車道履修されている力バさんチームのお宅で間違いませんか？」

変なセールスだつたら断ろうとしたがどうやら想像していたような者では無いらしい。

「確かに相違無い。私は左衛門佐だ。」

「同じくおりようぜよ。」

「（）多忙のところ恐縮ではありますが、一目お目通り願えませんか？」
玄関越しに挨拶すると今度は違う声が聞こえた。断る理由が特に無いので2人はお互に頷き合う。

「良いだろう。鍵は開いてるぞ。」

左衛門佐がそう言うと引き戸が開き…

「「はじめまして！」」

3人の少女が入ってくるなり並んで頭を下げた。そして練習したかの様な動きで揃えて頭をあげる。

「我々は大洗女子学園の戦車道に憧れ今年度入学いたしました新入生です。私は宮本いつき（みやもと・いつき）、ソウルネームは武蔵。」
真ん中の少女が自己紹介する。セミロングほどの黒髪に白鉢巻きをして服装はミニスカートに春物のジャンパーを合わせている。背丈は150半ばくらいに体の線はやや細めだろうか。しかし声は力強くよく通っている。

「同じく柳乙十葉（やなぎ・おとは）、ソウルネームは十兵衛。」

続いて彼女の左隣にいる背丈は武蔵と同じくらいの少女が自己紹介する。こちらは茶髪のポニーテールで左目に刀の鍔をあしらった眼帯を装着している。服装は黒の長袖にジーパン、白いベストと動きやすそうな機能性が感じられる。

「同じく鳩村瑠璃（はとむら・るり）、ソウルネームはシャルル。」

最後の右隣の少女が口を開く。ブラウンのショートヘアにこちら

は白いジーンズに茶色の革ジャン姿で背丈は武蔵、十兵衛の2人よりも高いため背の低いおりようなどは少々威圧感を感じる。ともすればカバさんチーム一番の長身力エサルと遜色無いのではと左衛門佐とおりようは考えた。

「「先輩、よろしくお願ひいたします！」」

予想しなかつた様なことを言う後輩を前に左衛門佐とおりようは目を丸くして固まつた。

これは大洗女子学園の新歴女チームが産声を上げた瞬間だつた。

「練習試合でありますか!?」

同じ頃、知波单学園戦車道隊長室にて隊長の西絹代は副隊長の福田と共に雑談しながらお茶を飲んでいたところかかつてきた電話に応対していた。

「是非もありません！はい！はい！了解いたしました！よろしくお願ひいたします！ではまた日を改めてご連絡差し上げます！こちらこそありがとうございます！」

頭を下げて礼を述べると西は受話器を戻して福田に命令した。

「福田!!すぐに玉田、寺本、細見をここに呼んでくれ！」

「はっ!!了解しましたであります！」

すぐに福田は隊長室を飛び出していく。

「ふう…。」

それを見送つた西は電話がかかる前に座つていた応接ソファーに腰掛けて飲みかけの少々冷めたお茶を一口啜ろうとした。

「失礼いたします！」

その時、早くも福田が戻ってきたため西は驚き危うく湯飲みを落としそうになつた。

「早いな!?」

「たまたまお三方すぐそこでお揃いだつたもので…。」

「…まあ良い。全員入れ!!」

気はそがれてしまつたが早く事が運んだのだから問題は無いと西は思い至り、お茶を一気に煽つて立ち上がる。

「集まつてもらつたのは他でもない。練習試合が決定した！」

隊長用の執務机の前に西は立ち、その前に立つた4人の隊員に語り出す。向かって右から低身長の副隊長の福田、三つ編みの副隊長玉田、髪の毛をロール状にして頭上に乗つけた細見、ウエーブがかつたショートヘアの寺本が並ぶ。まずは玉田が口を開き寺本が続く。

「練習試合でありますか？」

「相手はどうちらの？」

「相手は…大洗女子学園だ。」

「「?!」」

電話の相手が大洗だろうと予想していた福田以外の3人は息をのむ。

「日取りは5月の第1日曜、参加車輛9輛の殲滅戦ルールで場所は大洗だ。」

「…」

「質問はあるか？」

西は4人の表情を一つ一つ確認するかの様に見てから続けた。おずおずと手を上げながら玉田が質問した。

「突撃は…」

「却下だ。」

「「隊長!!」」

「唯むやみやたらと突撃しただけで勝てはせん！ここは戦略を練りに練つて行くのだ！」

常套手段を却下され一気に涙目になる福田を除く3人だが西は右手で握りこぶしを作つて語る。4人にはそれが理解できた。昨年の大学選抜との戦いでの経験は彼女らにも影響を与えていた。

「突撃は最後の手段、まずは部隊の編成からだ。福田!!」

「はいあります！」

最後には突撃もあり得るところは知波単故なのか…。ともかく

「一式は出せるか？」

「現段階で2輜です！急げばおそらくもう1輜は用意できるかと思われます。それと三式砲が間もなく最終試験を迎えるのでこちらも出せると思われます。」

「よし！寺本、情報科へ出向き大洗の戦車の資料を頼む。9輜と言うことは新たな戦車を手に入れているということだ。何でも良いから情報を掴んでほしい。」

「はいっ！！」

「細見は各隊員に通達し1時間後に戦車倉庫前に集合するようにしてくれ。」

「はっ！！」

「福田と玉田は作戦会議に必要となる資料を用意してくれ。大洗の地図、考えられる天候に昨年の大洗で行つた聖グロとの試合や我々も参加した親善試合の映像などを頼む。」

「はいります！」

「了解であります！」

「総員かかり！」

知波単の4人の隊員は突撃もかくやと言う勢いで隊長室を飛び出して行つた。

1時間後、集合した隊員達の前で大洗との練習試合が決定したこと

が伝えられた。

「センチネル!!まだまだ旋回が甘いぞ！タイミングとバランスを身体に刻め!!もう一度だ！」

「ヘツツァー、砲塔が回らない分は脚回りで補いなさい！Ⅲ突も同じ

よ！」

「三式！しつかりと狙え！グラウンド一周追加！」

「ルノー、その調子だ！次は登坂して稜線越えると同時に狙え！M3
は引き続き行進間射撃！」

新入生を迎えて2周目。段々と慣れてきた新入生相手に監視楼上から葵、筑波、太田、駿河の4人の教官が担当している車輌へと指示を飛ばしていた。現在練習用のトラックや射撃場にて新入生の中でも実力が着き始めたチームと新メンバーを入れた既存のチームが訓練を行っていた。

「野島さん!!もう一度行くよ！」

「はい！」

センチネルの車長席に座る明日香澄からの大声に同じく大声で操縦手の野島椿（のじま・つばき）が返す。銀髪ショートヘアが特徴で新履修生達が集まつたときに偶々センチネルの前で2人並んだのがチームを組んだきっかけである。

「良いよ！その調子その調子!!」

キューポラから身を乗りだして澄は周囲を確認して声を出す。

『次の右ターン後に左砲戦だ。並べてあるドラム缶の山を躍進射撃で狙え。』

「了解！」

羽村教官からの指示に反応して直ぐ様中へと戻る。本来5人乗りのセンチネルであるが現在彼女達は4人でチームを組んでいる。澄が車長と通信手を兼務しているのだ。続いて砲手と装填手に指示を出す。

『鞍馬さん、篠さん、次の右ターン後に躍進射撃で左砲戦！目標は並べてあるドラム缶よ！』

「了解！」

先に返したのは砲手の鞍馬由岐（くらま・ゆき）、風紀委員では無い

が少々長めのおかっぱ頭と花飾りの付いた髪留めを着けた新入生。視力と集中力の高さは五十鈴華や左衛門佐も認めたほどの持ち主で期待の新人である。

「まかしとき！」

続いて返事したのは装填手の篠真厘（しの・まりん）。肩ほどまでのナチュラルな茶髪に自称関西の田舎出身で変な関西弁と山育ちの体力自慢とのこと。関西弁はともかくとして体力自慢ならば装填手にうつってつけである。

「ターンします！」

「左砲戦用意！」

椿の言葉に合わせて直ぐ様澄が指示を出す。砲塔が回転して左を向く。間もなく由岐のスコープにドラム缶が捉えられた。目盛りを読み取り砲の角度を調整する。ここ1週間の練習で各自の実力は確実に上がってきていた。

「停車!!」

タイミングを見計らつて戦車が停まる。若干の修正を数秒で判断しへ。

「撃て!!」

センチネルの6ポンド砲が火を吹いた。

「良いぞセンチネルチーム、その調子だ。次はフィールドコースの北側B地点へ向かってくれ。」「どうだ？」

センチネルの躍進間射撃成功を見た葵が次なるステップへと誘導するべく指示を出していると1人の男性が樓へと上がってきた。

「立花さん。」

「ポルシェティーガーと八九式のオーバーホールが終わつたよ。」

先週から整備指導として来てもらつて立花藤兵衛であつた。齡60前この男性はかつて陸上自衛隊で戦車の整備に携わつており、M41軽戦車、61式戦車、74式戦車、90式戦車、89式装

甲戦闘車、60式自走無反動砲、203mmりゅう弾砲など数えきれないほどの経験を誇る大ベテランだつた。もつとも本人は自ら誇るような行動言動はしていない。

「ゞ苦労様です。」

「しかし新入生もなんとかものになつてきたな。」

「ええ！立花さんのおかげです。」

葵の労いに訓練の様子を見ながら感想を言う立花に筑波さつきが返す。当初の整備の問題も立花が来てくれたおかげで解決を見つつあつた。

「わしがやつてることは大したことじゃない。ただの昔とつた杵柄だ。それよりとツチヤ君達の方が頑張つとるよ。」

立花は懐からパイプを取り出しながら若手の整備員達の頑張りを讃えた。新入生も交えての整備講習もあつてなんとか自動車部は人員を確保できた。現在立花、ツチヤ両名指導のもと整備作業と戦車の訓練を行つてゐる。やはりポルシェティーガーは一筋縄ではいかない車輛らしく整備に精通した人間に任せるべきという判断だつた。

「どうぞ。」

パイプを用意してくれた立花の前で葵がマッチを取り出す。

「ありがとうございます。さて…勝てるかな？」

「新入生の頑張りは充分です。このペースなら文句なしに戦力となりたちます!!」

葵に火を点けてもらい一服の煙を熏らせる立花の咳きに太田が答える。

「しかし訓練はあくまで訓練だ。」

立花の言葉は正論だつた。訓練で成績が良くても実戦でそれが発揮できなければ意味がない。自動車の教習と同じである。何事も経験が重要なのだ。

「その通りです。そこで来月早速練習試合を行います。このあとに詳細を発表するつもりです。」

「ほう…そら楽しみだな。」

葵の発言に立花がそう言つたところでセンチネルから指定された

ポイントに到着したとの連絡が入った。

夕陽が照りつける戦車倉庫の前で履修生が全員集合しての今日の総括が行われていた。隊員の前に立ち、葵自身が思つたこと、気になつたこと

「では今日の訓練はこれで終わりとする！各自自らの次の課題を意識してイメージしておいてくれ。それから発表がある。西住隊長。」

葵に呼ばれみほが全員の前に立つ。葵は一步引いて彼女の左斜め後ろに移動する。

「5月の第1日曜、つまり大型連休の始まりに練習試合を行うことが決定しました。」

その言葉に履修生一同（とくに1年生）がざわつく。まだ満足に動かせない1年生などはおろおろしたり周囲に小声で話しかけたりしている。続けてみほは一同に相手校を教える。

「相手は千葉県の知波单学園です。」

知波单学園：旧日本陸軍の戦車を使う千葉県の千葉港を母港とする学園艦で、艦型は大洗女子学園のモデルになつた空母翔鶴と同じく旧日本海軍の空母赤城がモデルである。

「今回の選定は4月最初に交流戦もしくは練習試合を申し込んできた学校を選びました。」

『勇猛果敢にして戦意旺盛、後退を知らぬこと猪が如く。』

要するに突撃一本をウリにしている学校だ。かつてベスト4に勝ち上がつた際の突撃戦術がすっかり根付いたことでここ数年はなかなか白星に恵まれていない。ことに昨年は黒森峰相手になすすべもなく全滅したため当時の隊長が更迭され現隊長の西絹代に交代したのは結構有名な話だ。

「決して油断は禁物であります！」

ざわつきが少し収まつた頃に秋山優花里が発言してみほの右隣に立つて続ける。

「知波单学園は昨年の大学選抜との戦いで突撃を捨ててアヒルさんチームとともに頭脳プレーとコンビネーションで敵のM26パンツングを多数撃破しました。」

旧日本陸軍の九七式中戦車と九五式軽戦車は総合的に見て脅威とは言えない。しかし多少の油断もあつたかもしれないがパーシングを討ち取つたのは紛れもない事実である。

「今年の大会に備えて戦略を練り、我々の予想しないような新兵器を備えているかもしません！」

「優花里さんの言う通りです。各自気を引き締めて試合にのぞみましょう。」

『おおーっ！』

夕陽に染まつた赤い空に大洗女子学園戦車道一同の気合いの雄叫びが響いた。

数日後、大洗女子学園対知波单学園の練習試合が正式に発表され、ネットニュースや戦車道新聞では大きく報道させていた。

『ついに大洗女子学園今年度初の試合決定!!』

『大洗女子期待の新戦力登場か!?』

『知波单精神大洗に挑む!』

昨年の優勝、そして大学選抜との激闘の勝者である大洗女子学園の動向は世間の注目を集めた。そしてそれは戦車道強豪各校も同じであつた。

「ローズヒップさん、同行して頂けますか？」

「勿論ですわ！」

午後優雅なお茶の時間のこと。聖グロの新隊長オレンジペコは自ら副隊長ローズヒップと共に観戦に行くつもりのようだ。

熊本県、黒森峰女学園隊長室

「小梅、頼んだわよ。」

「はい！しつかりとこの目で見極めて来ます！」

強豪黒森峰からは今年度副隊長に任命された赤星小梅が偵察に向かう様だ。新隊長逸見エリカからの任命に踵を合わせて背筋を伸ばし小梅は答えた。

青森県、プラウダ高校隊長室

「本当なら自分で見にいきでえが、隊長の務めを離れるわけにはいがね。」

「はい、ニーナ隊長。代理としてしつかりと見て参ります。」

プラウダ高校では新隊長ニーナに呼び出された新隊員が偵察員に選ばれた。ニーナと違い標準語を話すこの生徒は果たして何者か…。

静岡県、アンツイオ高校コロッセオ

「お前ら、準備を怠るなあ！」

「「おーっ!!」」

何故かアンツイオ高校は新隊長ペパロニ以下大勢で向かう様子だ。

長崎県、サンダース大学附属高校近所のハンバーガー屋
「アリサ、大洗の試合が決定したのに行かないの？」
「直接大洗女子と絡むと録な目に遭いませんから…。」

大学進学したケイから呼び出された新隊長アリサは少し汗をかきながら答えた。どうやらサンダースは直接見には行かないらしい。

大洗女子学園の練習試合は各校の注目の中で確実にその日を迎えていた。

練習試合・知波単戦です！

大洗対知波単の練習試合の日が一週間後に迫っていた。両校は訓練に訓練を重ね、作戦を練りに練つていた。

知波単・会議室

「我々の開始地点はここ。南部の大洗総合運動公園野球場です。対して大洗戦車隊はここ、大洗海水浴場です。以前行われた聖グロ・プラウダ連合との試合でチャーチルを一度追い詰めたゴルフ場の北にあります。」

隊員の寺本がテーブルの上に広げた大洗の地図上に印をつけて小さな戦車の形をした駒を並べる。赤が知波単、青が大洗である。

「まずはこれまでの戦い方からして大洗は斥候を出してくると思われます。恐らくはアヒル殿のチイ（八九式中戦車甲型）とカメ殿のヘツツァーであります。」

「こちらの体勢が整う前に敵に発見されるのはまずいな…。機動力ならこちらに分はあるのだが。」

西が腕を組んで思案の体勢に入る。

「隊長、まずは隊を2つに分けて片方を囮にしてはどうでしょう？」

福田のアイディアに全員が思考を傾けてみる。

「ふむ、ならばここは囮に…。」

西の中で何か策が固まつた様だ。

「こちらは全体的に見れば速力で勝つてゐるが攻撃力と防御力はあちらが上。ならばまずは相手の戦力を削ぐことだ。まずは…」駒を次々と並べ替える西に全員の視線が集まる。

「そしてここへ誘い込み…。」

大洗・会議室

「今回私達は北側の大洗海水浴場からのスタートです。」

「知波单のスタート地点はここ。大洗総合運動公園野球場です。エキジビションマッチで一度聖グロ勢を追い込んだゴルフ場の近くです。」

みほの言葉に続いて優花里がテーブルに広げられた地図に印をつけて続ける。

「今回相手は突撃はしてこないのではないかと思われます。」

「となると小回りと小柄な車体を生かしたゲリラ戦術?」

「可能性はありますね。相手は総合してこちらに攻撃力と防御力で劣りますが機動性はあちらが上です。」

疑問を口にした磯辺に優花里が答えると今度はエルヴィンが口を開く。

「以前の戦いで市街戦も経験してるから町の様子も把握してるだらうな。」

町中を利用したゲリラ戦ならば相手にも充分勝機がある。

「極力偵察隊以外は単独行動を避けてお互いの後ろをガードしましょう。万一突撃された場合には…」

両校の会議は更に続くのであつた。

そして試合の日はやつて來た。5月第一日曜日午前10時前。

「…にて有志一同のツチノコ探しはまだ続く模様です。では次のフレツシユな話題をお送りします。本日午前11時より大洗にて茨城の大洗女子学園と千葉の知波单学園戦車道の練習試合を行われます。会場となつてている大洗の町には一目見ようと多くの人が集まっています。」

日曜朝の情報番組で司会の壮年キャスターが大洗と知波单との練習試合が迫っていることを伝えていた。

「会場と中継が繋がつてあります。現場の敷島さん？ 敷島・クレメンタインさん？」

呼び掛けるとスタジオの中継モニターにスース姿の眼鏡をかけたショートヘアのリポーターが映る。

『はい!! 敷島です。私ただいま大洗ショッピングモール前の特設観覧スペースに来ております。ご覧くださいこのギャラリーの方々!!』

テレビに映つたのは昨年の大洗対聖グロリアーナの親善試合を遙かに上回る人ばかりであつた。

「ほお〜！すごい人だかりですね。」

『はい！皆さん試合開始を今か今かと楽しみにしてらつしやいます。遠いところでは青森や九州からいらつしやつた方もいらつしやいました。』

興奮気味に捲し立てる敷島リポーター。司会のキャスターは感心したように返す。

「なるほど、やはり昨年の優勝校の戦いに皆さん注目してゐんですね。」

カメラが向きを変えると…。

『フレー!! フレー!! 大洗!! ハツスル!! ハツスル!! 大洗!!』

大声で大洗女子学園にエールを送る男性が映る。応援用に作られた法被を羽織り、頭に白鉢巻きを卷いた恰幅の良い人物で、彼の後ろには同じ格好の男性が数人いる。

『こちらの方は大洗女子学園公式応援団の団長橋下さんです。橋下さん、今日の試合楽しみですか？』

敷島リポーターに紹介された橋下団長が力強く答えた。

『勿論です！ 力の限り声援送ります！』

『この試合について何か一言どうぞ。』

『時は来た！ それだけだ。』

更なる一言をカメラに向かつて言い放つ。

『ありがとうございました!! 応援頑張って下さい。』

「敷島さん、熱い応援でしたね。」

『はい!! 普段橋下さんはプロレスラーをされています。』

そう説明する敷島リポーターから今度はカメラがショッピングモールへと向けられた。

『そしてこのショッピングモールの屋上にて今まさに試合を行う両校の挨拶が行われています。』

「西住隊長、本日は練習試合をご快諾下さりありがとうございます!!」

「西さん、こちらこそよろしくお願ひします。」

試合前の両校代表による挨拶が開催本部が設置されている大洗ショッピングモールの屋上にて執り行われていた。西住みほと西絹代が審判団の団長を務める篠川香音審判員の前で握手を交わす。礼に始まり礼に終わる、忘れてはならない戦車道の心得である。

「福田さん、負けませんよ。」

「こちらもであります。澤殿、アヒル殿にもよろしくお伝え下さい。」

「今日はよろしく頼む。」

「お互い正々堂々と戦いましょう。」

みほと西を挟む形でそれぞれの副隊長澤梓と福田、エルヴィンと玉田も握手する。お互いが勝利を信じ仲間を信じる強さを握り会う右手に感じていた。

『試合開始!!一同、礼!!』

『よろしくお願ひいたします!』

審判からの掛け声に全員が車内で一礼する。ここに大洗女子学園

と知波单学園との戦いの火蓋は切つて落とされた。

「アヒルさん、カメさん、ペンギンさん、聴こえますか？」

咽頭マイクをおさえてみほが返答を待つ。

『こちらアヒル近藤、感度良好です。』

『ヘツツァーの武蔵、よく聴こえます。』

『、こちらベンギン明日香。こちらも問題ありません！』

すぐさま各車輌の通信手から返答が来た。通信手の沙織には心なしか明日香澄の声が緊張ぎみに聞こえた。

「みぽりん、皆聴こえてるけど澄ちゃん緊張してるっぽいよ。」

車長席を見上げて沙織が伝えるとみほが再び咽頭マイクをおさえた。

「明日香さん、練習通りに落ち着いていれば大丈夫。3チームは予定通り偵察行動をお願いします。」

『はい！ありがとうございます！』

『カメ了解!! 我いざ出陣せん！』

『こちらアヒル、偵察に出発します！』

それぞれからの返答の後に八九式、ヘツツァー、センチネルが走り出した。カメさんチームは右翼、アヒルさんチームは中央、ペンギンさんチームは左翼を先行して偵察を行う手筈になっている。

「それでは我々も続きましよう、パンツァー・フォー！」

みほの指示に従つて残る全チームが進撃を開始した。作戦は偵察を行いつつ町へ進出。まずは敵の出方を伺う。

『こちらベンギン、サンビーチにて敵車輌発見しました！』

左翼（町の東側）担当のベンギンさんチームから敵車輌発見の報告。

全チームに緊張が走る。

「落ち着いて観察して下さい。何輛ですか？」

『1輛です。新砲塔型のチハです』

みほの質問に答える澄の声は若干震え気味だつたのに敵を目の前にした武者震いとでも言おうか。

「他に敵は見えますか？」

『いいえ、1輛だけが砂浜を…あつ!?』

「敵発砲!!こちらに気づいた様です!」

隠れていた防砂林の中へと敵の砲弾が撃ち込まれた。

『落ち着いて反撃を。無理に倒そうとしないで自分達の身を守つて下さい!』

「了解!!鞍馬さん、篠さん、反撃用意!!」

「了解!!」

「よつしや!!」

いよいよ実戦とあつて意氣高く砲手の鞍馬由岐と篠真厘が返した。

「野島さん、防砂林を出て砂浜へ!ここでは動きが限られます!」

「了解!!」

すぐさま操縦手の野島椿がセンチネルを防砂林から飛び出させる。

「装填完了!」

「撃て!!」

ドンッという衝撃にセンチネルが震える。彼女達にとつて初の交戦だ。

敵はこちらの様子から一旦停止してやり過ごす。敵の前方で砂が爆発した。

「外した!もう一発!」

「焦らないで落ち着いて狙つて下さい!」

由岐にそう言いながら澄は上半身を出して相手を伺う。すると…。

「えつ?」

同じようにキュー・ポラから出てきた相手の戦車長を見て澄は驚い

た。

「西隊長…？」

澄は遠目ではあるものの長い黒髪を靡かせた知波单学園戦車隊長の西絹代の姿を捉えていた。

「よしつ！敵はこちらを視認している！撃て！」

西の指示に砲手が発砲する。相手の戦車の後方に砂煙が上がった。敵も停止することなく動いてかわす。

「なかなか良い動きだ。しつかり狙え！」

今度は敵とほぼ同時の発砲だつた。お互いの砲弾はそれぞれの左側を掠めた。

「この一式中戦車チへ、そう簡単にはやられぬぞ！」

一式中戦車チへ

全長	5.	7	m
全幅	2.	3	m
全高	2.	4	m
重量	17.	2	t
最高時速	44	k	m
主砲	47	mm	48口径戦車砲

知波单が用意した新戦力一式中戦車チへ。一見して九七式中戦車チハと代わり映えしない。しかし速力はチハの最高時速を上回り（チハは最高時速38km）、正面装甲はチハの厚さ25mmの2倍の50mmと強化されている。

「ペングインさんチームは一旦後退してください！」

一対一で砲の威力と装甲で勝っているとはいえ相手が西ならば油断ならない。みほはすぐに下がるように指示した。

「どういうことでしようか？」

相手の動きを地図に書き込む優花里が首を傾げる。西自らが遮蔽物のほとんどない砂浜をたつた1輜で走るなど何を考えているのか。

「とにかく南下しましょう。各チームは敵の伏兵に注意して下さい。あんこう、カバさん、アリクイさんはこのまま南下。レオポンさん、カモさんは西側を南下、敵の主力がいるかもしませんので警戒して下さい。ウサギさんは先行してアヒルさんペンギンさんと合流、カメさんはレオポンさんのチームに合流して下さい」

西自らが囮となつて右翼から側面を突く戦法とみたみほは右翼にティーガーを回し75mm砲を備えたルノーとヘツツァーを配することにした。これならば側面を狙われたとしても簡単には崩せない。

とにかく単独行動は控えて敵の奇襲に備えることにする。今まで正面突破の突撃戦法で活路を切り開く戦法を頼りにしてきたチームであるためそれ以外の戦法の予想がつきにくいことがここで発覚した。

(もしかするとすぐ苦戦するかもしれない……)

みほの心中で不安が高まつてきていた。

「こちら西側のレオポン。敵の攻撃を受けてます！」

全チームが三つのグループに編成され各自が合流した頃、レオポン、カモ、カメの3チーム町の西側にある荒れ地で突如敵の奇襲を受けた。

『敵の種類は？』

「恐らくチハが2輜です！」

「喰らえ!!」

ズドンッ

大洗最大の火力、ティーガーの88mm砲が火を吹いた。

続いてルノーとヘツツァーも狙うがちよこまかと動かれて命中には至らない。2輜の九七式中戦車を追つてレオポンは緩やかな勾配

を昇る。

「逃がすか！」

「皆！レオポンに続くわよ！」

ティーガーに続いてルノーとヘツツァーも昇る。そこは以前聖グロと行つた練習試合での『こそそ作戦』で使用した荒れ地の渓谷地帯であつた。

「まるで誘い込んでるみたいですね。」

敵と味方の動きを頭の中で整理して優花里はそう分析する。以前の聖グロ戦で自分達のとつた行動に似ていた。

「でもさあ、ティーガーやルノーにチハジやいくら撃ち込んでもなかなか致命傷にはならないよ。」

沙織の言う通りだ。ティーガーやルノーの装甲を貫くには九七式の新砲塔型でも難しい。よしんば崖を抜けた先で以前みほ達がやつたような作戦をしたところで返り討ちに遭うのがオチだろう。ならばなぜ西は崖の道を…崖…。みほは呟いて考える。

「崖…狭い…正面装甲…。」

少なくとも転回や砲塔旋回ができる場所では敵の弱点をつくことは容易ではない。とくに重戦車のティーガーともなれば正面が抜けない、追撃されてるので側面と背後も抜けない。あるとすればそれは砲塔内の天井くらいだ。

「天井？」

みほはある可能性に気がついた。

『崖の上から攻撃するのはどうだろう？』

聖グロ戦前のミーティング中にカバさんチームのカエサルから出た提案だつた。確かに戦車の装甲は天井部分が薄く造られているのだから小口径の砲でも撃破しようと思えば出来る。しかし…

『崖上からの砲撃など練度の低い我々では簡単には当たらん！それならば出口で待ち伏せた方が当てやすい！私の作戦に口を挟むな！』

当時作戦を立案していた生徒会の河嶋桃の一言で切つて捨てられた。だがこの時みほは考えていたことがあつた。

『崖を崩して敵を分断。退路を絶つて反撃すれば…。』

しかし河嶋の迫力と彼女に指摘された練度の不足に口をつぐんだのだった。

「レオポンさん、カモさん、カメさん、すぐ引き返して下さい！敵の…。」

『うわっ！何だ!?』

みほが西の罠に気づいた時には既に手遅れだつた。

レオポン、カモ、カメの3チームは突如追つていた敵から強力な煙幕という思わぬ攻撃を受けた。

「煙幕か!!停止!!」

先頭のティーガーが急制動をかけ、ルノー、ヘツツァーも停止する。多少広いとはいえ左右は崖。視界を奪われ方向感覚が麻痺しかねない状況下で走るのは得策ではないとの判断だったが…。

ズドオオン ズドオオン ゴゴゴゴ ガラガラガラ
「きやあああ！」

「な、何よお！」

突如爆音と地響きが轟いた。そして

『カモチームよりレオポンチームへ緊急連絡!!』

「カモさん、どうしました!?」

『崖が！崖が崩れて下敷きになり動けなくなりました！』

なんと崖崩れに巻き込まれたカモさんチームが動けなくなつてしまつた。

「何だつて！」

『こちらへツツァーのカメさんチーム。我らは無事なれど進路を塞がれた！』

最後尾のカメさんチームは無事だつたが3輪は完全に分断されてしまつた。

「敵の狙いはこれだつたのか。」

「よしつ!! 煙幕が晴れると同時に仕留めるぞ!」

崖の上に配置された部隊の指揮を執る玉田は自身が乗る車輛から身を乗り出して崖下へと視線を向けていた。彼女が乗つているのは「三式砲戦車」。旧日本陸軍の開発した自走砲である。

全長	5.	52	m
全幅	2.	33	m
全高	2.	37	m
重量	17	t	
最高時速	38	k m	

主砲 75mm 38口径戦車砲

日本陸軍が本土決戦用に備えた兵器でアリクイさんチームの三式中戦車チヌと同じ主砲を備えている。

知波单は昨年の大洗対聖グロ戦から崖を利用した作戦を提案した。高機動を生かしてまずは三式砲戦車と一式中戦車、九七式中戦車を崖上左右にそれぞれを1輛ずつ計6輛配置、続いて囮役の九七式が敵を誘導、煙幕で視界を奪い混乱させたところで崖上から6輛が砲撃を行い崖を崩してあわよくば敵を崩落の下敷きに。失敗したとて退路を絶つ。そして引き付け役の2輛が反撃に転じて敵の動きを制限して数の優位を持つて仕留める。これが知波单流立体戦術である。

ドオオオン!!

『大洗女子学園、ルノーB1bis、行動不能。』

崖崩れに巻き込まれて動けなくなつたルノーが煙幕の隙間から狙

い撃たれた。

「しまった！このままではやられる！」

敵の上からの砲撃などされたら例えティーガーと言えども危うい。

「煙幕が完全に晴れたら即叩かれます！」

後輩の言葉にツチヤは腹を決めた。

「一か八か強行突破だ！みんな何かに捕まれ！」

煙幕が晴れる前に突撃で活路を拓くことに決定した。ツチヤは急発進させる。

「どけどけえ!!」

ガツシャアアアン!!

『知波單学園、九七式中戦車、走行不能。』

転回した九七式の一台を撥ね飛ばし逃走を図る。しかし…。

ズン!!

突如後部に衝撃を受けた。

「スピードが…。」

「ツチヤ先輩、エンジンがぐずり始めました！」

自らの感覚と車長の言葉でツチヤは危機感を持った。どうやら後ろから攻撃を受けたらしい。撃破は免れたまもののエンジンがデリケートなレオポンが大ピンチに陥ってしまった。

「くそっ！こんなときには…。」

「自分が直しに…。」

焦るツチヤ。すると新車長である和住媛萌（わすみ・ひめ）が工具を用意し始めた。昨年の決勝戦で前レオポンリーダーのナカジマが行つた修理法をしようとするが…。

ドドオオオン

「うわっ!!」

車長が出る前に頭上から一撃を喰らつた。

『大洗女子学園ポルシェ・ティーガー、行動不能。』

「？レオポンが!?」

「まさか!?」

「やだもおーーこんなのは知波单じやないよ！」

会場に響く戦況アナウンスに優花里、華、沙織が声をあげた。

「…。」

操縦していた麻子も声にこそ出さなかつたが操縦レバーを握る掌に嫌な汗の感触を感じ、他のチームの面々も似たような状況であつた。まさか知波单相手にティーガーがやられてしまうとは…。

「皆落ち着いて!!おかげで相手の戦力はわかりました!ここは第2策で行きましょう!アヒルさんとカメさんを除く全車輛は駅前通りに集合して下さい!」

しかしみほはすぐさま次なる指示を飛ばして收拾をはかる。

「これより「いらいら作戦」を開始します!」

みほの言葉を受けた隊員達は作戦にかかるべく各々が目的地へと向かつた。

知波单相手に思わぬ苦戦から始まつた試合。果たしてみほ達のいらいら作戦とは…。

発動・いろいろ作戦です！

知波单まさかのティーガー、ルノー撃破は観客にも大きなどよめきとなつていた。

「な、何ということでしょう！あの知波单がティーガーを！」

そんな観客席から少し離れた場所に用意されていた特別仕様の観戦スペースのテーブルに座していた赤毛の少女が目を見開き危うく右手にもつたティーカップを落としそうになつていた。

「ローズヒップさん落ち着いて下さい。」

同じ席に座る橙色の髪を後頭部で纏めた少女が宥める。彼女達は神奈川県の聖グロリアーナ学園からやつて来た戦車道の隊長オレンジペコと副隊長ローズヒップである。

「落ち着けるものではありません！突撃しか取り柄のないただの直進脳がまさかこんなにも！」

「ローズヒップさん、あまりご自分に返つてくるような言動はお控えになられた方がよろしいかと…。」

ローズヒップの知波单に対するあまりな言い様にオレンジペコは諫める様に発言して紅茶を一口飲む。実に御嬢様然とした佇まいは先代の隊長ダージリンから受け継がれてきたものだがローズヒップは対称的に非常に落ち着きに欠けている。

「知波单の立体戦法、侮れませんわね。」

そしてここにもう1人の人物の姿があつた。青みがかつた黒髪オングヘアーに若干つり上がつた瞳。そしてオレンジペコに負けず劣らぬ御嬢様然とした空気の持ち主。

「私達の主力たるルノーブ1がこうもあつさりと…。」

そして少し悔しそうにカプチーノを飲んでいるのはフランス系の流れを組む聖グロと並ぶ御嬢様学校、マジノ女学院戦車道の隊長エクレール。昨年の大洗女子学園が初勝利をおさめ、全国大会では一回戦でアンツィオ高校と接戦を繰り広げた学校である。

「マジノ女学院としてはいかがですか？伝統的戦法を変えるとなると並大抵なことではないと考えますが。」

「確かに簡単なことではない、しかしやるだけの価値はあると言わせていただきますわ。」

ペコに對して精一杯の不敵な笑みを作つて返すエクレール。それが今彼女にできる最大限の威圧であつた。

マジノ女学院は優雅さでは聖グロには勝るとも劣らぬ存在である。しかし戦車道は強豪とは言えなかつた。伝統を重んじて集団行動による浸透戦術、あるいは厚い装甲に頼つた防御戦術にこだわり続けたためにここしばらくは白星を逃している。このままではいけないと昨年声をあげたのが現隊長エクレールだつた。彼女達もまた知波单と同じく戦術転換を行つていたということだ。そして…

「電撃戦による強襲戦術、楽しみにしていますね。」

どこか共感をおぼえる様な表情を見せつつペコはテーブル上のお茶請けクッキーに手を伸ばす。知波单、マジノ、そして聖グロに共通するのは困つた伝統であつた。

「なかなかにやるな知波单学園。」

「今年はやはりどの学校も戦力を向上させていると見て良いですね。」

一方では観覧席の端にあるベンチで2人の少女がジユース片手に観戦していた。青髪を左側で留めた形のポニーテール姿の少女の知波单への称賛を隣に座つたショートの少女が返す。彼女達もまたこの試合での大洗の立ち回りを見に来ていた。

「プラウダ高校ではやはり大洗が一番の警戒対象ですか？」

「否定しません。しかし…。」

青髪の少女が強い意志を感じさせる瞳で隣のショートの少女を見る。彼女もそれに応えて目を向ける。

「プラウダの目標はあくまで優勝と黒森峰の撃破。一昨年の勝利がま

ぐれでは無いことを証明しなければ…。」

プラウダ高校戦車道の新隊員リーリヤの言葉を受けた黒森峰女学校園戦車道の3年生副隊長赤星小梅は強く頷いてスクリーンへと向き直り言葉を放つた。

「我々も同じです。昨年敗北した大洗、そして一昨年の雪辱を晴らすべきプラウダ高校を必ずや撃ち破ります。」

「ドゥーチエ、大洗が…。」

「なんてこつた!? ティーガーが！」

応援用のスペースにて大洗の応援のためにやつてきたアンツイオ高校一同は知波单の猛攻にショックを受けていた。ノリと勢いが一気に失われさつきまでの熱い声援が途絶えてしまつた。しかし…。
「皆静まれい!! あれを見ろ!!」

そんな中でも隊長ペパロニだけは意氣高く少し離れた場所に陣取るグループを指差す。

「「負けるな!! 負けるな!! 大洗!! 進め!! 進め!! 大洗!!」」

橋下団長率いる大洗公式応援団は声を張り上げ続けていた。さすがはプロレスラーの軍団だけあつて体力、声量、気迫は凄まじかつた。「こつちも負けないで応援するつす!!」

その姿を見たアンツイオ応援団も負けじとあるものは旗を振り、あるものはポンポンを手に応援を再開した。

「お前ら!! 女子高生に負けるようじやレスラー失格だ!! 声張り上げろお!!」

「「おおー！」」

いつしか応援スペースがノリと勢いをつけたアンツィオと大洗公式応援団との応援合戦の様相を呈していた。

「西隊長!!快挙であります!!大洗の虎号戦車（ポルシェ・ティーガー）とB1号戦車を仕留めました。」

一式中戦車に乗る副隊長福田の報告にすぐさま西隊長から応答が来た。

『よしつ!!良くやつた!!こちらは敵の新戦車を撃退した。情報にあつた新隊員の乗つたセンチネルと思われる。』

サンビーチでの戦いはセンチネルが撃ち合いを諦めて後退した。さすがに車輌のスペックは上でも西相手にペンギンさんチームだけでは荷が重かつたのだ。

「隊長!!このまま勢いに乗りましょう!!」

「突撃命令を下さい!!」

「知波单魂見せつけてやりましょーぞ!!」

「一気に畳み掛けましょー!!」

三式砲戦車で指揮するもう1人の副隊長玉田の進言に一式砲戦車の寺本、細見、九七式中戦車の池田が続く。

『ダメだ!!』

西は強く返した。

『勢いがついたとは言えまだ敵は高火力を残している。突撃は待て
!!』

例によつて知波单学園の突撃癖がまた出てきた。昨年の大洗エキシビジョンマッチではこの突撃癖が切つ掛けで包囲作戦が瓦解、聖グロリアーナ・プラウダ連合に敗北を喫したのだ。

『まずは合流しよう。予定通りに南下して集合地点の森林地帯へ向かつてくれ。先頭はホニ（三式砲戦車）、殿はチヘ（一式中戦車）で隊列を組むよう。チハ（九七式中戦車）はホニの左右を守れ。』

三式砲戦車は戦車と言われているが分類上は自走砲や支援砲とされる。先代の一式や二式に火力、防御力に優れてはいるが上部正面装甲こそ30ミリ（25ミリとする資料もある）だが側面と背面の装甲は10～20ミリしかないのだ。

「了解であります!!」

「了解!!」

その様子を遠くから双眼鏡で睨む人物がいた。

「こちらカメさんチーム、敵は荒れ地を離れて森林地帯へ向かう模様。」

カメさんチームの装填手兼通信手十兵衛こと柳乙十葉がヘツツァーの上に立つて状況を西住隊長へと報告していた。

『了解しました。敵に見つからない様にカメさんチームも南下して敵の隊長車を奇襲、応援のアヒルさんチームと合流したら指揮下に入つて下さい。』

「心得ました!」

「ではウサギさんチーム、出発します。」

「お願いします。危険な役目ですが…。」

みほの目の前でエンジンをアイドリングさせるM3リーの上から副隊長の澤梓が笑顔で返す。

「大丈夫です！必ず相手を引き連れて帰ります！」

その言葉を最後にウサギさんチームは西を目指して走り出した。III号突撃砲の上に立つ同じ副隊長のエルヴィンは愛用の帽子を振つて見送つていた。

「私たちは当初の予定通りに分散待機します。カバさんチームはここ、アリクイさんチームはここ、ペンギンさんチームはここです。」拡げた地図に印を書き込みつつみほは残る3チームのリーダーに指示する。

「心得た。」

「分かつたにやう。」

「了解です。」

すぐに力工サル、ねこにゃー、澄の3人が返す。相手は大洗の街並みを把握している。こちらがゲリラ戦を仕掛けるべくまずは敵の突撃精神を刺激して浮き足立たせて誘い込むのがこのいらいら作戦の目的である。

『こちらカメさんチーム、敵車輛森の入り口にて待機。動きあります』

ん。』

『こちらアヒルさんチーム、敵隊長車を追跡中。ポイントKを間もなく通過。』

『カメさんチーム、動いて下さい！敵隊長車をアヒルさんと攻撃。撃破できなくとも構いません。』

『了解!!』

『こちら西、森林地帯前にて敵と遭遇。カメ殿のヘツツアードだ。』

「西隊長！大丈夫でありますか!?」

『いまのところは：おつと、アヒル殿のチイ車も来たぞ。』

敵の増援の報告に玉田がマイクへと強く言う。

「西隊長!! すぐに向かいます!」

すぐに操縦手がエンジンをふかして動かせるようにする。

「アヒル殿はおそらく隊長車を追跡していたのだ。そこで撤退すると見せかけたヘツツァーに挟み撃ちを…。」

敵は2輛、八九式なら充分九七式チハでも倒せる。ヘツツァーの相手は自分が務めようと玉田は判断した。

「ホイ2号車とチヘはこの場にて待機、チハは我に続け!! 隊長を救援に向かう!」

「もう一発アタック!!」

「喰らえ!!」

「なんの! おつと危ない!」

西隊長の車輛は八九式とヘツツァーの砲撃を巧みにかわす。さすがに隊長車の操縦手ともなるとかなりの腕前を持っている。操縦にクセのある日本戦車を意のままに動かして2対1という不利な状況で実によく立ち回っている。

「さすが西さん! あっさり白旗は上げないね!」

「レオポンさんとカモさんのかたきいー!」

典子と武蔵の言葉を聞き、それぞれのチームメイトはさらに発奮して西に挑む。

「もらつた!」

そして一旦距離をとつたアヒルさんチームの八九式中戦車が西をスコープに捉えた。間髪入れず気合いの言葉を口にして砲手の佐々木あけびが57ミリ砲を叩き込む。

ドンッ

「弾かれた!?」

だがその一撃は跳ね返された。驚くアヒルさんチームの一回。斜め前から当たつたうえに砲の威力の低い八九式とは言えこそそこの

距離から放たれた砲弾を正面装甲たつた25ミリの九七式チハが跳ね返すなどありえない。

「西住隊長!!正面のアタックを弾かれました! 西さんの車輌は九七式チハ改じゃありません!!」

典子はみほへ知波単の戦車がパワーアップしている事実を伝えた。

「九七式に似つつ八九式の砲撃を正面で跳ね返したとなるとおそらくは一式中戦車チヘですね!!」

持ち前のミリタリー知識から優花里が正解を導きだす。自前の戦車ノートを取り出した沙織が驚く。

「正面装甲50ミリ!?チハの2倍じやん!!」

砲塔の正面装甲だけならばIV号にも匹敵する。

「しかもレオポンさんチームが遭遇した未知の戦車もいます。知波単は勝ちに来て いますね。」

華が改めて知波単の用意した戦力に舌を巻く。

「しかしこつちも負けるつもりは無い。」

操縦レバーを握り直した麻子がそう言うとみほが続いた。

「麻子さんの言う通りです。それに九七式より強力ではあります、が主砲は47ミリで変わらず側面後面は薄いことは同じです。手数は少なくともまだこちらの方が戦力的には優勢です。」

マイクを通じて各チームへ敵の戦力の概要を改めて伝えてみほは最後に確認するよう言つた。

「各員、予定通り作戦を進めて下さい。」

いろいろ作戦は着実に準備が進められつつあつた。

「目標敵戦車!!当たられなくともいい! 西隊長から引き離せ!!」

隊長車の救援に向かつた玉田副隊長率いる部隊が隊長車の周囲を

囲むように動き回る八九式とヘツツァーを牽制すべく砲撃を開始する。

ズンツズンツと言ふ空気を震わす音と共に土煙が上がり大洗の2輪が敵の襲来を知り一気に離脱にかかる。

「敵襲!! カメさんチーム、一時退却!」

「敵に背を向けるは武士の恥なれどここは作戦を優先すべし!!」

磯辺典子の指示に従つて新カメさんチームが退却に移る。

「玉田!!」

「西隊長!! お助けに参りました!」

味方の登場に西と隊長車の一団が息をつく。優秀な隊員が振り分けられている隊長車といえども2対1は苦しかった。

「敵を追撃! 逃がすな!」

ただちに玉田が追撃すべく砲撃を行うが…

「玉田、深追いするな。一旦後退しよう。」

「…了解。」

敵の砲撃が途絶えたところでヘツツァーと八九式は停止した。

「磯辺先輩、敵の追撃が止まりました。」

「よしつ、反転180度!! もう一回いくよ! こちらアヒルさんチーム、ウサギさんチーム応答願います。」

武蔵からの報告を受けてウサギさんチームと通信を行う。

『こちらウサギさんチーム、間もなく合流できます。』

すぐさま梓から返事が来る。この間に2輪は反転する。

「了解。西住隊長、こちら敵を追跡します。」

『わかりました。敵はおそらく森林地帯で潜伏すると思われます。充

分注意して下さい。』

「西住隊長、遠目ですが敵の戦車を撮影しました。動画で送信しますので確認してみて下さい。」

逃げる際に応援に来た敵戦車の撮影を典子は試みていた。

「うーん…三式砲戦車かな?」

「遠目だからなんとも言えませんが、固定砲塔の日本戦車となるとその可能性が高いですね。」

不鮮明ながらもなんとか自前の戦車知識にみほど優花里が当てはめる。

「三式砲戦車…分類上は自走砲の類いね。」

戦車データを纏めたノートをめくつて沙織が発言する。ネット上の写真をケータイで送つてみたところ典子と武蔵からこれだらうと返信も来た。

「38口径の75ミリ砲を備えています。アリクイさんチームと同じですね。」

「正面を除けば装甲はチハ並みだね。」

「そもそも車台はチハの流用ですからね。」

優花里と沙織の談義を聞き流しつつみほは各車へ敵の情報を伝えしていく。

「主砲が脅威ですが固定砲塔ですから動きが制限されます。相手の動きを見極めつつ立ち回りましょう。」

「榴弾撃てえ!!」

典子の指示のもと八九式の主砲から57ミリ榴弾が発射された。

「発射!!」

「主砲、副砲撃てえ!!」

続いてヘツツァーとM3リーの2門の75ミリ砲と37ミリ副砲が発射される。目標は知波单の潜む森である。ただし敵を狙つたものではなく適当な射撃である。数発撃つては機銃掃射して去り反転、また数発撃つては機銃掃射を繰り返す。

「隊長、反撃しましよう！」

「敵に一方的になぶられているなど耐えられません!!」

潜んでいる方としてはこれではたまつたものではない。いつ発見され撃ち込まれるかと思えば気も休まらないのだ。何よりも彼女達の突撃癖が顔を覗かせ始めていた。玉田、細見の進言がそれを示していた。

「待て!!ここが辛抱のしどころだ!」

西は落ち着くように指示を出す。敵の陽動や誘引戦術であればノコノコと出ていったが最後だからだ。

「しかしもはや我慢の限界!!ここは勢いに乗る場面であります!!」

玉田は耐えきれずついに前進し始めた。

「おい玉田!!勝手な行動は…」

西が引き留めようとする矢先、玉田に続いて池田、名倉、浜田の九七式3輪も森の出口へと向かつた。

「皆戻れ!!一旦下がつて作戦を…」

西の声は彼女たちに届かなかつた。

「来た来た!!」

「よし!!反転退却!!」

「[['逃げろ!!']]」

武蔵が敵の登場に色めき立ち、典子がメンバーに指示する。ウサギさんチームの一同行は紗希以外のメンバーが声を揃えて退却にうつる。「後方欺瞞射撃用意!!」

さらなる指示を典子から指揮を引き継いだ副隊長の沢梓が下す。M3の37ミリ副砲が後方を向き八九式の後方機銃が火を吹く。「無理して当てるよりも慌ててる感を敵に与えて下さい。」

「了解!!」

「敵はまともに照準できていないぞ！一気に距離を詰めろ！」

玉田の指示に各隊員色めき立つ。現在我慢しきれなかつた玉田と僚機のチハ改が3輛。4対3であるうえに敵の背後を突いている。実に有利な展開だ。

「知波単道とは突撃にあり!!撃て撃てえ!!」

「敵さんはのつて来てるよ！皆、あと少しだから頑張つて！」

梓の檄に紗希以外の4人が応える。M3、八九式、ヘツツァーは敵の追撃を受けつつ大洗の街に突入することに成功した。

「西住隊長！敵はチハ3輛、ホニ1輛です。街までの到着まで約5分。」

『了解です。こちらは既に配置完了しました。街へ入つたらウサギさんは私達アンコウ、カメさんはカバさん、アヒルさんはアリクイさんとの連絡を密にして展開して下さい。』

すぐさまみほからそれぞれへ指示が与えられる。新履修生を含む大洗女子学園戦車道一同のチームワークが試される時だ。

「間もなく目標地点です。アヒルさん、カメさん、用意は良いですか

？」

「いつでも行けるよ！」

「こちらも同じく」

梓の問いに応える典子と武蔵。

「目標地点確認!! 転進用意!!」

目指す先は大通りの交差点。更なる梓の言葉に彼女を除く12人が息をのむ。

「「散開!!」」

突如玉田達が追いかけていた3輛は交差点で3方向へと別れた。M3は直進、ヘツツァーは右折、八九式は左折した。

「玉田副隊長!!」

「浜田は右折、池田は左折、名倉は私に着いてこい！」

『カバさんチーム、こちらカメ、目標地点まで間もなくです、攻撃準備願います。』

「来たぞ。砲弾装填、砲撃準備良いか?』

「装填よし!』

「いつでも撃てるぞ!』

すぐさまカエサルと左衛門佐から準備完了の返事を受けてエル

ヴィンはカメさんチームへ通信を送る。

「武蔵、こちら準備良いぞ!』

『了解!!』

チハに追われるカメさんチームのヘツツァーは旧倉庫街へと逃げてきていた。これまで数発砲撃されているが操縦手シャルルの特訓の賜物か直撃は免れている。

「目標倉庫前目視確認!!」

目標地点を捉えた武蔵が次なる指示を出す。

「急停車!!」

急激にスピードを落とすヘツツァー。そして：

「全速後退!!」

すぐさまバツクを開始した。

「うわあ!!」

思わず展開に追跡していた浜田のチハは思わず停止する。そして

「喰らえッ!!」

ドカッ

ヘツツァーの全速後退による体当たりでチハは完全に前進できなくなつた。

参考

38t・ヘツツァー改

重量15・75トン

九七式中戦車新砲塔チハ

重量15・8トン

そして…

「先輩、お願ひします！」

武蔵の言葉に応えるかのように衝突した2輢とは違うエンジン音が響き始めた。

「おりよう、発進!! 左衛門佐、頼むぞ！」

「行くぜよ!!」

「承知!! 南無八幡大菩薩!!」

倉庫内に隠れていたカバさんチームのⅢ号突撃砲がエルヴィンの号令一下閉じられた木製扉を破壊して飛び出し相手をスコープに捉えた。

「撃てえ!!」

エルヴィンの号令に75ミリ砲が吠えた。

同じ頃

「くそぅ!!」

池田が指揮するチハは八九式を追撃していた。

「しつかり狙え!! 当たれば一発でしとめられる!!」

鼓舞するように言い放つ池田だが敵はいりくんだ道を右へ左へと駆け回る。小柄な八九式ならではの芸当にチハは追いかけるのがやつとだ。

「アリクイさんチーム、準備は良い?」

『いつでもOKだにや』

ねこにやーからの返事を受けた典子が右手の握り拳を左手の手のひらに打ち付ける。

「よしつ!! 根性でいくよ!!」

「「はいっ!! キヤプテン!!」」

典子、あけび、妙子、忍のバレーボーイの雄叫びが車内に響いた。

「ももがー、建子、ここ一番だにやー。」

三式中戦車車長のねこにやーの言葉に2人のチームメイトが返す。

「まかせるもも!!」

「ねこにやー先輩、射撃はお任せあれ。」

昨年より引き続き操縦担当のももがーからの気合いのこもつた返答とぴよたんに代わって砲手兼装填手となつた新履修生早川建子（はやかわ・たてこ）の自信満々な応答にねこにやーは眼鏡の奥で目を光らせ続けた。

「頼んだありますぞ！」

「よし、この道なら大通りへ出るしかない。」

何度目かの威嚇射撃の末に池田は八九式を一本道へと追い込んだ。ここは途中に交差する道はなく大通りへと出るしかない。しかも大通りへと出ても左折すれば通行止めの下水工事現場に行き当たる。つまり敵は右折するしか手がない。事前にフィールドワークしていきた甲斐があつたと言うものだ。

「大通りへと出たらただちに右砲戦用意！」

相手の速度を予想して素早く計算して角度を調節する。突撃主体だつた知波单とはいえ個々の戦闘レベルは高い。日々猛訓練の賜物であつた。

「仕留めるぞ！」

気合いを入れる池田だが彼女は八九式が思い通りに逃げているのではなく自分達が誘われていることに気づいていなかつた。

「必殺!! エツクス攻撃!!」

「ここだもも!!」

典子の発言と共に八九式が目的の交差点を通り抜けた直後、右手から一瞬遅れて待機していた三式が走り込んだ。

「何つ!?」

「ファイヤー!!」

三式の主砲が九七式の正面に炸裂、スピードがガクツと落ちて白旗をあげた。

「初撃破!! この者ストーカー犯人。」

などと言つて喜ぶ建子。ねこにやーとももがーもガツツポーズを決める。

大洗女子学園新履修生の1人早川建子、黒のショートヘアに授業中以外は必ずカウボーイのようなテンガロンハットを被り白いスカーフを首に巻き、時おりサングラスを着用しているという奇抜なスタイルを好む。そんな彼女の特技は動体視力。速読やフラツシュ暗算などは朝飯前。行進間射撃では1年どころか華や左衛門佐に勝るとも劣らない腕前を持つている。本人のキャラクターがかなり濃いためアリクイさんチームへと割り振られすぐにメンバーとも馴染んでいるのもチームワークとして重要であった。

『知波单学園、九七式中戦車2輛行動不能!!』
立て続けに撃破された知波单勢。

「おのれえ!! 立て続けにやられるとは!!」

「玉田副隊長!! 一旦退きますか!?」

僚機の名倉から質問される。ここは一旦下がつて味方と合流すべきだと玉田も判断した。

「そうだな！その前に奴だけでも仕留めるぞ！」

しかしそこは知波单学園、やられてばかりではどうにもおさまらない。

「名倉は後方を警戒!! 万一の場合は全速力で離脱するぞ！」

「玉田!! 一旦退け!! ここは合流すべきだ！」

玉田達を追う西は、福田、寺本と共に潜伏していた森林地帯から街へ向かっていた。立て続けの撃破を受けて戦力を集中し体勢を建て直そうと判断したのだが。

『西隊長!! ここは1輪でも仕留めねば知波单の名折れ!!』

「市街地にある程度知識があるとしてもそこは敵の領域だ！とにかく追撃を中止して…」

『突撃!!』

玉田の耳に西の声は届かなかつた。

続く

決着・そしてライバル達です！

「敵影なし。」

M3リーを追う玉田のホニと名倉のチハ改は周囲を警戒しつつ街の大通りを抜けて海沿いを南下して行つた。

M3リーの車内では副砲担当の大野あやが声をあげる。

「もう！チハ相手なら副砲でも倒せるのに！」

唯一反撃できる37ミリ副砲が後方へと射撃をするものの2輛ともなかなか当てさせてはくれない。充分敵の追撃は妨害できてしまふが背後をとられていてはいつやられるか分からぬ。

ちなみに戦後の実験資料によるとM3リーの副砲を主砲として持つM3軽戦車スチュアートで射撃試験を行つたところ新砲塔チハでも300メートルの距離から正面を貫通させられるという結果が得られたらしい。

「あや、落ち着いて。うまくおびき寄せられてはいるよ。」

梓が地図を見ながらルートを確認して言う。

『こちらウサギチーム、あんこう、ペンギンさん、間もなく予定ポイントです。』

『こちらあんこうチーム、準備完了。』

『同じくペンギンさんチーム、準備完了。』

すぐに2チームから返答が来た。

「皆、あと少しだよ！頑張つて!!」

「麻子さん、エンジン全開でお願いします。華さん、落ち着いてしつかり狙つて下さい。」

「わかつた。」

「心得ました。」

「野島さん、ここ一番頼んだよ！鞍馬さん、初撃破のチャンス、頑張つてね！」

「よしきた！」

「まかしといて！」

M3を追う一式中戦車と三式砲戦車。3輌は序盤でペンギンさんチームが西の隊長車とタイマンを張つたビーチへと来た。

「おしいぞ！もう一息だ！」

玉田の車輛の放つた砲撃がM3の右側を掠めて砂を巻き上げた。「一発でいい、当てさえすれば…。」

幸いにも開けた場所であれば狙いやすい。いりくんだ路地などはこちらの動きも制限され戦いににくい。2対1で後方から一方的に撃ち込めるのは実に有利と言えよう。しかし…

（待てよ…なぜ簡単に開けたところへ…）

ふと玉田の脳裏にそんな疑問が生じた。熱くなつていたことで見落としていたがここは大洗にとつてテリトリーとも言える街、いやにあつさりとこちらに追いたてられ過ぎでは無かろうか。

その思考は突然耳に届いた戦車のエンジン音で遮られた。

「今です、パンツアーフォー！」

「突撃！パンツアーフォー！」

防砂林の中から迷彩シートや木の枝で偽装したあんこうチームのIV号戦車とペンギンさんチームのセンチネルが飛び出した。

「華さん！目標三式砲戦車！」

「鞍馬さん！目標九七式中戦車！」

唸りをあげて2輌の戦車が突撃する。

「しまった…。」

玉田達は完全に側面を突かれた。有利と思われた状況と根つからぬ突撃精神が災いしての完敗であった。

『知波单学園、三式砲戦車行動不能!!』

『知波单学園、九七式中戦車改行動不能!!』

知波单勢が次々と敵に討ち取られる中で西絹代以下森にいた面々は一旦北上して街の中央から北側に進出していった。

「くそつ!!こちらの突撃癖を誘発された時点で我々の負けだつたか…。」

キューポラから上半身を出した西は悔しげに左手の拳で天剣を叩いた。戦術を転換して戦略を練つても個々の人間の意識改革は中途半端だつたのだ。

「西隊長…。」

これで総数は4対7…。一式中戦車3輛に三式砲戦車1輛。相手は隊長車のIV号にIII突、M3リー、ヘツツァー、チヌ、八九式にセンチネル。ハツキリ言つて勝てる見込みは…。

「福田!!寺本!!細見!!街へ突撃するぞ!!」

残された知波单最後の一手、即ち突撃戦法。

「いいか?敵を破るには我々だけでは力不足だ。ならば最良は敵の頭を潰すこと。この一撃に全てを賭ける。特攻してIV号戦車を仕留める。それが一矢報いる最後の一手!!」

西は左右に並ぶ一同へと視線を一度向けてから質問した。

「ついてきてくれるか?」

その質問に否定することなど知波单一同にできるはずも無かつた。

「はいあります!」

「隊長にどこまでもお共いたします!」

「今なら敵も油断しているかもしません!」

福田、寺本、細見が力強く返答する。

「ありがとうございます。では行くぞ…。最優先目標は敵隊長車輛。」

一旦言葉を切った西は気合いを込めるかのように下した。

「突喊!!」

敵を完全に撃破して玉田達の無事を確認したみほ達は一旦情報を整理して次の手を打つべく地図を見ていた。

「これで残るは4輜ですね。」

「できればここで決するつもりでしたが…。」

梓と優花里が発言する。敵の半数を一気に仕留めたのだから良しとするが…。敵を刺激して突撃を誘い一気に勝負を決するというのがいろいろ作戦の目的だった。

「ともかく再び集合します。場所は…」

とりあえず戦果はあがりこちらのペースに持ち込めるのだからと氣を取り直したみほが指示を出そうとする。が…

「みぽりん!!アヒルさんとアリクイさんが敵に襲われたつて!!」

『大洗八九式中戦車、行動不能!!』

IV号から飛び出すように出てきた沙織からの報告とジャッジの声が響く。街の北側で作戦を決行したアヒルさんチームとアリクイさんチームが敵襲を受けた。

「追え追え!玉田達の犠牲を無駄にするなあ!」

西は一式中戦車の上で握り拳を作つて檄を飛ばす。期せずして玉田達が囮のようになつたことで西達はノーマークで街へと雪崩れ込むことに成功した。そこで彼女達は北側にいたアヒルさんチームとアリクイさんチームに思わず遭遇をした。

「多勢に無勢は逃げるが勝ち~!」

西達に追われているのはアリクイさんチームの三式中戦車。砲塔を後ろ向きにして反撃を試みているがさしもの砲手建子も右に左にぶれすぎてなかなか致命傷を与えられずにいた。

「ももがく、とにかくジグザグ走行だにやく！」

「ぐぬぬ、狙いが定められない。」

敵の砲弾をギリギリでしのぎ幅の制限される道路で右へ左へとにかく動く。

「こゝだつ！」

一瞬のチャンスをものにすべく建子が砲撃するが…。

「うおつ！」

間一髪、西の車輛の横をかすつてどこぞの居酒屋に直撃した。

「惜しい！」

悔しがる建子だがすぐに次なるチャンスを狙う。ちょうどその時ショッピングモールの特別観覧席にて破壊された居酒屋の大将がガツツポーズを決めていた。

83

『アリクイさんチーム、そのまま次の交差点を直進した先に歩道橋があります。』

「歩道橋？」

みほの言葉を聞き返すねこにやー。

「そうか!!」

一方で建子はみほの言わんとすることがすぐに分かつた。

砲塔を左斜め上に固定してその時を待つ。ねこにやーが砲塔から少し頭を出して歩道橋の接近を知らせる。建子はしつかりと発射トリガーを握りスコープに集中する。

「発射！」

発射された弾は歩道橋の基部に見事命中した。

「うおつ！」

知波單一同の前に歩道橋が崩れ落ち急停止を余儀なくされた。

「くそっ!!迂回するぞ！」

追いかけていた三式チヌの砲撃によつて道を塞がれた西達は迂回して追いかけるべく方向転換する。しかし…

『それには及びません。』

ズドンッ

「うあつ！」

「ひにや!?」

「もがつ！」

『大洗女子学園、三式中戦車行動不能!!』

少し前から追走から外れてアリクイさんチームの側面を突こうとしていた福田の一式が追い付いたのだ。

「これで5対4ですね。知波单もやつてくれます。」

「まさか敵のテリトリリーに突撃戦法を仕掛けてくるなんて…。」

これぞまさに知波单魂だ。しかし去年までの正面切つての突撃とはまるで違う。味方の犠牲によつて生まれた隙を突くかつて知波单がベスト4に輝いた時を彷彿とさせる作戦運びである。

「しかし敵の位置は分かりましたしアリクイさんチームが時間も稼いでくれました。」

みほはそう言うと咽頭マイクのスイッチを入れて各チームへと指示を出す。

「各車輛へ、引き続きカバさんチームはヒラメ作戦、カメさん、ペングンさんは大洗水族館側にてどっこいしょ作戦を用意してください。ウサギさんは各チームのサポートをお願いします。」

「IV号発見!!」

しばし後、集合して大洗の戦車を探していた西達は街の西部にて IV

号を発見した。

「寺本は私とIV号を砲撃!! 福田、細見は周囲を警戒!! 決して離れるな
! 後方にも注意しろ!」

間もなくIV号と知波単勢は町を北上してスタート地点のゴルフ場
を抜け大洗海水浴場へと至った。

「カバさん、お願ひします!」

『まかせろ!』

みほの言葉に頼もしく応えるエルヴィン。既にIII突はしつかりと
敵を捉えていた。

「砲撃用意!! マスター・アーム・オン!!」

エルヴィンの凛とした声が車内に響く。

「承知!!」

左衛門佐はスコープに敵をおさめる。狙うは火力の高い三式砲戦
車。

「ファイヤー!!」

突如砂山の中から三式砲戦車を砲撃が襲つた。

「なっ!?」

『知波単学園、三式砲戦車行動不能!!』

『III突か…』

まずは火力の大きい三式砲戦車を仕留めた。待ち伏せを得意とするIII突がまず砲撃とスコップで穴を掘り上から色を合わせたシート
を被せて軽く砂をかける。そしてきながら獲物を待ち伏せるヒラメ
の如く狙いすまして一撃を見舞つたのだ。

「よし、穴を出て残敵を追うぞ!」

一方でも新入生組が作戦を用意していた。

「ペンギンさん、頼むぞ！」

「「「「おう!!」「」」

カメさんチームのリーダー武藏から激励を受けたペンギンさんチームは気合いをいれた。

「じつくり狙え…。」

スコープを合わせて右から左へと走る一式戦車の側面を狙う。自らの射線と敵の重なる一瞬が勝負だ。

「発射！」

トリガーを引きドンッという音と共に57ミリ砲弾が発射された。

砲弾は見事に寺本の乗る一式中戦車の側面に命中した。

「どっこいしょ作戦大成功!!」

どっこいしょ作戦、それは昨年エキシビジョンマッチでカメさんチームとカモさんチームが披露したスーパー風紀アタックと大学選抜戦でカバさんチームと聖グロリアーナのローズヒップが披露したマカロニ作戦ツヴァイを組み合わせた戦法である。

カメさんとペンギンさんはまず砂浜から堤防の上に顔を出すようにヘツツァーの上にセンチネルが乗る。そして頭が出た部分を植え込みや海の家の営業看板に見立てた立て看板でカモフラージュして潜むのだ。

「よしつ!! 浜へ降りて決着をつけるぞ！」

「ペンギンに続けえ!!」

堤防を越えるべく2輌は移動する。一連の作戦によつて戦力は5対2となつた

「西隊長!!」

「福田!! 前に出ろ！ 私に構わずIV号を狙え!!」

「かしこまりました！」

目標はあくまで敵隊長車輦だ。一矢報いるべく肉薄する。

「そうはさせないよ!!」

ここで隊長車を守らんとウサギさんチーム、カメさんチーム、ペンギンさんチームが左右前方走り込んできた。

「突撃いい!!」

「撃てえ!!」

「IV号を守れ!!」

突如現れた集団に怯まず西と福田の一式中戦車は一撃を見舞う。

「撃て!!」

「野島さん、そのまま突っ込んで!!」

IV号を狙った砲撃は遮る形で割り込んだセンチネルに命中した。

『大洗女子学園、巡航戦車センチネル行動不能!!』

「おのれえ!!」

仲間のリタイアに火がついたカメさんチームは直ぐ様体勢を変える。砂浜で急速Uターン、これぞカバさんチーム（正確にはアンツイオのカルパツチヨことひなちゃん）直伝の必殺ナポリターンである。「てえ!!」

ヘツツァーの75ミリが一式の背面に突き刺さつた。

『知波单学園、一式中戦車行動不能!!』

「福田!?」

「西隊長!!後を頼みます!!」

頼りの片腕も失つたが今一度自らを奮い立てて西は追う。

「取つた!!」

再びIV号の背後を取つた西。撃破のチャンス。しかし：

「そこはさせん!!」

ここでついに西の隊長車がヘツツァーと追い付いたⅢ突に捉えられた。

「撃てえ!!」

「ファイヤー!!」

「てえ！」

III突とヘツツァーの75ミリ砲が西の車輛を仕留める。大洗二大歴女チームの見事なコンビ撃ちであった。そして同時に西の戦車も砲撃を放つ。その砲弾はIV号を掠めるにとどまった。

『知波単学園全車行動不能!! よつて、大洗女子学園の勝利!』

大洗

残存・IV号戦車H2型仕様、M3中戦車・リー、III号突撃砲F型、38t軽戦車改ヘツツァー
撃破・ポルシェ・ティーガー、ルノーB1・bis、八九式中戦車、三式中戦車、センチネル巡航戦車6ポンド長砲身型

知波単

残存・なし

撃破・一式中戦車3輢、九七式中戦車改4輢、三式砲戦車2輢

「ありがとうございました!!」

戦い終えた両校は集合して声を揃えて頭を下げる。

「開始時にはいけると思ったのですが、完敗であります。」

「いえ、レオポンさんとカモさんがやられてしまうなんて想像してませんでした。私たちも動搖してしまいましたから。」

実際に知波単の作戦は見事だつた。昨年黒森峰に正面から挑んで完敗した全国大会から大洗エキシビジョンマッチや北海道決戦を経て、新戦車も導入し確実にパワーアップを果たしていた。

「もしかするとそこで一気に突撃すべきだつたかもしませんね。勉強になりました！」

今回は独断行動により指揮系統が乱れたことと慎重になりすぎるあまり敵に作戦を整える時間を与えてしまつたことが敗因と言えよう。

「ようし!! それでは諸君!!」

並んだ隊員一同へと振り替えつて西は告げる。

「覚悟はできてるな!」

「「はい！ 西隊長!!」」

副隊長以下全員が声を揃える。

「よしつ!! それでは準備して20分後に集合だ!!」

「西さん、何をするんですか?」

みほの質問に再び振り返つてしつかりと目を見て西が答える。

「敗者の花道であります。」

「こ、これは…。」

「なんとまあ…。」

「…」

知波単いわく敗者の花道を見たみほは思わず固まり沙織はなれば感心し、華は言葉を失う。それというのも目の前で中央通りをゆつくりと進んでいくトラック数台の上で知波単チームがタイツ着用であんこう音頭を踊つていたからだ。

「西隊長、恥ずかしいであります！」

「何も我々が自主的にしなくても良いのでは?」

「いかん！…これは大洗の皆様への呼んでいただいたお礼なのだ！そして我々が明日勝利するための布石なのだ！」

福田と続く細見の発言に西が怒鳴り率先して踊り舞う。

「良いぞ良いぞ！…それもう一丁!!」

先頭車で太鼓を叩く橋下団長がさらに威勢よくバチを振るう。

「皆!!」の悔しさを忘れるなあ!!!」

知波単のやけくそあんこう音頭はなかなかに盛況であった。

ちなみに黒森峰の逸見エリカ、知波単学園チーム一同はもつとらぶらぶ作戦において、アンツイオ高校チームはアンソロジーコミックにおいてあんこう音頭のタイプを着用しています。

「今日のMVPはカバさんチームだね。」

「先輩、おめでとうございます！」

「いやいや、今日の勝利はカメさんやアヒルさん達が敵を引き付けてくれたからだ。」

一方でウサギさんチーム、カバさんチーム、ペンギンさんチーム、カメさんチームが集まつて今日の戦果について話し合っていた。梓とシャルルの称賛にエルヴィンがトレードマークのドイツ軍帽のつばをつまんで返す。

しかしながらと言つても今日はカバさんチームのⅢ号突撃砲が大活躍だつた。味方が引き付けたとは言え、敵車輛の3分の1、3輌撃破している。

「ペンギンさんチームや新カメさんチームもよくやつた。西隊長相手に一対一を挑んだり、体当たりもして、充分に活躍している。」

力エサルからのお返しの称賛に新入生組が笑顔を見せる。そこへ続くはおりょうに左衛門佐。

「特にペンギンさんチームは隊長車を自らを犠牲にして庇うなんて、

まるで弁慶のようだつたぜよ。」

「いや、大阪の陣で真田幸村の影武者として底い果てた真田十勇士の穴山小介だ。」

「いえ、戦艦大和を守つて沈んだ駆逐艦浦風です!!」

「「「「それだ!!」」」」

先輩に続けと言わんばかりに発言した武蔵の意見に歴女一同声を揃える。なんだかんだ言つて皆馴染んで来ていた。

「ねこにやー先輩!!もつと射撃を磨きたいです!!」

「よく言つた、まずはゲーセンへ行こう。」

「シユミレーションならおまかせもが!!」

「皆、明日から特訓するわよ! 今度今日みたいな失態は許されないからね!」

「「「はい!! キヤプテン!!」」」

「よしそ今からできる限りの整備するよ!・」

「「「はいっ!!」」」

「良い? 次こそ私達が活躍するのよ!・」

「風紀委員の底力見せるのよ!・」

「「おーっ!!」」

その他のチームも今日の試合を振り返つたり、自分達のすべき」とを模索する。明日からの訓練にも熱が入ることだろう。

「みほさん、西さん。」

一方でやけくそあんこう音頭を終えた西と合流したみほは背後から呼び掛けられ振り向くと思わぬ人物がいた。

「オレンジペコさん!？」

「オレンジペコ殿!!」

「びきげんようです。」

聖グロリアーナ新隊長オレンジペコが笑顔で立っていた。

「びく無沙汰しております!」

「わざわざ観戦に来てくれたんですか?」

「そうですね、私は大洗のファンですから。それに…」

西とみほの言葉に返しつつ少し含みのあるような笑みを浮かべて…。

「今年の偵察です。よろしければお茶などいかがですか?」

この時2人はペコがダージリン化しつつあるのではと考えた。

「じゃあ…少しだけ。」

「お待ちしておりましたわあ!」

「西住さん、西さん、どうぞこちらへ。」

「お2人ともお疲れ様っす!」

「みほさん、良い試合でしたよ。」

オレンジペコに案内された先でみほはさらに思わぬ人物達の歓待を受けた。

「ローズヒップさん、エクレールさん、ペパロニさん、小梅さん。」

「いやあ、各校の幹部が揃いぶみでありますな!」

ペパロニは事前に応援に来ることと屋台を出す旨を受けていたため2人は知っていたが他にもこれだけ来ているとは思わなかつた。「エクレールさんと赤星さんは偶然いらっしゃつてたそうですよ。」「西住さん、お久しぶりですわね。さ、お2人ともどうぞどうぞ。」

ペコが説明するとエクレールが2人に席をすすめる。エクレール

とオレンジペコがみほを挟む形に、ペパロニと小梅が西を挟む形で着席する。

「何になりますか？」

みほの質問に各々答える。

「それじやあ、オレンジペコさんと同じものを。」

「自分は冷えた麦茶をお願いします。」

「はい、ではオレンジペコをもう1つと麦茶を。」

近くの給仕係に伝えるとすぐさま2人の飲み物が運ばれて来た。
そこでエクレールが突然みほへ頭を下げた。

「西住さん、改めて昨年のこと謝罪いたします。」

「エクレールさん？」

「私にとつて恩人たるあなたの危機に私達は何もできなかつた…。」

「あ…。」

エクレールの発言によつて昨年の北海道決戦でのことだと思い至る。

「あなたたちとの練習試合のおかげで私達のマジノ女学院戦車道は電撃戦術の道を拓くことが出来ました。しかし…私達には何も…。」

あの時エクレール達マジノ女学院は姉妹校であるBC自由学園の起こした内紛によつてとても大洗に加勢することが出来ず、ダージリンからの応援要請に各校が応える中でエクレールは悔し涙を流してみほへのメッセージを託すことしか出来なかつた。

「エクレールさん…私はあなたのメッセージをダージリンさんから受け取つた時にとても心強くなれました。」

「…」

みほの言葉が彼女の思いとともにエクレールへと伝わる。

「ここに来れなくとも、自分を支えてくれる人や、想ってくれている人がいるんだつて…。」

「みほさん…。」

「実は私達の今の教官も、あの時メッセージを送つてくれた人なんです。」

羽村葵教官、直接会うことは無かつたが彼もまたみほが戦車道大会

決勝での行動が非難されたとき、黒森峰から大洗へと転校したとき、そして廃校の危機にさらされたときに彼女を支えた1人だったのだ。「あなたや色々な人の言葉が私のことを勇気づけてくれました。」

『みほちゃん、頑張つてね!!俺は東京から動けないけど、応援してるよ！』

『みほさん、気圧されず、いつものあなたで戦つて。そうすればきっと勝利はあなたの手に…。』

『みほちゃんガンバ!!大丈夫!!きっと勝てるよ！』

『みほちゃん、私は勝利を信じてる。だからみほちゃんも信じて頑張つて!!』

『みほ、負けないでね！私との約束のために、私も頑張るから。』

かつて兄のように慕つた葵、大洗としての初勝利を称えてくれたエクレール、かつて共に戦車に乗つた親友の瞳と千絵、そして同じくドイツにいる親友のエミ。みほのもとに来ることはできなかつたが、その想いがこめられたメッセージはみほの大きな心の支えとなつた。

「エクレールさん、ありがとう。」

「みほさん…。」

みほの言葉にエクレールは瞳を潤ませてしまつ。あの日交わした握手のように自然と2人はお互の手を握りあつた。

「くううう良い話つすねえ！ぐすつ!!」

こういうのに弱いのかペパロニが涙を流して鼻を啜る。

「でも本当に良かつたですね。こうして私達はまた戦車道が出来るんですから。」

小梅の言葉に全員が頷く。戦車が繋いだお互いの絆が失われかけても再び戦車で結ぶことができたあの夏は皆の宝物となつていた。

「今年こそは私達が優勝して勝利のお紅茶をいただきますわ!!」

「いや、ノリと勢いの増した私達アンツイオが最強っす！」

ローズヒップが紅茶のカップを掲げて勝利宣言をするとペパロニ

が続く。そのとき

カシヤカシヤ

「良いねえ、これぞ青春の意気込み!!」

テーブルに座る彼女達を撮影するカメラの音がする。いつの間にやらカメラを構えた男性が来て写真を撮影していた。

「一文字さん。」

「はい、みほちゃん視線ちようだい。」

名前を呼ばれた男は気にせずみほに指示を出す。

「ちよつとあなた、いきなり失礼ではありますんこと?」

エクレールが少し咎める口調で言うと男は顔をカメラから離した。「おつと…これは失礼しました。」

七三に固められた黒髪、気持ち細目に太めの力強い眉、170後半はあると思われる背丈に服装は黒シャツに白色のズボンに黒ブーツ。そして首から下げるカメラと赤いスカーフがトレードマークな人物。「マジノ女学院の隊長さんは初見でしたね。一文字隼人（いちもんじ。はやと）、カメラマンで大洗の密着取材を担当します。」

「一文字さんは去年の大会頃から大洗に通いで来てくれてるの。」

みほが補足して男の素性を明らかにした。エクレール以外の面々がとくに声をあげたりしなかつたのは昨年の大会等で大洗行くところ必ず現れるためすっかり顔見知りだったからだ。

「大洗女子の快進撃を取材するためには。いやあ局長から社内表彰されるなんて去年の今頃は思つてなかつたよ。そのおかげで今年も担当できるなんて本当にありがたいね。」

カメラを片手になんとも嬉しそうに隼人が言う。なにせ彼の写真を載せた記事が飛ぶように売れるのだからカメラマンとしてこんなにも嬉しいことは無いのだろう。

「せつかなんすから私も撮つてくださいよ。」

ペパロニの言葉に素早く隼人が反応する。

「ん?それは名案、撮影させてもらえますか?」

全員異議なしだつた。当初は隼人の登場を好ましく思わなかつたエクレールも承諾する。

「はい、撮りますよー！ハイ、チーズ!!」

中心にみほ、左右にオレンジペコと西が配置、後ろには小梅とペパロニ、エクレール、ローズヒップが並んで写真を写す。

『大洗女子学園、本年度白星スタート!!』

翌日の戦車道新聞の一面を大きく飾った記事である。

『昨日大洗にて行われた大洗女子学園対知波单学園の練習試合は大洗女子学園に軍配が上がった。昨年度の高校全国大会優勝、大学選抜チームとの対決は記憶に新しい。大洗女子は新戦力にセンチネル巡航戦車を加え、新履修生も多数参加しての勝利は今年の更なる躍進を予感させてならない。また聖グロリアーナや黒森峰女学園等の強豪校も見学に来ており、今年は例年以上の激戦が期待される。今回の試合について大洗の隊長である西住みほさんは「なんとか勝利できましたが知波单も強くなっています。今年は昨年以上の激戦になりですが新入生の皆さんもとても頑張ってくれていますので、この勝利で自信をつけて全国大会でも皆の活躍を期待します。」とのこと。一方知波单の隊長西絹代さんは「今日の敗北を糧として、各員のさらなる努力と意識改革を願い日々精進を貫こうと思います。」とのこと。来月に迫った高校戦車道全国大会にさうなる注目が集まる中でのこの戦いは今年の更なるドラマを予感させてならない一戦となつた。』
一面トップにはあの時並んだ7人の写真が飾られていた。

抽選会・強敵ゲルダム高校です！

そして迎えた抽選会の日、集まつた各校の代表達がくじを引いていく。昨年優勝の大洗女子学園はトップであつた。

(うう…緊張する…。)

こういう場になれていないみほは多くの視線が集まる中で抽選箱から札をとる。昨年はまったくの無名とあつてステージに注目していたのは聖グロ勢と黒森峰勢くらいだった。

『大洗女子学園、13番!!』

放送が流れると場内がざわめく。16の学校がそれぞれ8校ずつA、Bブロックに別れてトーナメントが行われるのがこの戦車道全国大会の通例だ。

「13番、Bブロックですね。」

「優花里先輩、今年はどんな高校が相手なんでしょうかね？」

みほと一緒にやつて来た優花里と梓は壇上から降りてくるみほを見ながら会話する。去年はいきなりのサンダース大学付属高校という強敵と闘うはめになつてしまつたが今年はいかに？

続いて準優勝の黒森峰女学園の隊長逸見エリカが立ち上がりステージを目指す。途中みほとそれ違いなにやら一言二言交わして行つた。

「エリカ殿から何か言われましたか？」

戻ってきたみほに優花里が少し心配そうにたずね、梓もみほへと顔を向ける。今回初めて抽選会についてきた梓は実際見てはいながら昨年の抽選会の後でみほ達あんこうチームと黒森峰代表として來ていたエリカとの間でひと悶着あつたのだ。

「ううん、大丈夫。今年も決勝で待つてるつて。
どうやら取り越し苦労だつたようだ。」

『黒森峰女学園、6番!!』

逸見エリカが引いた番号に会場がどよめく。黒森峰はAブロック。つまり昨年と同じく決勝までお互い接点が無い組み合わせとなつた。さらに各校代表が次々とステージの上でくじを引いていく。

『プラウダ高校、1番!!』

『聖グロリアーナ女学院、15番!!』

『アンツィオ高校・9番!!』

『サンダース大学付属高校、5番!!』

『知波单学園、12番!!』

『継続高校、8番!!』

『マジノ女学院、3番!!』

そして…

『ゲルダム高校、14番!!』

大洗女子学園と最初に激突する相手が決まった。

『ゲルダム高校?』

「聞き覚えの無い学校ですね。」

「私も初めて聞いた。」

梓、優花里、みほが続けて言葉を発する。戦車道名門の家系であるみほも知らないとは全くの新設校と言うことか。

そして壇上から件の学校代表が降りて行くところであり、ほぼ同時に3の方にその人物は数秒視線を向けた。

「大洗女子、相手にとつて不足なし。」

青と黄色を基調とするセーラー服に身を包んだゲルダム高校戦車道隊長黒部将実（くろべ・まさみ）はそう呟いて視線を逸らした。

マッチング一覧

Aブロック

- 第1試合 プラウダ高校対メイプル高校
第2試合 マジノ女学院対ヴァイキング水産高校
第3試合 サンダース大学附属高校対黒森峰女学院
第4試合 コアラの森学園対継続高校

Bブロック

- 第1試合 アンツイオ高校対ヨーグルト学園
第2試合 秀麗あおば高校対知波单学園
第3試合 大洗女子学園対ゲルダム高校
第4試合 聖グロリアーナ女学院対ワツフル学園

大洗が初戦を突破すればおそらく聖グロリアーナと第二回戦で激突することだろう。聖グロは大洗が四強で唯一白星を逃している相手であることからかなりの激戦が予想される。そして知波单、アンツイオとこれまた大洗には因縁ある相手が組み込まれていることも注目されていた。また今回初出場となるゲルダム高校（鳥取県）、秀麗あおば高校（京都府）と西日本勢が増えたことも今大会の特徴と言えよう（その他の西日本勢、黒森峰女学院・熊本県、サンダース大学付属高校・長崎県、なお昨年参加のBC自由学園は岡山县にある）。

一方でAブロックではいきなりの黒森峰対サンダースが1番の注目を集めた。しかも勝ち上がった方はプラウダと激突する可能性も高いうえに継続高校も勝ち上がるだろう。かなりの熱戦だ。

ちなみに昨年の出場校であるBC自由学園とボンブル高校は前者が昨年起こした内紛騒動の責任として部活、履修科目の活動及び大会等への参加自粛。後者はタンカスロン（強襲戦車競技）への注力のため今大会不参加である。

大洗代表の3人は抽選会の後、取材陣の猛攻を切り抜けて戦車喫茶ルクレールにて休憩をとつていた。

「ゲルダム高校…鳥取県の鳥取砂丘に近い鳥取港を母港とする学園艦とありますね。」

「へえ、鳥取か…。」

「砂漠に戦車…ドイツのアフリカ軍団なんかが似合いそうですね。」梓が携帯で調べた情報にみほが相槌を打ち優花里が返す。何やらその瞳が輝き始めたように感じたみほの顔にひとすじの汗が流れた…。

「優花里さん…もしかして…」

一週間後…：

『秋山優花里ゲルダム高校潜入作戦!!』

ドドーン!!という効果音と共に大洗戦車道ミーティングルームに設置されたモニターに赤字のタイトルが浮かび上がった。

『わたくしは今、謎に包まれたゲルダム高校へと潜入しつつあります。今回もコンビニ船を利用しております。』

優花里のナレーションが始まり少し遠くにゲルダム高校学園艦の姿が見える。大きさは大洗女子学園の2倍以上、外観は潜水艦Uボートを彷彿とさせる。

『ここがゲルダム高校ですね。なんともものしい校章でしょう。ちなみにこの学校はもともと2年前までは大鷲学園という名前だつたそうであります。』

場面は切り替わり校舎入り口へ。正面から見据えると鷲に絡みつ

く蛇という独特な校章が嫌でも目に入る。

さらに時間が進められ戦車道訓練の時間がきた。

『これより、我がゲルダム高校戦車隊旗掲揚、全員注目!!』

訓練前の訓示が始まられる前に幹部と思われる生徒の宣言に合わせて練習用グラウンドに立てられた旗竿にするすると旗が上がつていく。赤地の布に黒を主体とした色彩で校章が描かれた旗が風に翻る。

『では続いて、黒部隊長からの訓示である。』

壇上の生徒がさらに続けると全員が体勢を戻す。壇の後方から1人の生徒が上がってきた。優花里がすかさず隠したカメラをズーム操作する。青を基調とした他の生徒とは違う黒いパンツアージャケットに身を包み所々に軍服の様な装飾がなされ、制服の色に合わせた黒色のオープンヘルム式鉄兜を被っている。風にはためくその頭頂部の赤いトサカ状の羽根飾りがなんとも鮮やかだ。

『諸君、我々は無事先日サンダース大付属の二軍とヴァイキング水産高校との練習試合に勝利した。しかし相手は我々より格下。この程度で満足されでは困る。』

白手袋をはめた右手に握る指揮棒をうならせて威圧するがごとき話し方。優花里は思わず息を呑んだ。

『我々には勝利の二文字しかない。そのためには各員が最善を尽くし、時に勇敢に、時に非情となることになるやもしれん!』

そして指揮棒を高々と振り上げて叫びを上げた。

『我々は必ずや勝利をおさめる。それが我が栄光あるゲルダム高校戦車道!!我々には敗北はない!!アフリカ砂漠の砂嵐の様な怒濤の熱き一撃のもとに大洗の寄せ集め戦車の愚連隊を叩きのめすのだ!』

『おおーっ!!!』

ゲルダム高校戦車道の全員が腕を上に突きだして応える。とりあえず優花里はそれにならない、もしかしたらこの高校はかなりのダークホースなのでは無かるかと思い巡らせる。カリスマ性の高い指揮官に結束力の高い隊員達、そしてドイツの強力な戦車、強敵の予感が

する。

『さて、諸君。これより訓練だが、その前に紹介したいゲストがいらっしゃっている。』

壇上の将美がそう言うやいなや優花里のいる方へと顔を向けた。
『そこにあることはわかっているのだ!! 大洗女子学園のスパイ、秋山
優花里!!』

『えっ!?』

カメラ目線となつた将美が続ける。

『我がゲルダム高校を少々甘く見ていたな。』

優花里の左右に立つた隊員が彼女の腕を掴む。

『丁重にもてなしてやろう。連れていけ!!』

「試合前の偵察行為とみたが…。」

ゲルダム高校戦車道の隊長室に連れてこられた優花里は持ち物検査の後尋問を受けていた。

「黙秘かね…まあ良いだろう。」

そう言うと将美は立ち上がり指揮棒を右手に持つて左手の掌でその先を軽く握りながら続けた。

「せつから来てくれたんだ、我が戦車道の特訓を見ていただこう。」

「総員整列!!」

将美と優花里が訓練所に戻ってきたのを確認した副隊長格が声をあげるとそれぞれの車輌にいた履修生達がすぐさま集合した。

「まず基礎トレーニングは終了だ。ここから本格的な特訓に入るぞ！」

「まずは1年生チーム、前へ!!」

『良いか!? この訓練はただの戦争ごっこではない!! 常に動き回らねばどうなるか? 分かっているな!』

「はいっ!!」

「よしつ!! ではかかれ!!」

III号F型・N型アフリカ軍団仕様、IV号G型アフリカ軍団仕様、VI号ティーガーIアフリカ軍団仕様

次々と主力の戦車が現れる。情報通りドイツ系の車輌が主力である。

「第1、第2、第3チーム、前へ！」

呼ばれたチームが前に出る。それぞれIII号戦車F型2輌、ティーガーIに乗る。

「砲爆隊用意！」

少し離れた丘に何か戦車と思われるものが集まっている。
「あれは!?

優花里はカメラをズームアップして見る。そこにいたのは…
「38t対戦車自走砲マルダーIII!!それに…II号自走重歩兵砲!!」

いずれもドイツ軍アフリカ軍団の北アフリカ戦線で活躍した対戦車自走砲と歩兵榴弾砲である。前者が5輌、後者が2輌、さらにその先の丘にも各4輌用意されている。

38t対戦車自走砲マルダーIII H型

重量約10トン
全長4.65m
全幅2.35m
全高2.48m
主砲75ミリ40式3型対戦車砲

大洗でも使用していたチエコスロバキア製38t軽戦車の車体に7.5cm Pak 40/3 対戦車砲を搭載したオープントップ式対戦車自走砲である。

II号自走重歩兵砲

重量約	11トン
全長	5.41m
全幅	2.6m
全高	1.9m

主砲 15cm榴弾砲

こちらはII号戦車の車体に15cm重歩兵砲33年型を搭載した同じくオープントップ式自走砲である。主砲は榴弾砲のため貫徹力は低いがドイツ歩兵部隊が装備する砲としては当時最も大口径かつ強力であり、北アフリカ戦線などで敵拠点の制圧に威力を發揮している。

ちなみに第二次大戦中の駆逐戦車と自走砲の違いは明確には無く、所属の違いで分類される。駆逐戦車は機甲部隊、自走砲は砲兵部隊に所属する。

例

駆逐戦車

ヘッツァー、フェルディナンド、エレファント、ヤークトティーガー、ラング、トータス等

自走砲

III号突撃砲、三式砲戦車、セモベンテ自走砲、BT-42突撃砲、IV号突撃砲、セクストン自走砲、グリーレ自走砲等

なお現在においての明確な違いは、近代的な戦車には移動する物体を砲撃する能力と移動しながら砲撃する能力が備えられている。対して自走砲では、自衛戦闘時に直接射撃が行なえるように照準器を持つものもあるものの、あまり重視されておらず、長距離の目標へ向けてどれだけより多くの砲弾を短時間で投射できるかと言う定義がある。

「訓練開始!!パンツァー・フォー!!」

将美の号令に3輛が走り出す。単縦陣でティーガーIを2輛のIII号が前後で挟む形だ。

「自走砲部隊、攻撃用意！」

「ファイエル（撃て）！」

副隊長格が続けて指示を出す。すると…

「なつ?！」

用意されていた自走砲部隊が砲撃を開始した。III号とティーガーの周囲に次々と炸裂する。

「驚いたかね？あの一帯には簡易型の地雷も仕掛けたある。」

その模様を見ている優花里に将美はさらに続けた。

「決して我々は生半可な気持ちで大会に挑んでいるのではない。自ら的になることで仲間の隊員の士気を高め、度胸を身につけさせのだ。それも西住流が提唱するような鋼の意志をな。」

「すごい…。」

「勝つばかりではなく、追い詰められた時こそが真価を発揮するのだ。」

そして3輛は脱落することなく危険地帯を突破した。

「ご理解いただけたかね？」

「はい。」

なんという気迫のこもった特訓だろう。こうしている間にも地雷

原を次々と戦車が駆け抜け、ジープが簡易型地雷を適宜落としていく。

さらに3年生チームまでこれを終えると今度は岩やドラム缶が点在し数輌の戦車や自動車が行き交う地帯を戦車で横断する訓練、起伏の激しい地帯での一斉行進間射撃と続く。

「ここまで2年かかった…強豪校に勝つために人を揃え装備を割り振り、人を育て戦略を練り時には鬼になり…。」

決して楽な道では無かつたのだろう。優花里の交遊関係の中ではらばかつてアンチヨビがアンツイオ高校で戦車道を建て直したごとく彼女もまた自分の力の限り自らと仲間を虐め抜いてきたのだ。

そしてしばしの感慨に耽っていた将美は優花里へと顔を向けた。

「ではそろそろお引き取り願おう。蟹森、坪龜。」

傍で控えていた2人の隊員を呼ぶ。

「秋山さんを連絡船までジープで丁重にお送りしろ。」

そして将美は今一度優花里のカメラに向き直った。

「大洗に告ぐ、我々ゲルダム高校戦車隊一同、試合の日を楽しみにしている。」

「なんとも…」

「恐い特訓でしたねえ。」

一通り優花里の持ち帰った映像を見終えた大洗の主だつたメンバーはその内容に言葉が出ず、少しの間を置いてみほと梓が確認するようになり、口を開いた。続いてアヒルさんチームの磯辺典子が発言する。「しかし結束力、士気共にひじょうに高いと言えます。戦車に限らず集団競技には強みですね！」

バレー部のキャプテンでもある彼女らしい分析だ。

「みぽりん、何か手はあるかな？」

「うーん…。」

同じチームの沙織から質問されてみほは首を傾げて考える。

「一回戦のステージは砂漠地帯ですから地の利もあるだろうな。」

「砂漠なら街を除けば遮蔽物は少ないはず…。それなら車高の低い我らのIII突やヘツツアーの出番。」

「また砂に紛れて狙い撃ちですね！」

隣同士に座つたカエサルとツチヤが話し合つていると武蔵が会話に入つてくる。

「いや、果たして通じるだろかにや？」

「どんな状況にも流されないようなら…」こは一気に攻め込んで一点集中、敵の頭を潰すべきよ！」

対面に座るねこにやーとゴモヨが意見を出す。

「いや、ここはリー、ヘツツアー、八九式、センチネルで機動部隊を編成して敵を搅乱して機を伺うのはどうだろう？」

「アンツィオ得意のマカロニ作戦を拝借して誘き出すというのは？」エルヴィンも続けて提案し、最後に末席に座る澄も手を控えめにあげて発言する。

各員次々と案を出していき優花里が纏めていくが隊長のみほはホワイトボードに貼られた資料を見ながら首を傾げ続けていた。

「うーん…。」

「西住殿、ずっと悩んでますね。」

下校してもみほは74アイスにて悩んでいた。ついてきた優花里がその様子を見ながら言う。

「戦つたことのない相手だから大変だね。」

同じくついてきた沙織からも心配そうな声が出る。

「…」

茨城メロンアイスをパクリとしたみほが無言で宙を見る。

「西住殿。」

たまらず優花里が呼び掛けるも…

「…」

反応なし。

「みぽりん。」

今度は沙織が呼び掛ける。

「うーん…。」

動きはあつたが声が届いていない。

「西住殿！」

「わっ！」

改めて強く呼び掛けるとみほが驚き危うくスプーンを落としそうになってしまった。

「ゆ、優花里さん…ごめん…」

状況から自分が上の空になつていたことを理解したみほが謝る。「西住殿、考えるのは必要でしようが我々にも頼つてください。」

力になりたくて仕方のない優花里、そして沙織も続くが：

「そうだよ、3人寄れば紋次郎の知恵つて言うじゃない！」

「武部殿、それを言うなら3人寄れば文殊の知恵です。」

「…」

優花里の突つ込みを受けた沙織がやつちやつたと言つた感じに固まる。

『あつしには、関わりのねえこつです…。』

ちようど近くに設置されたテレビからそんな台詞が聞こえてきた。

そうしている間に各校の対決が決していく。

Aブロック

第1試合 プラウダ高校対メイプル高校

プラウダ高校戦力

T—3 4—8 5中戦車3輛、T—3 4—7 6中戦車3輛、BT—7
快速戦車2輛、KV—2重戦車1輛、IS—2スターリン重戦車1輛

山岳地帯における戦いでプラウダ高校が勝利

第2試合 マジノ女学院対ヴァイキング水産高校
マジノ女学院戦力

ソミュアS35長砲身型2輢、ルノーB1bis2輢、ルノーB1
型3輢、ルノーAMC35軽戦車2輢

無人島における戦いでマジノ女学院が勝利

そして：

第3試合 サンダース大学付属高校対黒森峰女学院園

「ここで決めるわ！」
「こうなりや自棄よ！突っ込め！」

荒れ地ステージを舞台に四強の2校、サンダース大付属と黒森峰の
戦いが繰り広げられていた。

サンダース大学付属高校戦力

M4中戦車シャーマンA1型3輢、同A3型2輢、同A3イージー
8型3輢、ファイアーフライ2輢

黒森峰女学院戦力

ティーガーII2輢、ヤークトティーガー1輢、エレファント1輢、III
号戦車J型2輢、パンターG型4輢

高地よりファイアーフライで狙撃、残りの車輢で攪乱する作戦をとつ
たサンダースであつたがパンターの機動力を利用しての応戦と重駆
逐戦車の装甲を盾に利用した作戦でファイアーフライを仕留めた。昨

年の大洗の戦い方を参考にした作戦であつたがやはり黒森峰は一筋縄ではいかなかつた。

「うおおおおお！」

試合の終盤、サンダース隊長アリサのイージー8がA1型2輌を引き連れて突撃する。待ち受けるは黒森峰隊長逸見エリカのティーガーII、副隊長赤星小梅と直下リタのパンターG型2輌。

「ファイエル！」

「ファイヤー！」

すれ違ひ様の砲撃、まさしく荒野の決闘のごとき激突は…。

『サンダース大学付属高校フラッグ車、行動不能!!よつて、黒森峰女学校園の勝利!!』

黒森峰に軍配が上がつた。

「くそつ！」

アリサは悔しげに車内の手すりを叩いた。

荒れ地における戦いで黒森峰女学校園の勝利

第4試合コアラの森学園対継続高校 継続高校戦力

B T—42 突撃砲1輌、IV号戦車G型1輌、III号突撃砲G型1輌、T—26E 戦車1輌、T—34—76中戦車1輌、T—50 戦車1輌、BT—7 快速戦車3輌、KV—1 重戦車1輌

ゴーストタウンにおける戦いで継続高校が勝利

B ブロック

第1試合 アンツイオ高校対ヨーダルト学園

アンツイオ高校戦力

P40 重戦車1輌、セモベンテ自走砲M41型3輌、カルロアル

マートM15型1輌、L3—C C5 輛

渓谷地帯における戦いでアンツイオ高校が勝利

第2試合 秀麗あおば高校対知波单学園

知波单学園戦力

一式中戦車4輛、三式砲戦車3輛、九七式中戦車改3輛

秀麗あおば高校戦力

バレンタイン歩兵戦車III型5輛、M4中戦車シャーマンA1型2
輛、ヴァリアント歩兵戦車1輛、チャレンジャー巡航戦車2輛

雪原地帯における戦いで知波单学園が勝利

「もうすぐ我々大洗とゲルダム高校の試合の日だ！」

放課後、戦車ガレージの前で大洗女子学園戦車道履修生全員が集合していた。

「相手はドイツのアフリカ軍団を彷彿とさせる戦車隊、しかも敵に有利な砂漠での戦いとなる。」

「総合戦力と地の利は向こうにあると見て良いでしよう。」

副隊長のエルヴィン、そして參謀格の優花里が履修生達の前に出て試合に関する訓示を行つていた。隊長のみほと副隊長の梓も同じく前に立ち、少し離れた場所に羽村葵以下教官と補佐一同も揃つている。

「しかし、我々はここで負けるつもりなど毛頭無い！新戦力も揃えて各自のポテンシャルも上がつてきている！相手がゲルダム軍団だろうがロンメル軍団だろうが我々は怖れない！」

エルヴィンの力強い言葉に履修生達から賛同する言葉がいくつかかる。ここで隊長のみほが一步前に進み出る。

「それでは皆さん、力を出しきつて全国大会にのぞみましよう。例え相手がこちらより数が多くても決して勝てないわけではないことは昨

年証明しました。」

第1回戦、2回戦10対5、準決勝戦15対6、決勝戦20対8、大洗は完全に数で負けていたが各々の持ち前の技術や力、そして運を味方につけて戦い抜いてきた。

「今年も優勝を目指して、私も頑張ります。皆さん之力を貸してください！お願いします！」

みほがそう言って頭を下げた。しばし一同の沈黙…そして…。

「西住隊長、そんな言い方水くさいですよ!!」

「私達は大洗戦車隊の一員、運命共同体です。」

「廃校のプレッシャーの無い分戦いやすいと思うな。」

「賽は投げられた!! 戦車道こそが我らが生きる戦場!!」

「出オチの汚名を返上するぞー！」

アヒルさんチームの磯辺典子を筆頭にゴモヨ、ツチヤ、カエサル、ねこにやーと各リーダーが発言し、他の面々も意気高く「やるぞー!!」「大洗ファイトー!!」と続く。メンバーの士気も上がっていることが見てとれた。みほが顔をあげたときに見たのは頼れるメンバー達の自信満々な顔だつた。

「では本日の練習はこれにて解散!!」

「「「「「「ありがとうございました！」」」」」」

葵が教官として締めてこの日の訓練は終わった。

大洗女子学園とゲルダム高校の対決迫る。果たしてみほは作戦を立てられたのか？ゲルダム高校はいかなる戦法で大洗を迎え撃つのか？それぞれの関係者はもとより多くの人達が注目する試合が幕を開けようとしていた。

熱砂の攻防・アフリカ軍団です！

第64回高校戦車道全国大会第一回戦を迎えた大洗女子学園は特設された砂漠ステージへと来ていた。

「暑い…」

「まだ6月だよお～…」

快晴に恵まれた砂漠の出迎えに一同辟易してしまう。麻子が口を開いて沙織からも暑さを非難する言葉が出る。

「去年はこんな感じの所では試合をしてなかつたね。」

「熱中症注意でありますね。」

「車内はまるで蒸し風呂の様です。」

IV号の上ではみほと優花里が話をしており、IV号からは華がタオルで顔を拭きながら出てきた。

各チームもあんこう同様に暑さに参つてゐる…そんな中で…

「この程度の暑さがなんだ！」

III突の上で副隊長のエルヴィンが声をあげる。ロンメル將軍を崇拜する彼女としては待ちに待つた一戦らしい。

「エルヴィン、体力を無駄に消費するから降りた方がいいぜよ。」

「昨日からこの調子では先が思いやられる。」

「真田丸を放送していた頃のもんざも似たようなものだつたと思うが。」

歴女チームことカバさんチームがエルヴィンを宥める。さすがにこの暑さに耐えかねカエサルとおりようもトレードマークであるマフラーと羽織を脱いでいる。

そんなカバさんチームの隣には同じく歴女の集まりカメさんチー

ムがいる。彼女らは暑さに耐えて静かに待っていた。

「ん？」

ふとヘツツァーの上に座っていた十兵衛が何かに気づいて立ち上がった。

「どうした十兵衛？」

脇にいたシャルルが十兵衛の行動に気づいて声をかけた。

「…」

十兵衛は答えずに左手を目の上に水平にして遠くを見ていた。

「…来た。」

彼女の目には遠くで砂を巻き上げて近づいてくる1輌の戦車の姿が映っていた。

大洗女子学園チームの前に現れたのはゲルダム高校の隊長、黒部将美であった。自前のティーガーIで大洗の待機場所に乗り付けて1人で降りてくる。

「ゲルダム高校戦車隊長黒部将美、あなたと試合できることを光榮に思うわ。」

「大洗女子学園戦車隊長西住みほです。よろしくお願ひします。」

挨拶にやつてきた将美とみほが握手を交わす。試合前の儀式の様なものだ。

「我らがゲルダム高校戦車道の強さ、とくどく覗ください。」

そう言うと将美は「ちょっと失礼…」と断つてとある車輌のもとへと向かつた。

「ポルシェ・ティーガー…。」

レオポンチームのポルシェ・ティーガーの前に立ち見上げる。彼女自身初めて見る車輌だった。

「レオポンが気になる？」

ポルシェ・ティーガーの脇にいた自動車部を代表してリーダーのツチヤが歩み出てきた。さすがに暑いので今日は整備つなぎをホシノ

スタイルにしている。将美はツチヤに身体ごと向き直つて訊ねた。

「あなたがツチヤさんね？」

「どうも、ポルシェ・ティーガーを預かつてるツチヤです。」

笑顔で返すツチヤから将美は少し視線をポルシェ・ティーガーへとざらして続けた。

「昨年の全国大会決勝戦と大学選抜戦拝見しました。橋を崩したり一発で道を塞いだり、あげくに超加速。あなたのその腕前は称賛に値します。」

将美の称賛にツチヤは左手で頭をかいだ。

「そう言われると照れるなあ。」

そこで将美は再びツチヤに向き直つた。

「あなたみたいな人がいれば心強かつたでしょう。しかし、うちのティーガーも負けてはいません。この一戦、我々が征してみせますわ！」

そして右手を開いてツチヤの前に差し出す。ツチヤは照れた表情を引き締め自らの右手で将美の掌を掴んだ。

「どうか御手柔らかにね……。」

「ティーガー対ティーガー、実に楽しみです。」

ツチヤと将美の視線とがぶつかり合い火花をとばすかの様な状況、いつしか同じような対抗意識を持ったそれぞれの車輌が主砲を向けあつていた。

「ではこれより、大洗女子学園対ゲルダム高校の試合を行います。一同、礼！」

審判の号令が各車に響く。一同車内で声を揃えて：

『よろしくお願ひします！』

今ここに大洗女子学園とゲルダム高校との戦いの幕が上がった。

「パンツァー・フォー!!」

大洗はみほの指示で前進を始める。IV号を中心横隊を形成。中央からは左にレオポン（ポルシェ・ティーガー）、ウサギ（M3リー）、カメ（ヘッツァー）、アヒル（八九式中戦車）、右にアリクイ（三式中戦車チヌ）、カモ（ルノーB1bis）、ペンギン（センチネル）、カバ（III号突撃砲）が並んで進む。

「パンツァー・フォー!!」

一方のゲルダム高校は隊長の将美が乗るティーガーIを中心、左方にIV号を縦に2輌ずつ並べて配置、さらに前方にもティーガーIとIV号をもう1輌ずつ用意。そしてIII号戦車で前方の三方向を偵察に配していた。

「大洗がんばれ〜！」

テーブルにパラソルを立てた観客席に座る幼女が声をあげて大洗を応援する。夏らしいノースリーブの水色ワンピースを着た羽村晴香である。

「いよいよか…。」

スクリーンを見つめる羽村葵教官はそれぞの動きを見つつ大洗の用意した作戦を頭の中でシミュレートさせる。

「あなた…。」

葵の妻である羽村見晴が葵に少し心配そうな声をかける。ふと葵が見れば見晴は少し心配そうな表情であつた。彼女は娘と仲良くなれた女の子達が戦車に乗るのが恐いらしい。元来彼女は少々心配性

な気がある。

「大丈夫だ、大洗は勝てる。それに戦車道は安全な競技だ。」

そしてここぞとばかりに葵は言い放つた。

「俺が嘘ついたこと無いだろ？」

「…そうだつたね。」

そう交わして2人は自分達の間に座る晴香に目を向ける。暑い中でもテンション高く元気な晴香は目を輝かせてさらにスクリーンへと釘付けとなっていた。

「相手はドイツの主力中の主力、ティーガーにIV号、そして機動力のあるIII号戦車か…。」

別の場所に設けられたテーブル席では教官補佐の太田功、筑波さつき、駿河三枝、そして整備の立花藤兵衛がスクリーンに視線を向けていた。さつきの言葉に続いて太田が発言する。

「数では1輛の差、総合的な火力では向こうに分がある。」

「敵のフラツグを厚いIV号と副隊長のティーガーの壁からなんとして引き摺り出すかが考えどころだな。」

さらに藤兵衛が愛用のパイプをくわえて腕を組む。

「そこは彼女達の作戦次第ですね。おそらくは…。」

そう言つて三枝は用意された地図に指を走らせる。3人が注目して：

「なるほど…。」

藤兵衛はパイプを口から外して呟いた。

「一文字先輩、どうですかね？」

さらに観客席脇には2人の男性が立っていた。1人は大洗に密着するカメラマン一文字隼人、格好は前回現れた時と同じである。そして彼を先輩と呼ぶ男。背丈は隼人と同じくらい白のズボンに同色の

ベスト、青いシャツの袖を捲りあげた若干癖のある黒髪にサングラスをかけていた。

「相手をこちらのペースにいかに乗せるかだな。」

スクリーンを見つつ隼人は答える。

「ドイツの堅固な車輌を仕留めるにはどれだけ近づけるかが重要だ。もちろん狙うは背面と側面。風見、お前ならどう攻める？」

続けて考えを口にして質問した男の名を呼びながら質問を返す。

風見と呼ばれた男は顎に手をあてて答えた。

「普通に考えれば凹を使うか、敵を攪乱分断しての各個撃破ですかね。問題は相手に通用するか…。」

それだけ述べると彼はサングラスを外した。

「ま、じっくりと拝見いたしましょう。」

その顔は実に整った顔立ちであった。

「フレー!!フレー!!大洗!!」

また一方で客席の端っこでは今日も橋下団長の大洗応援団が声を張り上げてエールを送る。プロレスラーの凄まじい体力と気力である。

「まったく、ムダに大声張り上げちゃって耳障りねえ。」

そんな彼らを横目で見つつコメントする人物がいた。背が高く長い黒髪の女性の上に肩車されている金髪つり目の少女が少し鬱陶しそうに言う。

「たまにはこういうのも良いではありませんか。彼らは彼らなりに頑張ってるんですから。」

少女を肩車する女性が発言すると少女はふんぞり返る様に腕を組んで言い放つ。

「まあノンナがそう言うならそれで良いわ。プラウダだつたら肅清ものだけど、カチューシャは心が広いからね!!」

この2人組、それぞれ昨年度までプラウダの隊長と副隊長を務めていたカチューシャとノンナだつた。

「見せてもらうわよサミニーヤ（将美）、あなたのチームの強さを。」

「敵は確実にこちらの戦力を分散にかかるだろう。先に相手を捕捉しなければ…」

隊長車でありフラッギング車を務めるティーガーIの車長席に座り、将美は指揮棒を置んで左手に握りしめて偵察隊の報告を待つていた。「相手は西住流であつて西住流でない。正面きつてこちらとぶつかるとは思えん。」

各ポジションにつくメンバーは各自の持ち場にて役割を的確にすすめる。彼女達にとつては初の公式戦であるが、徹底した訓練の賜物である。

VII号戦車ティーガーI型

IV号戦車G型

III号戦車L型、N型

いずれもドイツアフリカ軍団で活躍した主力である。ちなみに訓練で使用していたマルダーIIIやII号自走重歩兵砲は組み込まれていない。それと言うのも昨年末よりオープントップ車輛が戦車といいかがなものかと議論され競技において危険が伴いやすいことからオープントップ車輛の公式戦使用は自粛されてしまったのだ。また

昨年の北海道決戦で登場したカール自走臼砲の威力と扱われ方、そしてビジュアルから世論はこれを紛糾したのも一因である。

ちなみにこのカール自走臼砲の認可において文科省と戦車道連盟にてあまり好ましくないお金のやり取り等があつたとの話も流れています。

話は逸れてしまつたがオープントップ車輛を除いてもゲルダム戦車隊はまだ有利である。しかし将美は決して油断ならんと口酸づく言い続けて対策を講じてきた。

「いいか、装甲、火力、性能ともにこちらが有利である。となれば敵は機動力で勝負に出る公算が極めて高い。そこで注意すべきはこれらの車輛だ。」

ゲルダム戦車隊が数日後に大洗との戦いを控えた頃、メンバーがホールに集まつての全体ミーティングが行われていた。全員の前ではプロジェクトエクターによつて用意されたスクリーンに4輌の戦車の画像が映し出される。

M3中戦車リー

八九式中戦車甲型

38t軽戦車改ヘツツァー

巡航戦車センチネル

「大洗のこれまでの戦い方を参考にしてリストアップしたものだ。」

続いて各車輛の特徴が表示されて将美は続けた。

「偵察を行ひこちらを探り、惹き付けてIV号、III号突撃砲、ポルシェ・ティーガーなどの重火砲による狙撃で仕留めにかかる作戦、もしくはこれらの高機動車輛による搅乱を狙う作戦が考えられる。」

敵の作戦を予想しつつスクリーンに砂漠フィールドの地図が表示

される。

「しかし我々は決して動じない。確かに実力はあれども総合戦力と地の利はこちらに分がある。こちらはⅢ号戦車を前衛機動部隊兼斥候として運用する。Ⅲ号で偵察を行いつつティーガーを進めⅣ号が側面及び機動面をカバーする。」

そして地図上にバツテン印が付けられていく。

「狙撃を行うと思われるポイントはここ、そして攪乱戦法を行うとすればここだ。」

砂漠ステージの南西に位置する岩石丘陵地帯、そして東部の集落に印。

「そして敵を見つけても決して1輜にならぬことだ。単独行動は各個撃破される可能性が高い。絶えず2輜以上で行動して確実に敵を仕留めていく。」

主力部隊と機動部隊による集団戦法でゲルダム高校戦車隊は勝負するようだ。

「これまでの戦闘記録からゲルダム高校は装甲と火力にものを言わせた集団戦法を得意としていることが予測されます。」

一方同じ頃の大洗女子学園戦車格納庫。履修生全員が会議室には収まりきらないのでここにホワイトボードと資料を持ち込んで全体ミーティングを進めていた。ちなみに第三者の意見も欲しいので羽村葵もオブザーバーとして端に参加している。

「引き合いに出すならば黒森峰に近い戦法を展開しているということだ。」

エルヴィンがホワイトボードに貼り付けられた車輜の特徴やスペックなどを分かりやすく書き込みながら説明する。さすがにドイツ系のミリタリー好きとあつて内容は正確だ。

「じゃあこちらは機動戦による奇襲戦法で勝機を見いだすことになるということか?」

「いいえ、おそらくは敵もそれを予想しているでしょう。それに黒森峰との戦いとは違つて遮蔽物の少ないステージです。」

最前列にいる力工サルの質問に優花里が否定を示す。

「ここに丘陵地帯が存在していますがここを手中におさめるには難があります。相手のスタート地点の方がこちらより近いうえにこちらが高台から狙撃することも読まれているでしょう。」

今回は前大会でのプラウダ戦のようにアウエーでの戦いである。

「じゃあ浸透突破で敵の中央を叩くのは?」

「一気に攻め立てて敵の頭を潰すような感じで?」

続いて磯辺典子が発言しツチヤも乗つかる。今度はエルヴィンが

答えた。

「正面から挑むのは得策ではない。ティーガーが多数いるとなるとこちらが返り討ちにされる可能性が高い。下手に突っ込んで敵の罠にかかるべそれこそプラウダ戦の二の舞だ。」

アリクイとレオポンを除く2年生以上のメンバーにとつて苦い記憶が甦る。昨年の戦車道全国大会準決勝プラウダ高校戦。メンバー達がみほの制止を聞かずに突撃に打つてでたためにプラウダの戦車隊に包囲され絶体絶命に陥ってしまう。もはやこれまでとなつたものの学園廃校の事実と大洗女子の団結、みほのあんこう音頭に触発されたことで士気が高まり起死回生のところでん作戦を成功させたことで逆転を決めた。

しかしこれは薄氷を踏むどころの話ではない。反省会ではノリと勢いに任せすぎたと全員が猛省。続く黒森峰戦へと改めて一致団結して挑む足掛かりとなつたのだ。

そんなことを思い出すメンバー達にみほは用意した作戦を説明にかかつた。

「そこで今回の作戦ですが:」

ホワイトボードに大きめの地図張り付けて何やら印を貼り付けては指揮棒で指示していく。一通りの説明を終えたところでみほが

口を開く。

「三段階のステップを必要とする作戦となります。ここで重要なのはカバさんチームとベンギンさんチームです。」

「西住隊長！必ず成功させてみせます！」

「心得た！砂漠の狐の名に恥じぬ戦いを見せてやる！」

直々の指名を受けた2チームは意気高く応える。それぞれが「やつてやるぞ！」「新世代の活躍や！」と士気旺盛にして実に頼もしい限りだ。

「フラッグはIV号がつとめます。レオポンさん、アリクイさん、カモさんは決してIV号から離れないようにお願いします。」

続いてフラッグの発表とガードにあたるチームを伝える。

「まかしといて。」「心得たにや～！」「了解しました。」

ツチヤ、ねこにやー、ゴモヨがそれぞれつづけて返事をする。厚い装甲と高い火力で固めるようだ。

「ではここで作戦名を通知いたします。」

優花里がそう言うと一同が静まり返り、みほが一拍置いて口を開いた。

「今作戦名は、『うずまき作戦』です！」

作戦名が決定し更に教官の指摘も交えながら煮詰めていく。

かたや重装甲と重火力を骨子とする集団戦法。

かたや高機動と連係プレーを交えた奇策を狙う。

「みぽりん、予定地点を通過、各隊が作戦発動を求めてるよ。」

通信手の武部沙織からの通信報告にみほは時計と地図を見ながら口を開く。

「ではこれより散開します！予定通り私達あんこうチームにはレオポンさん、アリクイさん、カモさんが続いて下さい。カバさんとベンギ

ンさん、ウサギさんとカメさんとアヒルさんがそれぞれに隊列を組んで転針して下さい。」

みほの指示に各車がすぐさま了解の返事を送つてきた。みほは一旦息を吸つて宣言した。

「これより『うずまき作戦』を開始します！」

対決・うずまき作戦です！

『こちらデアフリンガー、敵を発見。ポイント〇〇五二、センチネルとヘツツァーを確認。』

試合開始から數十分…ゲルダム高校の偵察車輛が大洗の戦車を見した。

「やはり丘陵地帯へと向かうか…となるとⅢ突が後続しているかな…。」

高地から敵車輛を狙い撃ちにする作戦と見た将美の読みが的中した。昨年の黒森峰女学園との決勝戦序盤。大洗の戦車6輛は高地に陣取つて戦つた。こうして数輛を仕留め、ヘツツァーのおちよくり作戦で足並み乱れた黒森峰は大洗の突破を許し更に優位なゲリラ戦を行える市街地へと場所を移され、切り札である超重戦車マウスも本隊と合流する前に撃破されてしまった。

黒森峰と同じドイツ製の戦車を主力としているゲルダム学園相手なら同じような戦法をとつてくる可能性が高いと考えた将美はその読みが的中しほくそ笑んだ。まずは脚の速いヘツツァーとセンチネルで高地を確保して長砲身での砲撃を見舞う。だが今回はその手は使えない。開始する際のくじ運はゲルダム陣営に味方しており市街地も高地も大洗より近い状況なのだ。

『敵車輛新たに確認、M3リーです。』

「M3？」

しかし続く報告に将美は首をかしげた。

「威力偵察か？」

長砲身による狙撃と読んでいたがⅢ突ではなくM3が来ている。これはおかしい。こちらへの偵察かそれとも陣地を造り防御戦術に出るつもりか。どちらにしても大洗の戦術とは思えない。

『どうしますか？』

「一旦待機。シェーア、シユペーはどうか？」

下手に手出しをさせずに他の車輛へ訊ねるが…。

『敵影なし。』

『こちらも同じく。』

その他の報告からは敵の存在は確認されず。

「南西からセンチネル、ヘツツアー、M3が北上中…残る6輛今だ見つからず…」

改めて地図に情報を書き込んでさらに検討を重ねる。他の敵集団が向かっているとの情報も確認されていない。

「丘陵地帯を占拠するにしてはおかしい…」

たつた3輛で占拠しての戦いなど現状で得策とは言い難い。
「となると…相手の狙いは狙撃地点の確保に見せかけた挟み撃ちか！」

挟み撃ち作戦と判断した将美はただちに指示を出す。敵のおおよその位置を策定して偵察隊の向かう先を指定する。間もなく網にかかるだろうと考えつつ彼女は更に考えを巡らせた。挟み撃ちからの更なる一手を敵が用意している可能性もあるからだ。

「ともかく相手は決して油断ならん…。」

口酸っぱく繰り返す将美。彼女は大洗との戦いが決まったあの日のことを思い出す。

「お待たせしました。」

高校戦車道全国大会マッチング抽選会の行われた後のちょうどみほ、優花里、梓が戦車喫茶ルクレールに居た頃。将美は都内でとある人物に会っていた。

「いえ、時間通りです。久し振りですね、サミーシャ。」

「ノンナさん、わざわざすいません。」

約束した駅前にて将美を待っていたのはプラウダ高校前副隊長のノンナであった。半袖シャツに薄手のカーデイガンを羽織ったロングスカート姿でいつものポーカーフェイスで将美に続けて口を開く。

「いえ、カチューシャにも頼まれましたから構いませんよ。」

それだけ言うとノンナはスタッタと歩き出した。将美はその後ろに続く。これから2人で遅めの昼食をとる予定だ。

「ではここにしましょう…」

しばし歩いたところでノンナが案内したのは半地下の洋食屋であつた。

「いらっしゃいませ！洋食のねこやへようこそ!!」

すぐさま自分たちと同世代くらいの変わったデザインの髪飾りを着けたウエイトレスが明るく出迎える。

「2人です。」

「かしこまりました！お好きなお席へどうぞ！」

昼時を過ぎた店内には空きテーブルが多いため案内は省略された様だ。斜め後ろに控える将美を促そくと振り返るノンナ。

「…」

「どうしました？」

するとなぜか不思議そうな表情で将美は左手を顎にあてていた。

「いえ、なんだか今のウエイトレスの声が…なんとなくノンナさんに似てたような…」

「…そうですか…」

将美の言葉に小首をかしげつつ適当なテーブルに2人で座る。すぐには先ほどのウエイトレスが水を運んできたところで2人は料理を注文した。ノンナは先ほどの将美の指摘が気になつたのか少し警戒気味であつた。

「先ほど二ーナの方から連絡を受けました。」

「はい、相手としては最高だと思います。」

「手強いですよ。」

「のぞむどころです。」

ノンナからの言葉に握りこぶしをつくつて応える将美。既に彼女にはファイトが溢れ始めている。普段はクールに己を律しているが初出場の大会で昨年の優勝校と戦えるとあつて戦意旺盛であつた。「力チューシャ先輩との約束、大洗を倒して必ずや果たしてみせま

しう。』

彼女の脳裏に思い出すのはかつてカチューシャと交わした約束だつた。

『カチューシャをびっくりさせるような戦車乗りになつてまた戦いましょ！』

『はい！先輩もお元氣で。』

そんな言葉を交わす将美とカチューシャ。かつて戦車道東北ジユニアユースの二軍メンバーだつた将美はエースであつたカチューシヤに入られていた。九州代表との試合ではカチューシャから自身の車輌の砲手に抜擢され敵車輌3輌の撃破に貢献するなど活躍を見せた。だがこの日、彼女とカチューシャの2人は別れなければならなかつた。

『いい？絶対に戦車道を続けなさい。そうすれば必ず会えるから。』
『カチューシャ先輩！ありがとうございました！』

試合が終わり夕陽に染まる試合会場で将美はカチューシャを肩車して2人で泣きながらロシア民謡の『カチューシャ』を唄つた。そして数日後、彼女は鳥取へと引っ越して行つたのだつた。

『プラウダの面々も意氣高く今度の大会に臨んでいます。昨年の全国大会での敗北、そして冬の優勝記念杯、プラウダは雪辱を果たす前に敗れました…。』

記憶を辿つていた将美を現実に引き戻すノンナの言葉。そこには微かな悔しさが含まれていた。

優勝・黒森峰女学院

準優勝・聖グロリアーナ女学院

第三位・サンダース大学付属高校

第四位・大洗女子学園

ベスト8・プラウダ高校

アンツイオ高校

継続高校

西吳王子グローナ学園

準々決勝にてプラウダはサンダースと山岳ステージで激突。プラウダが連携を崩した一瞬の隙を突いたサンダースのファイヤフライによつてカチューシャのフラッグ車は撃破されプラウダは大洗への公式戦による最初の雪辱の機会を逸してしまつたのだ。

「新参校だからつて舐めて貰いたくはありません。ゲルダム高校は決して生半可な気持ちで参加してゐるわけではありません！」

「…楽しみにしています。私もカチューシャも。」

そしてしばし無言で2人は料理を待つた。

「お待たせしました！オムライスとミニコロッケのセット、ビーフステーキガノフのセットです！」

「ありがとうございます。」

「…どうも。」

料理を運んできたウェイトレスへと素直に礼を述べる将美とノンナ。パンのおかわりがサービスであることを伝えるとウェイトレスは他のテーブルの客に呼ばれて行つた。それを見届けて2人はステーキを手にそれぞれのメイン料理を一口…。2人は頷いて自らの選択が正しかつたことを認識した。

ノンナと会つたときのことを思い出す将美。別れ際にもう一度彼女は言つた、『決して油断するな』。不利な状況からの逆転こそ大洗の得意技である。

「全員決して単独行動は避けよ。お互いの位置を絶えず意識して安易な誘いに乗るな。」

何度も言つてきた注意を促して将美は今一度己を引き締めた。

『こちらすずしろ小隊澤です、丘陵地帯見えました。』

「了解、敵が潜んでいるはずですから注意してください。あくまで目的は挟み撃ちだと敵に思わせて、絶えず後方に注意して逃げ道の確保を忘れないで下さい。」

現在分かれて作戦行動をとつてゐる仲間からの報告を沙織が伝えみほが返す。報告してきたのは臨時編成のすずしろ小隊、進撃して来るであろう敵の左翼をつく形になる様に進む大洗陣営の3輜、センチネル、ヘツツアー、M3リーによつて編成されている。指揮をまかされたのは副隊長澤梓である。

『こちらなぞな小隊エルヴィン、予定通りに進撃中。』

一方では敵の右翼をつく形で皿突と八九式が進撃している。こちらはもう1人の副隊長エルヴィンが指揮を執つてゐる。

「間もなく敵と遭遇するはずです。敵はおそらくフラツグの私達アンコウチーム、火力の強いレオポンさん、カバさんに目をつけてゐるはずですからとくに注意を。」

そして一拍の休みを挟んでみほは言い放つ。

「うずまき作戦まもなく第2段階へ移行です！」

「III号2輜で敵小隊追撃開始！」

「よし、残るIII号ゲーベンとIV号テイルピットを進出、奴等は挟み撃ちに見せかけた側面からの一撃離脱戦法を狙っている。」

各隊列を若干変更しつつ進撃していたゲルダム陣営がついに敵の配置を突き止めた。将美の戦略眼は大洗の作戦を見事に暴いたのである。

「（）ちらエルヴィン！ IV号が向かってきた！どうやら読まれていたらしい！」

『了解です。無理せず逃げてください。』

エルヴィン率いるチームが発見され逃げに移る。しかしこれこそが狙いなのだ。

「これで敵は三方向に分断された。」

「うまく捕捉できれば一気に決するぞ！」

カエサルと左衛門佐の言葉におりようがニヤリとする。

「動き出したな。」

「三方向に散りつつ敵と各個に交戦。」

「問題は敵のフラッグ車をどこで補足するか。」

一方でこちらはカメさんチームの歴女トリオ。こっちも敵の追撃をかわしつつ作戦を進める。

「（）一番！皆、しつかりⅢ突を守り抜くよ！」

Ⅲ突の後ろを走る八九式の車内では車長磯辺典子が声をあげていた。

「いいな！煙幕は最後の武器だ！根性で行くよ！」

「「はい！キャプテン！」」

後方機銃で応戦しつつ気合いを入れるあけび、妙子、忍。

大洗渾身の一撃『うずまき作戦』は着実に進められつつあった。

「敵は一定の方向へ移動しているな…。」

それからしばらく…。ゲルダムの各チームは大洗を追つて走り続けていた。

「これはもしや…」

一旦落ち着いて地図上に自軍の最新の位置関係を整理する。現在3つに別れたゲルダム高校の勢力を示す青の付箋を貼りつけ相手の大洗を示す赤の付箋を貼る。そしてペンで相手の動きとこちらの動きを書き込むと…。

「これは…まるで渦のようだが…」

砂漠の荒野に円が浮かび上がる。

「まさか…」

さらに彼女は少し前に送られた味方からの位置情報を比べていく。

『うずまき作戦』、正面からぶつかることが困難なドイツ戦車相手に絞り出したみほ達の新しい作戦。練習試合で行つたイライラ作戦を発展させ待ち伏せではなく機動作戦として立案した戦法である。部隊を複数に分けて敵をそれぞれに引き付ける。そして渦を巻くように全部隊が開けた地帯を走る。つまり全ての部隊がアタッカーであり囮なのだ。そして徐々に輪を縮小させていくとどうなるか…。

「敵の背後をついたぞ！よく狙え！」

前を走る部隊を追う敵に追い付けば背後をとれる。
作戦を実行する側も大変なリスクが発生するが上手くいけば敵を前後で挟み撃つことが出来るのだ。

『ゲルダム高校、IV号戦車G型行動不能!!』
『ゲルダム高校、III号戦車N型行動不能!!』

ともあれ大洗の狙いはみごとに的中した。有利に思われたゲルダムは一気に窮地へたたされてしまっていた。

「いかん！総員離脱!!煙幕展開!!」

すぐさま各車へ指示を出す。一刻の猶予もならない。すぐにこの渦から脱出しなければ…。

『隊長!!自分が食い止めます!!』

副隊長の乗るもう1輜のティーガーIが将美の命令に背いて敵に向かおうとする。

「ティーガー2号車!!勝手な行動は許さん！我に続け!!」

『このままではフラッギング車が危険です！IV号を引き連れて逃げて下さい！』

将美からの命令にも拒否を返す。確かにこのままでは敵に追撃されてしまうのは目に見えた。

「…わかった。すまない。」

「煙幕！総員停止後散開！」

みほの指示にIV号、ルノー、三式は急停車するとすぐさま散開した。煙幕に無闇に突っ込むのは得策ではない。またみほには予感がした。戦車に乗り続けてきた彼女だから感じるものが…。

「いた！」

みほがそう言うと煙幕の中から巨大なシルエットが飛び出した。

「ティーガーを認識！各個に攻撃！」

敵のティーガーはまず飛び出した先にいたカモさんチームのルノーを狙ってきた。88mm砲が空気を切り裂くような砲声と衝撃を発する。

「なんのこれしき！反撃して下さい！」

ティーガーの砲撃に怯まずルノーが車長のサド香の指示で反撃する。車体に砲撃を受けたが流石に車体正面60mmの装甲を斜めからはティーガーでも貫通出来なかつた。

「パゾ美撃ちま～す。」

「マゾ江も撃ちま～す。」

お返しとばかりにこちらも主砲、副砲を一発ずつ見舞う。合わせて反対側からは…。

「喰らえ！」

チヌからの75ミリをもらう。完全なる十字砲火（クロスファイヤ）に捕らえられた。ちなみにIV号はチヌの後方に位置しておりティーガーから守られている。

「さすがにティーガー、厚いにゃ。」

ねこにやーが呟く。2発の75mm砲弾と1発の47mm砲弾を受けたが白旗は上がらない。しかし本命はルノー、チヌではない。

「こーだ！」

追撃を諦め引き返し、いまだに燃る煙幕を突つ切ったレオポンチームのポルシェティーガーがゲルダム高校のティーガーの真後ろに出現した。ツチヤとみほの計算通りの場所、砲手の掌に力が入る。

「ファイヤーー！」

練習試合より参加している自動車部新入生安藤理音のスコープがティーガーの後部を捕らえていた。

『ゲルダム高校、ティーガーI 行動不能！』

敵の副隊長を仕留めた。しかし…

『大洗女子学園、三式中戦車行動不能！』

ギリギリで発射されたティーガーの砲弾をアリクイチームが喰らってしまった。正面装甲50ミリの三式チヌであるが同レベルの列強戦車に比べて被弾に弱いのが難であることを物語つた一幕であつた。

「西住隊長、ごめんにや。」

「公式戦でまた早々とやられてしまうとは…くやしいもも…。」

「…無念。」

アリクイチームの面々は意氣消沈してしまった。

ともあれこれで4輌の敵戦車を仕留めしたことになる。対して大洗はいまだに8輌が健在だ。

『こちらカバ。すまない、隊長車のティーガーを取り逃した。』

一方で敵の隊長車集団を引き返してレオポンと挟み撃とうとしていたエルヴィンからも敵に逃げられたと報告が来た。

「アリクイさんチーム、よくやつてくれました。チヌがいなかつたらIV号がやられていたかもしれません。カバさんチームも無理はしなくて大丈夫です。フラツグは仕留められずとも一気に有利になりました。全車集合します。IV号のもとへ集まつて下さい！」

みほの指示に残る全員が了解と応える。

「こちらの残りはIII号2輛にIV号3輛、そしてティーガーか…。」

一方でゲルダム陣営が街へと向かいつつある中で隊長の将美が考えを纏めようとしていた。無論のこと彼女も完全に不利な状況で試合を捨てるようなことはしない。覚悟を決めた砂漠のゲルダム軍団は決して動搖などしないのだ。

「全員に告げる。これよりF作戦で敵を分断する。IV号はそれぞれ街のポイントX、Y、Zにそれぞれ用意して待機せよ。III号は我に続け。」

街が見えてくる。砂漠に相応しい石や煉瓦などで造られたゴーストタウン。どのような状況にも対処するべく様々な作戦とシミュレーション、研究を重ねた彼女達の起死回生を狙う戦いの始まりだつた。

「大洗よ、ゲリラ戦術はお前達だけのものではないぞ。」

間もなく集合した大洗陣営は各チームのリーダーと副隊長がIV号のもとへと集まり地図を拡げて次なる行動を確認していた。

「敵の進路から予想するに…この街へ向かつた公算が高いな。」
エルヴィンの指摘に皆も頷く。半数近くに減った戦力を補うために街へ入りこちらを迎え撃つ算段をたてるのは定石と言えよう。

「ここは隊を分けましょ。ウサギさん、アヒルさん、カメさん、カモさんが先行して街へ入つて下さい。カバさんは前衛の最後尾へついて入り口で待機、あんこう、レオポンさん、ペンギンさんは迂回して

街の反対側から進撃します。」

ペンを走らせ各自の動きを書き込んでいく。再び三隊に別れて機動力を活かして街に攻めこむ作戦が決定された。

「梓ちゃんは前衛隊を、エルヴィンさんは待機しつつ補佐をお願いします。」

「はい！任せて下さい。」

「心得た！」

2人の頼れる副隊長の返答にみほは一層気を引き締めた。

「ではこれより追撃を行います。それから万一对面で…」

みほの更なる一手が語られた後、大洗戦車隊は次なる決戦場の市街地へ向けて進撃を開始した。

逆襲のゲルダム軍団です！

大洗陣営を迎え撃つべく市街地へと突入したゲルダム高校戦車隊は隊長黒部将美の指揮のもと、一気に逆転を決めるべく用意した『F作戦』を遂行していた。

「各員、予定通りに展開したか？」

将美の搭乗したティーガーIから各車へと通信を開く。現在ティーガーIは街の北側の出入り口にIII号戦車L型1輌を伴い待機していた。

「各車榴弾装填、発砲準備完了。」

「各車発砲！」

通信手からの報告に将美はただちに砲撃を命じた。ただし狙つたのは敵車輌ではない…。

「ん？」

「今のは…」

二手に分かれた大洗前衛隊の最前を偵察のため全速で進むカメさんチームのメンバーはその砲撃音を耳にした。武蔵と十兵衛が同時に声を出した。

「こちら前衛偵察隊のカメ、砲撃音を確認！」

武蔵が咽頭マイクに叫びただちに全車輌にカメさんチームから報告が飛んだ。

「了解、各車警戒しつつ進撃を続行してください。」

前衛隊の指揮をとる副隊長澤梓が応え指示を送る。現在彼女はア

ヒルさん、カモさん、カバさんを従えて進撃していた。

「何を発砲?」

「うーん:街を破壊してどこかで潜むつもりとか?」

大野あやの疑問に山郷あゆみが応えるが今はまだ判断材料が少ないので何とも言えない。街に潜んでいることは確実であろうが果たしてどんな作戦で待ち構えているのだろうか?。

間もなく前衛隊は石やレンガ造りの砂漠のゴーストタウンへとなり着いた。

『前衛隊、市街地へ到着。これよりウサギとカモ、カメとアヒルに分かれて索敵にかかります。』

『我らカバチームは入り口で待機する。』

敵の発砲から間もなく前衛隊は街へと到達した。入り口周辺を警戒するも敵の姿は認められずこれより突入にかかる。また万一に備えてカバさんチームは入り口付近で待機することとなつた。

「了解です。重ねて言いますがくらぐれも注意して下さい。絶えず周囲に気を配り、お互いの背中をガードを忘れないように。」

敵の奇襲に備えるようにみほは指示を出して自らが率いる二輪と共に街を迂回する。目指すのは前衛隊が入った入り口と反対側だ。

市街地の大通りから少し細めの道へとゆっくりと進むM3と八九式の2輜。それぞれのハッチから身を乗り出した梓と典子が周囲を警戒。またいつ敵に後ろをとられても良いように典子は発煙筒も用

意していた。

「…敵影なし。」

「ネガティブ。」

まず街のいくつかのブロックに分けて探索を行うことにした前衛隊はウサギとアヒル、カモとカメでタッグを組んでそれぞれ南西、南東部分で行動している。

「敵発見ならず…」

「敵はいずこ…」

南東部を中心に捜索する方でも同じように武蔵とサド香が警戒を厳にしていた。そんな中で2手に分かれたグループはあることに気づいた。

「こちらカメ、街の東部入り口は瓦礫で塞がれている。」

「こちらウサギ、西部の街入り口通行不能です。」

どちらもほぼ同じタイミングで発見した。もしやさつきの砲撃はこれが目的だつたのか。入り口を制限して叩く手かとも思ったがそれだつたら入り口で待ち伏せするだろうし閉じ込めるつもりならIV号は外にいるからとくに問題にはならない。

「一端中央に集合してください。」

さらに時間をかけた探索の末、敵発見に至らなかつたことから残る街の北部に潜んでいることは明白となつた。梓は一旦前衛隊全車両を集合させることにしたが実は既にゲルダム陣営は大洗の動向を掴んでいたのである。

『敵車輛M3、B1、八九式、ヘツツァー、中央広場に集結。』

味方の偵察員からの報告を受けた将美は相手が予想通りの作戦に

はまつたことを確信した。

「よしつ！ではこれよりF作戦第2段階へ！IV号ザイドリツツ、パンツアーフォー！」

逆転するチャンスはここしかない。間もなく待機していたIV号が敵の集結している中央へと走った。

「敵IV号発見！」

街の中央へと大洗前衛隊が集合したその時、ついに敵車輛が姿を現した。

「追撃します！」

梓が発見を報告して追撃を宣言。すかさずカメさんとカモさんが続く。

「後方警戒は私達に任せて下さい！」

『ウサギチーム、我らカバチームはこのまま待機する。』

一方ではアヒルさんが殿を務めカバさんは待機。敵に背後をとられるなどの挟み撃ちを警戒しての判断である。

敵のIV号を追う前衛隊は街の北側へと進路をとった。

敵発見の報告を受けたあんこうチームのIV号内部：

「敵のIV号が1輛のみということは街の中で他の車輛が潜んでのゲリラ戦術が妥当ですね。」

優花里が持論を述べる。そうなるとさながら自分達が知波单との練習試合で決行した『いらいら作戦』に近い作戦となる。ならば周囲を警戒厳として決して敵に分断されないことが重要だ。

『こちら前衛隊の澤です。敵戦車は街の北側へと…あつ！』

「ウサギさんチーム、どうしました？」

『敵のIV号さうに2輛発見、街の北側出入り口前に陣取つてます。追いかけていたIV号と合流して計3輛！』

「北側に3輛を配置…。」

「まさか引き付けての挟み撃ちとか？」

その報告にすぐみほが手元の地図に書き込み沙織が考えを口にする。なるほど行動範囲の限られる街中の通りで挟み撃ちというのも考えられる。しかしフラッギのいないグループに仕掛けたところで貴重な戦力を消耗するばかりであるからその公算は薄いだろう。

依然として残るティーガーとIII号はどこにいるのかわからない…。

『これより交戦します！』

「気をつけて無理せず戦つて下さい。こちらも反対側の街の入り口へ…」

その時だった。

ズドオオオンツ

「砲撃！」

みほの耳にあまりに聞き慣れたドイツ製アハト・アハト砲の轟音が届いた。

『8時の方砂丘上にティーガー観認！』

『大洗女子学園巡航戦車センチネル、行動不能！』

隣を走っていたセンチネルが狙い撃たれた。すぐにみほがキュー ポラから身を乗り出して振り返りティーガーを見据えた。

『こちらペングンチーム、すいません。背後を突かれました。』

ペングンさんチームのリーダー澄からやられたと報告が届いた。

梓率いる前衛隊はIV号と交戦し、突破を試みようとしていた。

『カバチーム、これより隊長車輌の支援に向かう！』

ひとまず街の反対側にいたカバさんチームが全速で支援に向かう。前衛隊の方があんこ、レオポンに近い位置に居るが街を戻つていては時間がかかりすぎる。敵を撃破した方が早いと判断を下したのだ。

「喰らえ！」

気迫をこめて発射するヘツツァーの砲弾が出口に陣取った左手の

IV号を仕留めた。

『ゲルダム高校IV号戦車G型、行動不能！』

「よし！早く突破して支援に行こう！」

まず1輛を仕留め次へと狙いを定める。が：

「狙いにくくい…」

倒した敵車輛が邪魔をして狙えない。そして一同は気がつく。これでは敵を倒しても敵の戦車が道を塞いでしまって突破できないのではないかと。急がないと孤立したフラッグが危ない。

「梓、ひよつとしてこれは…」

「あゆみもそう思う？」

さらに二年生以上のメンバーにはこの状況にデジヤブを感じた。

「…ふらふら作戦。」

めつたに喋る事の無い紗希の咳きが答えた。

対大洗のためにゲルダム高校の用意した起死回生の作戦。それは昨年の全国大会で大洗が黒森峰女学園に仕掛けた『ふらふら作戦』である。街へと誘い込みゲリラ戦術による反撃に見せ掛けフラッグを孤立させる作戦。そのための用意を隊長黒部以下全員が周到に行っていた。まず4つある街の大きな出入り口を砲撃で2つ寸断してIV号で敵を追撃させつつ陣容を把握。あんこがいれば街の外へと誘い出し孤立させる。そのため高い建物3つに偵察員として隊員を配置、徹底した監視のもとで作戦を遂行させたのだ。彼女らにとつて幸運だったのはあんこを含む小隊が外周を通るルートをとつたことだつた。期せずして敵のフラッグを孤立させやすい状況が作られたのである。

「いかんぞ！このままではフラッグが討ち取られてしまう！」

Ⅲ突の車長席上ハツチから愛用のゴーグルを着用したエルヴィンが叫ぶ。救援に急ぎ向かうカバさんチームは焦っていた。今みほたちは2対3の戦いを強いられている。あんこうもレオポンも大洗の中では主力中の主力だが相手は砂漠戦を得意としているのは明白。敵は街の内部にいると踏んだことが完全に裏目に出てしまつた。

「真理音！とにかく敵を近づけるな！」

「了解！」

「これでも喰らえってんだ！」

レオポンチームのリーダーチヤは必死に操縦してIV号を敵からカバーしつつ指示する。砲手の理音も懸命に砲塔を旋回させ装填手の柳原まろんが悪態つきつつ砲弾をぶちこむ。直後に響くはポルシェ・ティーガーのすさまじい砲撃音だ。

「まずは敵ポルシェ・ティーガーの履帯を狙え。IV号の動きも絶えず確認して機動力を奪うのだ。」

一方のゲルダムフラッグ車輛では冷静に将美はⅢ号へと指示を下す。無理に撃ち取るのではなくポルシェ・ティーガーの脚を不隨にして確実にIV号を仕留めにかかる手で行くようだ。街にいる仲間の情報ではⅢ突がこちらに向かってきているがまだ時間はかかる。今こそゲルダム逆転のチャンスであった。

『隊長！ポルシェ・ティーガー履帯破壊！』

Ⅲ号シェーアからの報告でついにポルシェ・ティーガーの脚を封じたことを確認した。

「よしつ！一気に攻めるぞ！敵のIV号を狙え！ポルシェ・ティーガーはこちらが仕留める！」

動けなくなつたポルシェ・ティーガーの息の根を止めるべくティー

ガーライが狙いをつけた。

ドオオン

ティーガーIの主砲が火を噴いた。しかし：

「うおおおおっ!!」

ツチヤはただではやられなかつた。残る片方の履帯を無理矢理E P Sで超加速した状態で回したのだ。信地旋回の形でポルシェ・ティーガーはギリギリでティーガーIの砲撃を回避。

「当たれえ!!」

返す刀でこちらの主砲をお見舞いする。ティーガー対ティーガーの戦いは：

『大洗女子学園、ポルシェ・ティーガー行動不能!』

ゲルダムのティーガーIが征した。ポルシェ・ティーガーの放った砲弾は信地旋回を停止した際に足下の砂が傾いたために狙いがずれて弾かれてしまい反撃を喰らつたのだ。

「チクショーー!」

ポルシェ・ティーガーの車内にまろんの悔しさのこもつた声が響いた

あんこうの支援に向かうカバさんチーム

「レオポンもやられたか!」

「いかん! おりよう急げ!」

「これが精一杯ぜよ!!」

レオポンチーム撃破の報せにあせるカエサル。急かすエルヴィンだがおりようは全速であると返す。左衛門佐はいつでも撃てる様に静かに集中してはいるがその手には嫌な汗が滲み始めていた。

応援席では…

「あんこう負けるなー！」

必死に腕を振り上げて応援する羽村晴香、隣に座る見晴も手を組んで祈るようにモニターを見つめる。葵はと言うと腕を組み真剣な眼差しで静かに見据えていた。

そしてティーガーIの車内では将美が勝利を確信して愛用の指揮棒を振るつた。

「よしつ、残るはフラツグのIV号だ！すぐに仕留めるぞ！」

ついに大洗を追い詰めた。IV号は機敏に動いてIII号2輛と巧みに組み合っていたがティーガーIも加わるこの状況。敗北は時間の問題だった。

その時だった。

ドンッ

突如将美の乗るティーガーIの近くに砲弾が着弾し砂が舞い上がりつた。

「なんだ!?」

明らかにIV号でもましてや撃破されたポルシェ・ティーガーでもセンチネルでもない砲撃。着弾の規模からして小～中口径と思われることからIII突でもない。それ以前にIII突が到着するにはまだ時間がかかるはず。

「あれは!？」

そしてキュー。ボラから身を乗り出した将美は街とは反対側の先ほど自らが陣取った砂丘とは違う砂丘にたたずむ1輛の戦車を発見した。その姿は砂漠用の迷彩が施され、側面には首をもたげて舌を出したコブラのイラストが描かれていた。

「大洗秘密部隊、コブラチーム見参！」

車長兼通信手兼装填手赤城烈和が気迫をこめて宣言し砲弾を装填する。砲手の春田聖がくわえた楊枝を噛み締めてスコープに集中し操縦手の小森欄に指示する。

「小森、もつと寄せ。こいつで確実に仕留めるには極力近寄り弱点を突くしか無い。」

「まかしどき！」

「俺はあれにかかる。一発撃つたら敵とあんこうの間を駆け抜けろ！」

「突撃いいい！」

そう言うなり烈和が車長席の周りで「そぞそと」する。

大洗の思わぬ戦力が乱入した大洗とゲルダムの戦いはついに佳境を迎えるのであつた…。

切り札と約束です！

大洗女子学園とゲルダム高校の戦いは佳境を迎えるようとしていた。
「あれは…」

自らの近くに着弾させた戦車の姿を見て将美は信じられないという声をあげた。

「さ、38t軽戦車だと!?」

砂丘から砲撃を行つたのはかつて復活した大洗戦車隊初期の1輌、チエコスロバキア製軽戦車38tであった。

「バカな！大洗の38tはヘツツァーに改造されたはずだ！」

将美の言うとおり大洗は昨年の戦車道全国大会決勝の際にヘツツァー改造キットを購入し無理矢理改造した。しかし砲塔と主砲やその他の備品は大切に保管されていたのだ。

「今です！」

38tという予想外の乱入車輛に驚いた敵車輛の隙を華は見逃さなかつた。IV号の75ミリ砲がIII号を捉えた。

ドオーン！

『ゲルダム高校、III号戦車N型行動不能！』

虚を突かれた一撃。これでスペック差はあれど2対2となつた。

「こつちも喰らえ！」

新チームのコブラさんチームのリーダーであり車長である赤城烈和の気迫と共に主砲が放たれる。

「筑波さん、38tの登場に相手さんは驚いてるみたいですね。」

「大洗の切り札である10輢目がいるとは思いもしないでしよう。」

大洗の観客席ではこの38t復活に関わった2人の男が試合の模様を見つつ話をしていた。

「嬉しいもんですね。自分の手掛けたものが活躍するのをこの目で観れることは。」

そう言つて画面に表示されたシークレット枠の戦車、38tを見つめるのは戦車ショップ大洗女子学園艦店の店長代理筑波洋である。

「私もお手伝いをしたかいがあるというものです。」

そう言うのは大洗に戦車パーツなどを卸している業者の津辻練馬であった。かつて大洗を廃校に追い込んだ学園艦教育局の辻漣太のそつくりさんである。そのためか試合が始まつた頃は大洗応援席にちらほらいる大洗の生徒からはヒソヒソとされていた。

『38t復活計画書』

これが生徒会へ提出されたのは5月の半ばのことであつた。

「38t軽戦車？」

たずねてきた戦車隊長のみほと優花里から渡された書類を生徒会長がペラペラとめくる。

「はい、昨年改造を施したヘツツァーの前身車輢であります。」

「それを復活させるとはどういうことですか？ヘツツァーを元に戻すので？」

それだつたらわざわざ生徒会の許可は必要ではない。会長は机の

前に立つ2人に上目使いで問う。

「いいえ、実は38tの車体を新しく購入したいんです。」

「…詳しく聞きましょう。」

みほと優花里の説明が始まった。まず現在戦車倉庫で保管している38tの砲塔と以前自走砲改造した際のパーツに150ミリ砲、そして4月に発見されたセンチネルと共に保管されていた備品で規格の合う戦車がないために使用できないものを下取りに出そうと大洗女子学園の戦車ショップ店長に見積りの相談をしたのだが：

「優花里ちゃん、それだつたらいつそ38tの車体を買わない？」

そう返してきたのは戦車ショップの店長代理である洋であった。

「車体でありますか？」

思わず提案に優花里が聞き返す。

「うん、グリーレのパーツに150ミリ砲と使わない備品、これだけあれば下取り額が結構なものになるし車体を買うなら断然戦車買うより安いよ。」

そう言いながら戦車関連パーツのカタログ等で洋は説明する。確かにいつもの業者を介して下取りすれば安価で戦車が1輌確保できる。

「なんなら口利きしてもいいし整備手伝うよ。」

「店長代理！本当にありますか！？」

優花里はこの提案に飛び付いた。

説明を聴いた生徒会長の了承ももらい38t軽戦車の復活が正式

なものとして動き出した。またこれは極秘の計画として一部のメンバーにのみ通達され自動車部ではなくこの話を持ち込んできた戦車ショップの店長代理である洋と協力してくれた卸し業者の練馬の手によつて進められ、新チームの乗つた大洗10輜目のシークレット車輜として登録しここぞと言うときの切り札にされたのである。

大洗のメンバー、そしてその復活に携わつた人達の期待を受けた38t軽戦車が応えようと果敢に敵車輜へと突撃を敢行した。先ほどどの攻撃は命中したものさすがにティーガーにはかすり傷程度にしかならなかつた。

「煙幕用意！」

しかし目的は当てるだけではない。キュー・ポラから身を乗り出して叫んだ烈和は用意された発煙筒数本を一気に点火して周辺にばら蒔いた。間もなく辺り一面煙に包まれ完全にお互いどこにいるのかが分からなくなつてしまつた。

「おのれ！小癪な！」

周囲を見回して将美はすぐに判断を下し自分の車輜と僚機のⅢ号に指示を出した。

「前進だ！煙幕を突破しろ！」

とにかくも脱出が先決だ。しかし…

「なっ！」

「わっ！」

なんと左側からさらに煙幕を投下していた38tが突つ込んできた。向こうも驚きの声を上げスピードを下げる。しかし…

「小森！そのまま前進だ！」

なんと38tはそのまま体当たりを仕掛けてきた。間髪入れず37ミリ戦車砲が火を噴く。

ガキイイインツ

だが多少の傷をつけるにとどまった。至近距離とはいえ上向きで放った37ミリ砲ではティーガーの砲塔側面装甲80ミリを破ることは出来なかつたのだ。

「隊長！近すぎて主砲がつ！」

しかし密着されてしまつたがためにティーガーも主砲を向けても撃破出来ない状態だつた。

「落ち着け！後退して…」

一旦下がり、まだ漂つてゐる煙幕に逃げ込もうと将美は判断した。もし前に出て敵に履帶でもやられたら万事休すである。その時だつた。

振り返つた将美の正面に煙幕を突つ切つたIV号が姿を現した。すぐさま砲塔を回すが間に合うわけもなかつた。

「撃て！」

「てえつ！！」

みほの指示を受け華が引き金を引いたとき、同じく煙幕を突破したIII号が同時に主砲を放つ。IV号の主砲弾はティーガーの車体後部を直撃し、III号はIV号の左側のシュルツエンを吹き飛ばした。

『ゲルダム高校フラッグ車、行動不能！よつて、大洗女子学園の勝利!!』

ジャッジの声が響き、目の前でパタパタと翻る白旗を見つめながら将美はなぜIV号がすぐ近くに現れたのかを悟つた。

「あの38tの砲撃か…」

「やつた！勝つた！やつぱり華は最高の砲手だよ！」

「五十鈴どの、見事な一撃でした!!」

飛び出した先にいたティーガーの弱点を的確に砲撃した華。

「いえ、麻子さんの操縦のお陰です。」

IV号をベストの位置へと飛び出させた麻子。

「いや、西住さんが敵の位置を耳で捉えたお陰だ。」

そして38tの砲撃から敵の居る位置を正確に判断して指示を出したみほ。

「ううん！皆の団結のお陰だよ！優花里さんも絶えず装填を続けてくれたし、沙織さんはコブラさんチームの報告もきちんと伝えてくれたから。」

IV号の中であんこうチームはお互いを称え合う。誰かが欠けてもこれはなし得なかつたであろう。一時は危機に陥つたが諦めないチームワークが大洗に勝利をもたらしたのだ。

『西住隊長、やりました！』

通信が来たところでみほはキュー・ボラから外へと顔を覗かせると横に今回の殊勲者とも言うべきコブラさんチームの38t軽戦車が来ていた。

「コブラさんチーム、あなた達が今回の試合のMVPです！本当にありがとうございました！」

「西住隊長、本当ですか!?」

「フォツフオツフオツ…」

「照れてまうなあ～」

リーダーの烈和はみほの称賛に嬉しそうに聞き返し、砲手の春田聖は不敵に笑う。操縦手の小森欄も嬉しそうに頭を搔きながら笑う。大洗新チームのデビュー戦は充分過ぎる戦果を上げたのであつた。

一方のゲルダム高校隊長車輛では…

「隊長、申し訳ありませんでした。」

ティーガーの操縦手が車長席に座る将美に謝罪する。彼女が「自分の腕が未熟で…」と続けたところで将美が遮った。

「君達は充分ベストを尽くしてくれた。これ以上何も望まないよ。」

そう言つて愛用のヘルメットを外し髪を指で梳かした。

「しかし、隊長はこの大会のために誰よりも努力されました。」

「そうですよ。大好きな深夜番組も観ないで自分達のために…」

今度は砲手と装填手が口を開いた。通信手はうつむき言葉を選んでいるように見受けられる。

「はつはつはつ、皆ありがとうございます。」

軽く笑つて将美は続けた。

「私個人の結果は出せなかつたが、皆の気持ちはよくわかつた。それだけでもこの試合、充分意味があつた！」

そして今一度メンバーの顔を見て言う。自分達に残されたこの試合で為すべきことを…。

「さあ行こう！戦車道は礼に始まり礼に終わる。皆で大洗を称え礼を示そう。」

将美はキュー。ポラから這い出して背伸びをする。彼女は遠くに運営の回収車の姿を認めたのであった。

「やつたー！あんこうが勝つたー！！」

応援席にいた晴香は両腕を振り上げて大洗の勝利を喜ぶ。
「なつ？言つた通りだろ？」

同じテーブルについた見晴に片目を瞑りいたずらした様なちよつと子供っぽい表情で語りかける葵。ホツとした様な感じで見晴は答えた。

「ほんとに、あなたの言う通りね。」

そう言いながら画面に釘付けになつて拍手をする娘に視線を向ける。

「いつかはこの子もあそこへ行くのかしらね？」

娘のことが少し心配なのであろうか？しかし親としては娘を応援したいのもまた本心であった。

「まだ先のことだけど…俺は晴香を応援したいな。」

そう言いながら葵はテーブルに置かれた見晴の右手に自分の左手を重ねる。

「大丈夫さ。俺もついてるから。」

夫の真っ直ぐな視線と意見を受けて、見晴は静かにうなずいた。

「大洗ばんざーい！あんこう最高だぜー！！」

一方では橋下団長以下大洗応援団が一つの間にやら合流してきた教官補佐や整備の立花藤兵衛らと共に声を張り上げて大洗の勝利を祝つていた。

「これも一枚…」

そして一文字隼人はそんな彼らの姿もカメラに収める。その姿を横で見ていた風見志郎は再びスクリーンへと向き直る。そこには激闘を乗り越えた大洗メンバーの笑顔が大きく映し出されていた。

『ありがとうございました！』

試合が終わり両校のメンバーが一堂に会して挨拶を交わしていた。

『礼に始まり礼に終わる』。戦車道の礼儀であった。

「完敗です。砂漠戦で有利な状況で我々は大洗に翻弄されっぱなしでした。まだまだ未熟者です。」

「いえ、ゲルダムも強かつたです。38tがいなかつたら、あんこどうはやられてました。」

試合が終わり互いに握手をしながら将美とみほはお高いを称賛する。

「それにフラフラ作戦をコピーされたことにも皆動搖しましたし…」

振り返ると大洗にとつて一時期フラッグ車輛が孤立する危機にあつたのも事実だつた。もしも38tを近くで行動させていなかつたらIV号はIII突が到着する前にやられてしまつたであろう。

「ゲルダム高校は強敵でした。」

「西住さん…」

みほの素直な一言に将美は揺れ動く。

「ミホーシャ！サミーシャ！」

そんな彼女らに声がかけられた。その場にいた一同が顔を向けるとそこにいたのは…

「カチューシャさん、ノンナさん。」

プラウダ高校の前隊長カチューシャと彼女を肩車した前副隊長のノンナであった。みほが声をかけるとカチューシャは下ろされて2人でゆつくりと歩いてきた。

「サミーシャ、久しぶりね！」

みほと将美の横までやつて来て腕を組んで意氣高く語りかける力

チユーシャ。将美は少しうつむき加減で口を開いた。

「…カチユーシャ先輩。」

「よくやつたわ！ミホーシャを相手にあそこまでやり抜くなんて。」

消沈気味な将美を称えるカチユーシャは続けて言つた。

「もうすっかりいっぱいの隊長ね！冬の大会が今から楽しみだわ。」

「…」

「約束おぼえてるわよね？」

言葉を返せず固まる将美に続けて問い合わせるカチユーシャ。すぐに彼女は返事をした。

「勿論です！忘れたことはありません！」

「約束は果たされたわ。次は必ず勝ちなさい。」

カチユーシャがいつかみほにしたように右手を差し出した。

「…はいっ！」

「大学で待ってるからね！カチユーシャをがつかりさせないでよ！」

尊敬する先輩からの言葉を受けて頷く将美の瞳からは一筋の涙が零れた。彼女は両手でカチユーシャの手を握り答える。自らの行つてきたことが間違つてはいなかつたことがこれほど嬉しいことだとは思いもしなかつたことだろう。

そしてその姿を見たノンナが拍手を始め、その輪はやがて大洗、ゲルダムのメンバー全員へと拡がつて行つたのであつた。

「さすがみほさんですわね。」

少し離れたところでそんな彼女らを見ている人物がいた。すつか

り陽が落ちて涼しくなったことで必要の無くなつた麦わら帽子を抱えてほほえみながら彼女は続ける。

「でも…次はどうかしら？」

聖グロリアーナ女学院の前隊長ダージリンはそう続けると背を向けて歩き出した。

数日後：ワツフル学園と聖グロリアーナ女学院の試合は聖グロに軍配が上がつた。大洗と聖グロ、公式戦では初対戦となる因縁浅からぬこの対戦カードは両校のチームはもとより、多くの関係者や他校のチームも一段と注目したのであつた。

そして少し時間を遡つた5月後半の聖グロリアーナ戦車倉庫…ここには隊長のオレンジペコ、副隊長となつたルクリリとローズヒップが集まり整備班によつて最終チェックが行われていた車輛に注目していた。

「これが…」

今まで扱つてきたマチルダIIと比較してその存在感に圧倒され言葉が詰まつてしまつたルクリリに目の前の車輛から目を離すことなくオレンジペコは言い放つた。

「ブラックプリンス、別名『スーパーチャーチル』です。」

ダークグリーンに彩られた大口径砲を備えた重々しいその姿。高さは抑えられているものの全長と重量、そして見た目の威圧感は重戦車と言つても通用することだろう。

「すゞいですわ～！なんて頼りになりそうな戦車でしょう！」

ローズヒップが戦車の周りを回つてそんな声を上げる。チャーチルよりも一回り大きいその姿は今まで関わってきた戦車とは一味も二味も違つて見える。

歩兵戦車ブラツクプリンス

全長約8・8メートル

重量51トン

最高速力時速19キロ

正面装甲152ミリ

主砲オードナンスQF17ポンド砲搭載

聖グロリアーナがほこる歩兵戦車チャーチルを強化した最後の歩兵戦車である。速力は装甲や主砲の強化のために犠牲になつているものの登坂能力や不整地での走行は安定しており、また正面装甲はティーガーIやチャーチルの約1・5倍、主砲は連合軍で最も優秀とされたオードナンスQF17ポンド砲を採用。まさに最後にして最強の歩兵戦車である。

「しかしOG会もよく了承してくれましたね。」

「ダージリン様が方々で話を通してくれました。それにOG会も大洗を強敵であると認めています。」

ルクリリの発言にオレンジペコが答える。聖グロリアーナ女学院ではOG会にて派閥が存在していて主にチャーチル派、クルセイダー派、マチルダ派の三派にわかれており、使用する車輌は彼女らの意見が大きく反映される。その他後援のために資金提供なども行われて

いるために行われていることでもあるが聖グロの前隊長ダージリンは卒業を前にOG会に訴えたのだ。

「大洗をはじめ次期大会はこれまで以上の激戦が予想されます。面子に拘り続けることは聖グロリアーナの勝利を阻害することに疑う余地はありません。」

ダージリンはOG会の幹部を前にこう切り出した。実際公式戦では対戦したことのない大洗だが練習試合ではIV号との至近距離からの撃ち合いを制し、エキジビションマッチではプラウダの力チューシャが盾になつたことで勝利した。ギリギリではあるが勝利をさせてきた聖グロリアーナだが大洗で開催された冬季鍋選抜大会では引き分けとなつていて。

「皆様はこんな言葉を存じでしようか？『誇りは氣高いが…過剰になれば傲慢だ…』。」

こうしてダージリンの説得を受けたOG会はこれまでにない戦車の導入に同意したのである。

「大洗のみならず各校強力になつているとみて間違ひは無いでしょう。そのためにも…」

そう言うとオレンジペコは振り返つた。そこには数歩下がるよう控える人物がいた。

「よろしくご指導お願ひいたします。キリマンジアロ様。」

名を呼ばれた人物、西吳王子グローナ学園前隊長キリマンジアロは畏まつて返答した。

「聖グロリアーナのお力になれるならこのキリマンジアロ、喜んでお引き受けいたしますわ。」

かつて自身が乗っていたブラックプリンスの扱い方を教えるためにダーリングが呼んだ助つ人であつた。大洗がセンチネルと38tを用意したように、聖グロもまた大幅な強化を施した戦力を整え来るべき大洗との戦いに備えていたのである。

2人の『のりこ』です！

『祝・大洗女子学園・戦車道全国大会一回戦突破！』

昨年使われた垂れ幕が再び屋上から吊るされ大洗女子学園の勝利を宣伝していた。登校してきた生徒達は口々に

「さすが、うちの戦車隊」「今年も良いとこまで行くかな？」「あ～やつぱり戦車道とつとけば良かつた」という具合に校門を通過する。

「本日も特に異常なし…。」

校門脇に立つ風紀委員であり戦車隊の一員である佐上円香ことサド香は手元の用紙に書き込みながら周囲を見回す。遅刻魔の麻子も最近は朝練習等もあり遅刻はしていない。

「あと15分…。」

愛用の腕時計で門を閉める時間を確認していると…。

「のりこ、今からでも遅くないかもよ。」

「でも…」

そんな彼女の近くで話をする2人の生徒がいた。思わずのりこと言ふ名前に同じ戦車道メンバーの磯辺典子かと思いそちらを向くが

⋮

「？」

「良いの？ いつまでも負け犬呼ばわりされてて!?」

「…私には…もともと何も取り柄なんか無いし…。」

そこにいたのはバレー部の典子では無かつた。赤みがかつた髪を肩まで伸ばし、黄色いバンダナを着けたどちらかと言えば磯辺典子と同じバレー部のメンバーである近藤妙子に似た”のりこ”は友人とおぼしきハイビスカスの髪留めを頭頂部に着けてお団子にして後ろに髪を長く垂らした女子生徒に何やら説得されている様であつた。

「根性だけは頼りなんじや無かつたの!?」

「私は根性なんて無いし…戦車なんか…。」

友人からの言葉に強い調子でのりこは背を向けと発言した。

「私は戦車なんか乗りたくない!!」

「のりこ!!」

駆けていく2人の女生徒の背中を見ながらサド香は呟いた。

「戦車に乗りたくないか…。」

「2年F組高屋のりこ、昨年度10月より沖縄県中央女子高等学校通称『オキジヨ』から大洗女子学園に転校。なお選択必修科目は書道。戦車道ブリーフィング室にて生徒会から拝借してきた資料を読みあげるサド香。

「サド香、この生徒がどうかしたの？」

横からそれを見るのは現風紀委員長のゴモヨ。興味があるのか室内にいたみほ、優花里、カエサル、梓も集まつた。

「いえ、そうではありません。」

そこでサド香は今朝のことを話した。

「もしかすると戦車道に関わったことがあるのかなと…。」

「オキジヨと言えば戦車道よりもむしろタンカスロン（強襲戦車競技）の方が有名ですね。」

優花里が顎に左手をあてながら言うとカエサルが尋ねる。

「タンカスロン？ 我々も昨年参加したあの小型軽戦車や豆戦車だけで行う野良試合？（リボンの武者）」

「はい！ BC自由学園などと並ぶ西日本におけるタンカスロンの5本の指には入ります！」

「ひよつとするともとはそちらの方なのかもしませんね。」

優花里の返答に続き梓が発言する。

「でも戦車道やりたくないって言つてるつてことは…」

「もしかすると私と同じ…。」

「西住殿…。」

のりこの発言を黒森峰から来た頃の自分と重ねたみほに優花里が声をかける。彼女は少し考え発言した。

「少し調べてみましょ。」

その夜、熊本県黒森峰女学園学生寮

「オキジヨにツテがあるかですって？何よ藪から棒に。」

黒森峰女学園戦車道隊長逸見エリカは自室でベッドに腰掛けながら電話を受けていた。ちなみにいつもの制服やパンツアージャケット姿ではなく黒の半袖シャツに同色のショートパンツ姿である。

『ごめんなさい、前にエリカさんがそれっぽいこと言つてたから。』
『よく覚えてたわね。まあ良いわ、2、3日以内に連絡するから。1つ貸しよ。』

相手は大洗のみほからだつた。以前は顔を見ればみほに恨み節をぶつけていたエリカであつたが昨年の戦車道全国大会と黒森峰訪問（ドラマCD）、北海道決戦を経て今ではかつてのような良き友人、良きライバルと言える仲に戻つていた。

『うん、ありがとうエリカさん。試合頑張つてね。』

「それはお互い様よ、次はあなたこそ聖グロ相手にするんだから気を抜かないことね。それじゃ。』

『うん、お休みなさい。』

携帯を切つて室内の壁掛けカレンダーに目をやる。みほ達も自分達も次の試合が着実に近づいていることを改めてエリカは考えた。黒森峰の次の相手は継続高校。総合的には黒森峰が有利だが油断ならない相手である。

2日後、大洗女子学園戦車道のもとに逸見エリカからのファックスが送られてきた。

『高屋のりこに関する報告』

高屋のりこ

年齢16歳、大阪府出身、12歳のときに沖縄へ引っ越す。父親は海上自衛隊の故高屋勇造海将。15歳、沖縄中央女子高等学校入学、タンカスロン部に入部するが7月に退部し10月に大洗女子学園に転校する。なお当初は9月の転校予定であつたが廃校騒動（劇場版）のため10月までずれ込んだ。

「たつた3ヶ月で退部して夏休み明けに転校…。」

「何かあるのは間違いないな。」

「それなんんですけど…。」

力工サルとエルヴィンの発言を挟みみほは続けた。

なお退部の理由は本人の意思であるが部内での虐め等。主任監督兼コーチの抜擢により6月より隊長車輶の砲手担当になるもこの頃より、上級生を中心に彼女への風当たりが強くなりついには練習試合中に味方に罵にはめられ隊長車輶脱落の上敗北の全責任を押し付けられる。

「ひどい！」

「あんまりじゃないか!!」

梓と力工サルが続けて声をあげる。実際ひどい話だ。

「隊長のパートナーに選ばれたやつかみだな。」

冷静に意見を出すのは冷泉麻子。さらに持論を上乗せする。

「それにもしかすると親のコネを使つたと思われたんじやなかろうか。」

「あり得ますね。オキジヨはなかなか位の高い学校もあります。」

優花里が麻子の発言を補足する意見を出す。他人との軋轢や不和

はチーム戦にとつては致命傷。一致団結を基本理念にしている大洗にとつては無縁なことだが、出る杭や気に入らないものを打つというのはよくあることでもある。実際みほは黒森峰に入学した当初はそういう扱いも受けたりしたものであつた。

なお第三者機関は動かなかつたものの学校では虐めを認定し問題を起こした生徒達は直ちに退部及び一部退学、タンカスロンも2ヶ月間の活動停止となる。報告書の最後を読み上げた時、室内には思い空気が立ち込めていた。

翌日の朝、いつもの時間に目覚めたのりこはいつものようにジャージの上下にランニングシューズ、タオルを首にかけたジョギングスタイルで街中を走る。

『1. 2 1. 2 1. 2』

頭の中でリズムをとりながら駆けて行く。タンカスロンをやめても完全に毎朝の日課としてしみついて止められなかつた。

「おはよう!!」

やがてとある十字路で人に出会う。

「磯辺先輩、おはようございます。」

その人物は大洗女子学園3年生、バレー部キャプテン磯辺典子であつた。彼女に限らずのりこはたまに朝バレー部の面々とは出会うことがある。2人ののりこは並走してジョギングを続ける。

「暑くなつてきて走るのもなかなかにしんどいね。」

「そうですね。あ、そう言えば先輩、戦車道おめでとうございます。見てましたが本当に凄かつたですね。」

世間話に華を咲かせながら坂道を登る。

「いやいや、私達の八九式は敵を倒してないよ。」

「でも昨年から偵察や囮に活躍してるじゃ無いですか。」

「まあそこは根性だよ！」

「根性…。」

それは自分の一番の取り柄だったこと。父と母、そして尊敬する先輩、コーチ、ボーキフレンドからも賞賛されたもの。

『お前の根性は素晴らしい。だがそれだけでは勝つことはできん！お前に抜けているのは努力だ！』

『のりこならできるよ。いつものど根性見せてくれよ。俺応援してのからさ。』

恩師とボーキフレンドからの言葉が頭によぎる。時おり思い出してしまう辛い記憶だつた。

「バレーも戦車道もやつてみる気はない？」

典子の言葉で意識が現在に戻ってきたのりこは横に首を振つた。

「…私は…そういうのは…。」

「そつか…。」

実に残念だつた。仮メンバーではあるがコブラさんチームの赤城烈和も加えていよいよメンバーハイナンバーの数が揃いかけている現状で高屋のりこは有望株だと典子は睨んでいる。しかし本人の意思で拒否されていてはどうにもならない。ため息を呑み込み氣を引き締めて典子は走ることに集中するのだつた。

「遅れてしません。」

その日の戦車道の練習に典子は担任から頼まれごとをされたので少し遅れてしまつた。事前にたまたま通りかかった歴女チーム7人

に伝えたので問題は無かったのだが戦車道倉庫に入るとみほ、梓、エルヴィン、カエサル、サド香が寄ってきた。

「磯辺さん。」

「紗希から聞いたんですが高屋のりこさんと一緒にトレーニングしてますか？」

入ってきて早々、待っていたみほと梓に質問される。どうやら自分がトレーニングしているところをよく朝に散歩をしている丸山紗希に見られていたらしい。

「ん？ 朝のジョギングをたまに一緒にしてるけど…。」

「実は…」

「そうか、だからスポーツとか戦車道とか敬遠してたのか。」

みほ達からのりこの事情を聴いた典子は納得した。彼女の受けた仕打ちがトラウマとなつていたと確信する。

「何度も勧誘してみたけど、どうにもやりたくないって。」

「あの…」

典子がそう言つた時、1人の女子生徒が倉庫の扉を開いて入つてきた。一同が目を向けるとサド香が口を開いた。

「あなた、たしか高屋さんと一緒にいた。」

「すいません、私良波しゆりと言います…。」

「何か？」

「あの…そののりこのことで…」

「私、沖縄出身なんです。中学の時にこつちへ来まして。同じ沖縄から来たのりこに声をかけて、友達になりました。」

「それで先日、九州に学園艦が入港したときに一緒に上陸したんです。でもその時…」

『久しぶりねえ全滅娘!!』

『少しば反省したかしら?』

『あんたにはなに一つ才能なんて無いのよ。』

『おかげでどれだけ私達が迷惑を掛けられたことか。』

『負け犬は負け犬らしくおとなしくしてなさいよ。』

「突然罵声を浴びせられて…のりこに聞いてみたら前の学校の先輩達
だつたつて…」

「なんて奴等だ。」

「戦車道の風上にも置けんな。」

しゆりの話に先日にも増して憤りを見せるカエサルにエルヴィン
が続く。

「自分達のしたことに何も気付いていないどころか虐めた相手を罵る
なんて!」

「風紀違反も良いところです!」

典子は友人の受けた仕打ちに拳を握り、サド香は河島桃から譲り受けた片眼鏡を外して目を瞑る。みほはそんな中で少しうつむきつてしまふに問いかけた。

「それで…高屋さんは?」

「言われた通りだつて…自分が悪いんだつて…」

しゆりの言葉にその場にいた全員が何も言うことができなかつた。

「でも…」

しゆりの続く言葉に皆が顔をあげて聞き入る。

「その時ののりこは…悔しそうに見えたんです。すぐにいつもの表情
に戻しましたけど。でも本当は戦車に乗りたいんじゃないかって
思つたんです。」

付き合つた時間はまだ短いかもしれないが、しゆりは確かにそう
思つたのだ。のりこは元来負けず嫌いで、本当は見返してやりたいの
では無かるうかと…。その時だつた。

「話は聴いた。」

「羽村教官!!」

いつの間にか教官の羽村葵が入り口に立っていた。そしてその場にいたメンバー達に自分の考えを話す。

「その高屋さんのコーチをしていた人に心当たりがある。ちょっと連絡をとつてみるから今日の練習は筑波達の指示に従ってくれ。」

「失礼します。」

さらに翌日のこと、葵はのりこを教官室へと呼び出した。

「急に呼び出して申し訳ない。高屋のりこさんですね。」

机に座つていた葵が立ち上がり出迎える。

「自分は戦車道教官の羽村です。楽にしてください。」

そう言つて以前みほと優花里と話をした時のテーブルの椅子をすすめる。彼女は少し躊躇したがすすめられるままに座ると葵も対面に座つた。

「早速ですが、あなたは沖縄女子中央高等学校でタンカスロンをしましたね?」

「…はい。」

勧誘されるのだろうか…どうやつて断ろう。

「部活や選択科目には口出ししません。あなたの好きなものを始めれば良いです。ところで…」

前置きをしたうえで少し間を置いて続けた。

「天野…いや、大田浩一郎という方を知っていますか?」

「?」

「やはり…」

その名前を聴かされたのりこは両目を見開いて驚いた。

「コーチのことを…存じなんですか!?」

慌てたように問うのりこに葵は頷いて答えた。

「はい、今は東京におられます。」

「東京に…」

「高屋さん、彼に会つて下さい。」

「えつ…。」

思わぬ人物の名前と葵の言葉に意図を掴みかねたのりこは固まつてしまふ。

「お願ひします。」

葵はそんな彼女に頭を下げる。

「コーチに…何があつたんですか？」

少し間を置いて口から出た言葉は少し震えていた。

「それは直接本人の口から聞くべきです。もしある会いするなら、あなたを案内しましよう。」

「…」

『高屋!!お前の取り柄は根性だ!決して折れない不屈の根性だ!ここに努力が重なればお前はさらに強くなれる!』

『良いか!?お前はただの小さな火にすぎん。しかしだ!!お前がパートナーと完璧に息をあわせて立ち回れば、2人の火は一つとなり、炎となるのだ!!何者にも負けない炎に!!』

大田浩一郎、かつてのりこを戦車教官として指導した人物。厳しい人だったが的確な指導と教練はのりこ達にとてもありがたいものであつた。自分が辞めた頃には一身上の都合のためと一切会うことが出でなくなつてしまつた恩師に再会出来るかもしれない。のりこの答えはひとつだつた。

「…会います。会わせて下さい!」

「…」

「…」

後日…葵はのりこを連れて東京都内のとある大学病院へと来てい

た。

「今は御結婚された天野先輩は昨年7月に倒れて入院、12月にこの

病院に転院されました。

2人で受付へと向かい面会手続きを済ませてエレベーターに乗る。2人を乗せたエレベーターは6階で止まつた。

「自分が陸上自衛隊の戦車学校に入つたとき、天野先輩は一期先輩でした。」

エレベーターを降りて左へ歩き出す。のりこは少し後ろをついていくと角部屋の前で止まつた。少しの間をおいてノックし扉を開ける。

「失礼します。」

「…羽村か。」

そこは個室だつた。リクライニングさせたベッドに背を預けて窓を向いていた大柄な男性が葵に顔を向ける。黒髪に少しこけた頬、そして開くことの無い右目を持つこの人物こそ高屋のりこの沖縄時代のコーチ、天野浩一郎（旧姓大田）である。

「天野先輩、御加減どうですか？」

語りかけつつベッド脇に立つ葵。久しぶりの後輩の訪問に少し表情を崩して微笑む天野。

「今日は気分がいい。さつき中庭を少し散歩してきました。」

そう言つて脇に置かれた杖を見やり体力の衰えは情けないものだと呟く。

「そうですか。先輩、今日はお客様がいるんです。」

「客？」

あまり馴染みのない言葉に怪訝に思いつつ天野は入り口に目を向けて：

「!?」

「コーチ、お久しぶりです。」

そこにいた人物に左目を大きく見開いたのであつた。

「高屋…。」

のりこは葵の横に立つて驚愕の表情を見せる天野に相対する。

「…」

曇り顔の彼女は言葉を発せられず少しうつむき加減になつた。暫

くそのままで沈黙する両者だつたが…

「…すまなかつた。俺が不甲斐ないばつかりに…。」

ふいに天野が口を開いて彼女に謝罪した。

「えつ…。」

驚いたのりこが顔を上げて見ればかつて鬼コーチと言われた彼が悔しげに顔を歪めて左目から一筋の涙を流していた。

「俺がもつとしつかりしていれば…こんな病気なんかにやられて現場を離れさせしなければ…お前を指導して、誰にもお前を落ちこぼれなんて言わせはしなかつたというのに…。」

右の掌を強く震えるほどに握りしめて呻くように咳き続ける。

「お前のお父さんに顔向けてできん…。」

そしてさらなる告白にのりこは驚いた。なぜここで自らの父のことが出でくると言うのか。彼女は問いかける。

「コーチは…お父さんと?」

「3年前の高屋海上護衛艦隊司令と嵐山現防衛大臣の会食に俺も参加させていただいた。」

すぐに天野は答える。自らとのりこの父との接点を。

「あの時高屋司令官は俺と嵐山さんを庇つて自爆テロに巻き込まれた。」

高屋勇蔵…のりこの父であり海上自衛隊次期幕僚長とも言われた優秀な人物であつた。陸海合同による中東某国へ親善派遣の際、一団を狙つたテロリストが行つた自爆テロに巻き込まれ殉職。間一髪彼の咄嗟の判断で同行していた嵐山大臣と付き添つていた大田浩一郎は助かつたのだ。

「コーチ…」

今のりこは初めて浩一郎がなぜ自分に目をかけてくれたのか、そして辛い特訓を強いてきたのかを知つた。

「それから1年後に自分が病におかされていることを知った。」

そう言うと彼は少し前のめりになつていて身体をリクライニングさせたベッドに預けて眼を瞑つた。

「俺は白血病だ…そう長くはない…。」

「!？」

静かな彼の告白にのりこは驚きを隠せなかつた。

「最後にこの命を賭けて、君を立派な戦車乗りにすることが高屋さんへの恩返しだと信じたのだ…しかし…」

一層悔しそうに顔を歪ませ、浩一郎は謝罪を続けた。

「俺は恩返しどころかお前を追い込んだ。俺は…」

「違います！」

すると突然彼女が強く遮つた。

「コーチは…コーチは私の恩人です。」

今度はのりこがその心に思つていたことを話す番だつた。

「コーチのおかげで私は戦車乗りに必要なことを学べました。技術ばかりを求めて足搔いていた私に道を示してくれました。」

「…」

「そして脚も悪いのに、雨の日も風の日も私のトレーニングに付き合つて下さいました。」

2人には沖縄の海を見、潮風を受け駆けた日々が思い出された。

「コーチ…ありがとうございました。」

深く頭を下げるかつての教え子の姿に天野は言葉を失い、彼女の名を小さく呟いた。

「高屋…」

「コーチ…見ていてください！」

そして頭を上げた彼女の瞳には熱く燃えたぎるような強い意思が感じられた。

「必ず…必ず私は立派な戦車乗りになります！」

「!？」

彼女の闘志に火がついたことに驚きつつ、天野は自らの病衣の袖で頬の涙を拭うとかつての指導者としての威厳をこめつつ返した。

「…よく言つたぞ高屋!! それでこそお前だ!」

「はい!! コーチに教わった『努力と根性』を糧に戦います!」

「うむ、羽村。」

呼び掛けに葵は頷いて応える。

「まかせて下さい。先輩の教え子、しっかりとお預かりします。」

「お前なら安心だ。この通り、よろしく頼む。」

天野は頭を下げてのりこを葵に託した。葵とのりこはこの時思つた。必ずこの大会で勝利して天野に捧げようと…。

そして翌週、戦車道の時間に倉庫前の広場でメンバー全員が揃うなか、葵が新しく参加する2人の生徒を紹介する。

「紹介しよう、新しい履修生として本日より加わる…」

「高屋のりこです!!」

「良波しゅりです!」

「よろしくお願ひします!」

紹介された2人は名を名乗ると声を合わせて頭を下げた。同じく頭を下げてメンバーが応え、お互に顔を上げると戦車隊長であるみほが歩み出てきた。

「隊長の西住みほです。改めて今日からよろしくお願ひします。」

そう言つて右手を差し出す。かつてサンダースと戦った時のケイの握手を彷彿とさせる姿だった。そしてのりことしゅりは自らの右手でみほに応えた。

「とりあえず高屋さんはカメさんチーム、良波さんはコブラさんチームに入つてくれ、ポジションは2人とも装填手からだ。」

「はい!」

葵から指示を受けたのりこはすぐにメンバーのある人物のもとへと向かつた。

「磯辺先輩!」

「高屋、よく来たね！期待してるよ！」

「ありがとうございます！」

自らを度々誘つてくれたも典子に礼を述べて続けた。

「それと…お願いがあるんですが…」

「ん？」

「あの…戦車道大会が終わつたら、私をバレー部に入部させてください！」

思つても見なかつたことだつた。驚く典子にバレー部のメンバー、そして他の履修生達の視線が集まつてくる。

「!?本当に！」

「はいっ！！」

「「キヤプテン!!」」

のりこの力強い返答に取り囲むような後輩の自らを呼ぶ言葉。この瞬間典子は待ち焦がれた日がついにやつて来たことに歓喜したのであつた。

「よしつ!!バレー部復活に向けて、戦車道大会を勝ち抜くぞ！」

右腕を上に突きだした典子に応えるように佐々木、河西、近藤の3人も続く。そんな姿を見ながらのりこは自らの頭に括りつけた青鉢巻きの長い端を指でつまんだ。

（スミス…私…もう一度頑張つてみる。）

この鉢巻きを自分に渡し、大田コーチと同じく自分を応援してくれた人の姿を思い浮かべる。自らを責める彼女を支えてくれようとした彼は不慮の事故でこの世を去つてしまつたがのりこは今新たな仲間を得てこの鉢巻きを着けて記憶の中に生き続ける彼に再び笑いかけることができたことがとても嬉しかつたのだつた。

聖グロリターンマッチです！

ついに大洗女子学園戦車道全国大会2回戦の日がやつて來た。

「よいしょっ!!」

「せいやっ!!」

「ほいっと!!」

大洗陣営では現在応援団の橋下団長以下団員達の協力のもと砲弾などの備品がトラックからガレージの各車両へと運ばれていく。さすがに日頃鍛えているレスラー達とあつて力仕事はお手のものであつた。一方では最終整備をしている立花藤兵衛が新入組を相手に軽い整備のアドバイスや教官の羽村葵が副隊長エルヴィンを含む歴女一同と何やら話をしている。

「橋下さん、いつもありがとうございます。」

IV号のもとに備品を運んできた橋下団長にねぎらいの言葉をかけると団長は首にかけたタオルで顔を拭きながら答えた。

「いやいや、西住隊長。体力面をサポートして選手達にはベストコンディションで挑んでもらう。これも応援団の仕事だ。」

初めはごつい風体におつかなびっくりだつたメンバーも今ではすっかり団長達に馴染んでいた。とくにアヒルさんチームは一緒にトレーニングしたり身体の小さい麻子や佳里奈、紗希はよく肩に乗せて運ばれてたりしたりもする。応援団の存在はメンバーにとつても良いリラックスに貢献していた。

そしてさらに彼女達への協力を惜しまない人物達がいた。

パツパく！」

「お待ちちどう!!」

一同がクラクションと声に眼を向けた先には3台の車がいた。まずは整備士をしている立花藤兵衛のジープ、運転席にいるのはツナギにサングラスとなかなか決まっている風見志郎だ。今日は店を休みにして手伝いに来てくれたのである。そして次に続くのは大洗警察学園艦分署からやつて来た黒の覆面スーパー・パトカーマシンXと赤の高機動パトカーマシンRS-1である。

「リュウさん!!」

「リュウ兄ちゃん!!」

降りてきたのは学生達から一部ではアイドルの如く扱われている桐生刑事だ。今日は青のジーパンに半袖の白シャツと簡素な格好だが細い線のボディが浮かび上がりなんともそれだけで魅力的で呼び掛けた沙織などははやくも足元がぐらつきそうになり、姪っ子にあたる篠麻厘は嬉しそうに笑っていた。

「よう!・御一同に頼まれたものだ!」

そう言うなり後部座席からクーラーボックスを下ろす。中には冷えたお茶やジュースがぎつしりと詰まっていた。

「こっちもあるぞ!」

そう言つてRSから降りてきたのはリュウの同僚、大洗学園艦警察の平尾一兵巡査。こちらは大きめの眼鏡に黒のスラックスに水色のシャツに薄手のチョッキでなぜか蝶ネクタイを絞めている。彼いわく黒渦眼鏡と蝶ネクタイはトレードマークらしい。

こちらも飲み物などを運んできており一斉にメンバーが群がつてきた。

「リュウさん、ありがとうございます!」

「ありがとうございます。」

リュウ達のもとにやつてきたみほと葵が礼を言う。今回の役割分担は買い物人員を割り振ろうとしたときにたまたま藤兵衛に用事があつて出向いていた風見志郎が聴いたことから話が広がつたものであつた。

「これくらい軽いもんさ。」

「そうそう、学園艦警察なら車輛装備も使い放題だし。」

リュウと一兵の2人は実はアミーゴの常連でもあつたため小耳に挟んだのである。そこで手伝いを買って出てくれたのだ。

「何よりもかわいい女の子達とおおっぴらに絡めるなんて、これぞ役得つてやつかなあ？」

頭かきながら笑顔の一兵。そんな姿にみほは乾いた笑みを浮かべたのだった。

すると、一台のダークグリーンの幌つきジープが一行のもとへと接近してくるのが見えた。誰だろうかと一同が動きを止めて注目するなか、ジープが助手席を向けて停まりドアが開いた。

「元気そうねえ。」

ジープから降りてきた人物がそう言って腕を組む。

「アリサさん！」

みほが名を呼び近づいていく。やつて来たのはサンダースの現隊長アリサであつた。

「学園艦がたまたま近くまで来たからね。激励に来てあげたわよ。」

「ありがとうございます！」

2人が握手する姿に大洗のメンバーも取り囲むように集まる。

「アリサ殿、御無沙汰しております！」

「アリサさん、付き合うことになつた新しい彼氏はどうですか？」

続いて声をかけたのは優花里と梓。アリサは少しのけぞり気味に驚いた。

「なんで知つてんのよ!?」

「ナオミさんからL○N Eが…」

「オーノー！なんであの人たちはすぐに私のことをばらすのよー！」

いつも通りな扱いに頭を抱えて叫んだと思えば、続いて地団駄を踏み怒るアリサ。みほたち昨年からいるメンバーにどこかで笑つているケイとナオミの姿が目に浮かんできた。

「まあまあアリサさん、きっと悪気は無いですから。」

みほがフォローしたところで少し落ち着いたのかアリサはため息をひとつついた。

「はあ…まあいいわこの際…言つたところでバレたことの撤回は出来ないもの…」

「それでそれで…彼氏さんてどんな感じ？どこまで進んで…」

「ノーコメント！」

沙織の食い付きを二つ返事でカットしてみほに向き直る。

「ところで西住さん、会わせたい子がいるの。」

「え？ 私ですか？」

「そう、うちの新入生よ。」

そう言うとやつて来たジープに戻つて運転席のトビラを開く。

「ほら、引っ込んでないで降りてきなさい。」

「アリサ隊長、そんないきなり…」

何やら問答をしつつアリサは中の人物の腕をつかんだ。

「ほら尻込みしないで!! 期待の新人エースが聞いて呆れるわ。」

なんだなんだと思つていた一同の前にアリサは引き摺り下ろした人物を連れてくる。

「あっ…」

「君は…」

みほが思わず声を漏らし葵も続く。アリサに連れてこられたのはサンダースの新入生らしい。背はみほど変わらないくらいで明るめのショートカットでてつぱんに華のような髪がちよんと可愛らしく立ち、前髪を緑のヘアピンで留めた少女。大洗のメンバーでは誰の記憶にも無い人物だった。

「ひかりさん…雁淵ひかりさん？」

みほが問うと相手は観念したように頷いて返した。

「はい…お久しぶりです西住さん、羽村さん。」

「うわあ!! 久しぶりだね！ サンダースに入学したんだ！」

みほの質問を肯定したひかりと呼ばれた少女が答える。みほがその答えに笑顔全開にして手をとつた。葵も「やっぱり…」と口から漏

らして懐かしそうな表情を見せる。

「はい、地元佐世保の学校ですから。」

そう返して少し俯くひかり。

「…本当はお姉ちゃんのいたプラウダ高校に行きたかつたんですけどね。」

その姿にアリサが背中を叩いた。

「何落ち込んでんのよ！サンダースにしたつて高校戦車道四強校の一角よ！」

「そうだよひかりさん。まだまだ一緒になるチャンスはあるから。」

ひかりのフオローをするアリサとみほ、そこで優花里が口を開いた。

「西住どの、雁淵つてもしかして…」

「あ、うん。紹介するね！こちらは雁淵ひかりさん。お姉さんがプラウダの3代前の隊長で私のお姉ちゃんのライバルだったの。」

「雁淵孝美さんか：懐かしいな。」

みほが説明し葵は過去に思いを馳せた。佐世保からやってきた真面目な姉とたまに訪ねてきた妹、葵もよく面倒見をしていたものだった。

「やはりそうでしたか!!」

「ゆかりん、知ってるの？」

「はいっ!!雁淵孝美さんですね！プラウダの元隊長で第61回戦車道高校生全国大会では西住どののお姉さん、まほさんと一対一の決闘を演じたんですよ！」

嬉々として握りこぶしを作つて答える優花里。余程興奮した記憶だつたのか目の輝きがいつもの数倍増しであつた。
「お姉さんの孝美さんももともと西住流の門下生で俺もよく知つてゐる。とても真面目で、強い少女だつた。」

「えつ？西住流なのにプラウダに進学されたんですか？」

「はい！お姉ちゃんはまほさんと公式戦で闘うのが夢だつたんです。だから黒森峰に進学したらそれが叶えられないって。」

「私のお母さんともよく話し合つて決めたの。一応破門扱いだけど、

『より強い相手に挑むのも西住流のひとつ』だつて。』

葵の過去への言葉に今度は華が疑問を口にした。続けざまにひかりが口を開いて姉の想いを語る。その瞳は先ほどの優花里以上に輝きみほは自らの姉のライバル誕生の瞬間を思い出していた。

「何だかみぽりんと似てるね。姉妹エースだなんて。」

「え、エースなんて：私はお姉ちゃんに比べたら才能も、実力も…」
沙織の正直な意見に沈んで返すひかり。地元の町では戦車道トップクラスの選手としてもてはやされ、多くの人の期待を背負う姉と比べて自分はどうだろうか。サンダースに入学こそしたもののはまだまだヒヨッコでとてもエースなんて言えない。

「そんなことないよ。」

しかしひかりの前に立つみほは静かに問いかける。
「ひかりさん、おぼえてるかな？2人でお姉ちゃん達の組み手を見てたときのこと…」

秋の夕陽が照りつける中、遠くに見える砲煙、幼い2人が双眼鏡に見たのは白旗の上がった2輜の重戦車ティーガーI。結果は相討ちであった。

『お姉ちゃん達すごいなあ…』

『うんうん!!でも孝美お姉ちゃんの方が強いよ！』

みほの称賛に返しつつ自らの姉を持ち上げるひかり。すぐにみほは反発した。

『え～違うよ。私のお姉ちゃんの方が強い!!』

『いーや!!孝美お姉ちゃんが一番なの!!』

2人とも全く譲らず平行線だつた。そんなやり取りを少し若い葵と菊代、そして彼らよりも一段高い所から演習を見据えていた西住しほ達が微笑ましげに見ていたのだつた。

「あのときの譲らない顔、お姉さんそつくりだつたよ。」

「う、うう…」

昔の記憶を呼び起こすみほの言葉に少し恥ずかしくなつたひかりは顔を赤らめて少しうつむいた。

「ひかりさんはすぐ負けず嫌いで頑張り屋だつた。頑張つてその後私とⅡ号戦車で競争したときも勝てたじやない。」

ひかりの反応を気にしつつみほは続けた。自分が大洗で手に入れたことかけがえのないものがきっとひかりの中にもあるはずだと。「私もそうだつたように、ひかりさんにはひかりさんの。孝美さんは孝美さんの戦車道がきつとあるよ。」

「私の…戦車道…。」

「西住隊長…良いこと言うねえ!!」

ひかりへの言葉は彼女だけでなく、静かに聞いていた橋下団長にまで何かの影響を与えたようだ。

「よーしてめえら!! 今度サンダースの試合に応援出張するぞ!」

「「おおーーーー!」」

大洗応援団の士気は最高潮に高まつていく。
その時だつた。

「あら、サンダースのアリサさんもいらっしゃいましたか。」

そんな声が突如一同へと投げ掛けられた。見てみるとサンダースと相対していた大洗の右側から3人の人物が歩いてきた。赤いパンツアージャケットを身に纏つた本日の対戦相手、聖クロリアーナ女学院の戦車隊長オレンジペコと副隊長ルクリリ、ローズヒップの3人である。

その少し向こうにイギリス製ジープが停まっており、どうやら誰もがみほとひかりの話に集中しており気がつかなかつた様だ。

すぐにアリサはペコに向き直り両手を制服上着のポケットに入れながら返す。

「ええ、ご無沙汰してるわ。抽選会では会えなかつたから、カルドロン（リボンの武者）以来かしらね。」

「最近盾無とも疎遠なんですがしづかさんと鈴さんはお元気ですか？」

「ついいこないだも一緒に戦線組んだわ。あの子達といふととても良い経験になるから…。」

昨年より親交を深めている盾無高校のメンバーについて喋るとしばしの沈黙が起こつた。アリサとペコはお互から決して目をそらすことなくしばらく見つめあう。その間には目には見えない何かが交錯しているようであつた。そして数分が経過した頃にペコが口を開いた。

「冬の大会で相まみえることを楽しみにしてますね。」

「お互いにねえ。」

そう言うとアリサはみほ達大洗のメンバーにひかりを伴い会釀してジープへと戻る。ほどなく彼女達は観覧席の設置された場所へと向かつて走り去つていくのだつた。

「西住さんごきげんよう。」

「オレンジペコさん、今日はよろしくお願ひいたします。」

アリサ達の去つた後、あらためてペコはみほの前に立ち握手を求める。みほもそれに答えて自らの右手でペコの差し出した右手を掴んだ。

「センチネルに38t、なかなか手強そうな新メンバーを揃えられましたね。」

大洗のガレージに並ぶ戦車達を見てオレンジペコは発言する。1年少し前、大洗との初対戦となつた練習試合の時は5対5であつた。今回はその倍かつ多種多様な車輛入り乱れた乱戦となることを予感させる。一同に緊張が走つた。

「でも、言つておくわ。」

そんな中、ペコの後ろに控えていた副隊長ルクリリが前に出てきて宣言する。

「私たち聖グロリアーナの前には重戦車でも持つてこない限りあなた

方に勝ちは掴めない！」

緊張をほぐし自分の士気を鼓舞するための強気な発言にローズヒップが乗つかる。

「そのと一りですわ！私達の連携戦術にかかればあなたの方の相手などお茶の子さいさい、そちらの豆鉄砲など屁の突つ張りというものですわ！」

そう言うと突然彼女は何やら珍妙な躍りを始めた。内容はなぜか牛丼の良さを話してゐる様であるが実に要領を得ないものだ。と、そこに食いついてくる人1名。

「おうおうおう!!黙つて聴いてりやあ好き放題言いやがつて！あたしら大洗を舐めんじやあねえ!!」

耐えかねて声をあらげるはレオポンチームの新入生柳原まろん。パンツアージャケットではなくトレードマークの法被を翻しローズヒップの前に飛び出してきた。

「あらあら、ずいぶん粗野な物言いですこと。」

右手を口の前で蓋する様に揃えて返すローズヒップ。その態度が更にまろんを煽つた。

「そいつをそつくりお返しするつてんでい!!あとなんかむかつ腹のたつ声いやがつて!!」

「なつ!?聞き捨てなりませんわ!!あなたこそ他人の声をとやかく言える美声でして?」

正面からの睨み合いに発展。2人の間に先ほどのペコとアリサ以上の火花が散る。

「何をう!!やるかあ！」

「売られた喧嘩は買つて差し上げますわ！」

一触即発の事態に両陣営から2名が動いた。

「ローズヒップさん、お下品ですよ。」

「あら、シツツレー致しましたでござりますですわ！」

オレンジペコが少し困ったような顔で諫めると振り向いたローズヒップが敬礼して返す。

「まろんちゃん、喧嘩はあかんでえ。もしも手え出したら強制漫才の

刑執行やで。」

「なつ!!それとこれとは話が別でい!!」

一方でこちらは篠真厘。まろんを後ろから羽交い締めするように抱えてうむも言わさぬままに後ろにつれていく。

「さすが聖グロ、言ってくれるものだな。」

そう言つて大洗陣営から聖グロの三人に向かつて一步出てきた人物がいた。

「しかしだ、こんな格言を知つてゐるか?『一寸の虫にも5分の魂』。大洗の副隊長エルヴィンがトレードマークの帽子のツバを指先で摘まみながら返す。そしてここに後輩の武藏とシャルルが続いた。『蟻の穴から堤も崩れる』とも言います。」

「ここは『窮鼠猫を噛む』ですね。」

「「「「それだつ!!」」」

シャルルの答えにエルヴィン以外の歴女5人が指差しで応える。エルヴィンはツバを摘まんでいた指を離してペコに向かつて口を開いた。

「ま、お互に油断せずに戦い抜くとしましよう。」

その姿にペコは素直に思つたことを返した。

「…流石にロンメル將軍の渾名は伊達ではありませんね。」

「お褒めにあずかり恐縮です。聖グロの女王陛下。」

恭しくエルヴィンが頭を下げて挨拶したところでオレンジペコはにつっこりと笑つた。

「では私達はこれで：ルクリリさん、ローズヒップさん、参りましょう。」

『大洗女子学園対聖グロリアーナ女学院、試合開始!!』
「よろしくお願ひします!』

ついに大洗対聖グロの火蓋が切つて落とされた。

「ではまず作戦通りの編成で各自動いてください。」

早速みほから指示が飛ぶ。今回のフィールドはヨーロッパのフランスやスペインの農村を思わせるものとなっている。生け垣が多く背丈の低い家並みの並ぶ街が東側に存在し、そこから北には池を配して向こう側に森林が中央部から南へと広がる。聖グロはまずここからスタートする。一方の大洗は反対側の南西からスタート、こちらは草原地帯で北側には池に繋がる川が流れおりその向こうには荒れ地となっている。一応その最北部には戦車も登れる岩山があつた。

「第一部隊は予定通りアヒルさん、ベンギンさん、コブラさんの偵察機動部隊を編成。ウサギさんとカモさんはフラッグであるカメさんの護衛、残る私達あんこう、カバさん、アリクイさん、レオポンさんは二段目として行動します。」

そこまで指示を出してみほは一旦息を吸うと力をこめて作戦名を言いはなつた。

「三段構えの部隊編成、串おでん作戦です!!」

今回の聖グロとの戦いに際して大洗は従来型の行進間射撃による浸透突破戦術で來ると予測していた。知波単と同様の伝統に加えO B会による影響力が考えられるからだ。そこで考えた戦法は一点集中による敵陣突破作戦である。まずは自隊を縦方向に並べて偵察を行う。敵の陣容はおそらくクルセイダー機動部隊と本隊の二段構え。そこで偵察隊はクルセイダーを発見次第集結し機動部隊として行動。機動部隊同士の戦いを行い釘付けしつつ火力を結集した第2第3陣で敵本隊に一撃離脱戦法を敢行する作戦となつた。

ここで重要なのは前衛を務める偵察機動部隊である。彼女たちはクルセイダー隊を引き付けるのが大前提となるのだ。これを突破して敵本隊までの道を切り開かねばならない。

「必ずやり遂げます！根性で切り開きます！」

今回機動部隊を指揮することになつた磯辺典子の頼もしい宣言が出たことで作戦が決定された。また本隊を二段構えにすることと高火力を中段に集中することで一気にダメージを与えることを目的

としていた。聖グロの主力車輛マチルダIIが2ポンド砲という比較的非力な火力であることも作戦を後押しした。これが同じく集団戦法を得意とする黒森峰などであれば2ポンド砲の比ではない圧倒的火力の集中砲火を浴びて瞬殺されるだろう。練習試合でIII突が撃破されたのは比較的至近距離から側面を撃ち抜かれたためである。例えは史実のアフリカ戦線ではIII号戦車を2ポンド砲で撃破するためには500メートル以上接近しなければ正面撃破はかなり難しいと記録されている。

さらに余談であるが2ポンド砲では榴弾を発射できないため『歩兵戦車』でありながら歩兵を支援するための榴弾が使えない』という事実にドイツ軍のロンメル将軍は「英軍のマークIIは『歩兵戦車』と呼ばれているのに、敵歩兵に撃つべき榴弾が使えないのは何故なのだ?」とコメントして興味深いと共に理解に苦しむと語ったという。

「動き出しましたな!」

こちらは観客席、ここではサンダースのアリサと同じく大洗の試合を見物すべく知波单学園の代表として隊長西絹代自らが腕を組んで陣取っていた。

「はい、どちらもまずは偵察合戦にかかるようですね。」

そんな西の言葉に返す人物がいた。その姿は青みがかつた西に劣らぬ長髪に赤いスカーフの映える白を基調としたシャツに水色のスカートを組み合わせたセーラー服を着ており、さらにその上からス

カーフ以上に鮮やかな赤いショールを羽織っていた。

「万里小路殿、同じイギリス車輦を扱う身としてどうですか？」

西と一緒にいるのは万里小路楓、京都府は舞鶴港を母校とする学園艦秀麗あおば高校の戦車隊長である。西にとつてどこか気心知れた様な声で彼女は返す。

「そうですねえ…」

少し頬に右手をあてて考えるとにつこりとした笑顔で西の予想とは大きく違った言葉を返した。

「やはりバレンタインよりもマチルダの方が可愛いですかね？」

「あ：いえ、そう言うことではなく…」

「日本のチハもこじんまりとして風情がありますねえ。」

「はあ…」

なんとも的を外した発言。これこそが秀麗あおば隊長の特徴だ。日本三大財閥と言われる『万里小路財団』『伊集院グループ』『波乱財閥』。そのひとつ万里小路財団が運営している私立学校が秀麗あおば高校である。楓はそこの箱入り娘なのだがなんとものんびりしており世間と少しズレてしまっているのだ。

「いつかは私も聖グロでお茶を頂いてみたいですね。」

輝くその笑顔に西はもはや何も言うまいと決断し試合を映す大画面へと視線を向けるのであった。

「ローズヒップさん、そちらはいかがですか？」

一方こちらは進撃中の聖グロ戦車隊。オレンジペコの乗るブラックプリンスをフラッグとして中央に配置。その前方にはルクリリが乗るチャーチル、左右を4輜のマチルダIIが縦並び2輜で進む。

『こちら別動隊、滯りなく岩山を迂回しましたでござります!!』

別動隊のローズヒップからは予定通り北側を通過しているとの報告が入ってきた。戦車としては驚くべきスピードである。

「流石に俊足ですね。では接敵に注意しつつ四のクルセイダー隊の報告を待つてください。」

『かしこまりましたですわ!』

そう言いつつ手元の地図にペンで現状を書き込む。戦場中央に向かう自分達本隊に既に中央に差し掛かりつつある2輜のクルセイダー隊。そして北側を高速で進むローズヒップ部隊。

「今日はいかに敵をこちらに引き付けるかが大事です。」

こちらが集団戦法の浸透突破戦術で来ると読んでいるであろう大洗の裏をかきつつあつた。

「第一の狙いはみほさんです。決して忘れてはいけませんよ。」

そう言うとペコは手元の紅茶のカップに口をつけたのだった。

聖グロにとつて大洗は敗北こそ喫していらないもののどこよりも警戒している相手だつた。昨年の鍋物選抜大会（戦車道大作戦リゼロコラボイベントより）ではついに引き分けとなり次の戦いは更に油断ならないとまことしやかに話されていた。そして四強最後の砦を守るべく出された結論が今回ペコ達の立てた戦略であるが…。

「大洗のドクトリン…みほさんこそがその中心。ならばフラツグよりもまず攻め落とさなければなりません。」

今一度それを確認したペコは空になつたカップを通信手に渡したのだった。

今”黒き皇子”は大洗へと向かいその巨体を進めるのだった…。

絶体絶命・恐怖のブラツクプリンスです！

「ふむ…」

その日、西住まほはニードーザクセン大学のカフェにて日本から届けられた旭日戦車道新聞を開いていた。

「まほ、おはよう。」

そんな彼女に声をかけつつテーブルにつくチームメイトの姿が。身の丈はまほと同じくらいで焦げ茶色に近いような茶髪に2つのテールを作つて何処と無く軍服とも思えそうなグレーのファッショングリーンに身を包んでいる。

「おはよう、トゥルーデ。」

すっかり馴染みとなつた愛称で彼女の名を呼ぶまほ。彼女の名はトゥルーデこと『ゲルトルート・バルクホルン』ドイツで名の通る戦車道選手である。ちなみにまほと友人になつたきっかけはトゥルーデいわく『友人の声に似てるから』だそうだ。

「随分と真剣に読んでいるが、何の新聞だ？」

「日本から届いた代物だ。私の妹が載っているものでね。」

そのページを見せながら説明する。トゥルーデは少し身を乗り出して読んで見せる。

『だいせんじよしとせいグロリアーナのしあいはいんねんのたいせんかーど…』

かろうじて読めるようだが『おおあらい』とは読めないらしい。まほは指で指し示しながら訂正する。

「違う、大洗女子と聖グロリアーナの試合は因縁の対戦カードだ。」

「おおあらい…だいせんではないのだな。新聞のトップを飾ると言うことはどちらも有名校なのだろうがなぜ因縁があるのだ？」

「大洗は昨年の夏季戦車道大会優勝校、グロリアーナは日本四強校のひとつで昨年同大会でベスト4だ。これまで4度激突しているが大洗はまだ勝つたことがない。しかしだ…3度目の闘いでついに大洗とグロリアーナは引き分けた。」

大洗女子主催で行われた大洗、聖グロ、プラウダ、黒森峰、知波单、

アンツイオ、大学チーム、そして飛び入り参加のリゼロチームが激突した冬季推し鍋選抜大会『推し鍋杯』（ガールズ&パンツァー！戦車道大作戦）でんこうチームと聖グロのチャーチルが相討ちで決勝が幕を閉じた。エキシビジョンの意味合いが強い戦いだつたが大洗の実力を聖グロがあらためて感じた一戦だつた。

「そして昨年私も参加した大洗における枢軸対連合で戦つたオールスター戦もIV号とチャーチルは引き分けた。」

こちらは同時期にまほが留学する直前に急遽開催されたスペシャルマッチでリゼロチームを除く推し鍋杯参加校メンバーにサンダースと継続、飛び入り参加のドン底チームとさすらいの革命家チームを加えた非公式試合だつた。ここでも各チーム様々な戦法やイベント戦も盛り込んでの白熱戦を展開しているが大洗のあんこうチームはチャーチルと引き分けに終わつた。

「つまりまほの妹がいる大洗にとつては越えねばならぬ相手であり、グロリアーナにとつても敗けは許されない闘いなのか。」

大洗にしてみれば白星にあと一步及ばぬ展開、聖グロにとつては幾度も発生した危機的な展開。関係者は勿論多くの注目が集まるのは当然であつた。

「そういうことだな。それに…」

新聞をたたみこれまでにない真剣な眼差しをトゥルーデに向けるまほは言い放つた。

「妹の活躍は見逃したく無いのだ。」

「…その気持ちあながち分からんでもないな。」

そう言つて持つてきたコーヒーハーを一口啜るトゥルーデ。まほも手元のコーヒーハーと視線を落とす。

そう、この2人に共通するもの…それは『シスコン』である（笑）。

ところ変わつて数時間前の日本…（時差の関係上です）

「今日は前とうつてかわって起伏と障害物の多い場所ですね。」

観戦用の大形モニターの画面を見ながらポツリと漏らしたのは大洗の教官補佐筑波さつきである。今回も同じく関係者としてテーブル席に太田、駿河、立花、そして風見志郎と共に着席している。

「聖グロにとつて有利と言えるな。歩兵戦車は脚回りが強い。」

整備士として参加している立花の意見。歩兵戦車最大の特徴を捉えた一言だ。

「常道としては大洗は地形を利用したゲリラ戦法か隙をついての一点集中攻撃になるだろうな。」

「聖グロと戦うのも5度目となると流石にそろそろ白星欲しいですよねえ。」

風見と駿河も続いて発言。自分達の預かるのかわいい生徒達の活躍を期待している感満載の一言だった。

「こちらオレンジペコ、ローズヒップさん、そちらはいかがですか？」
『こちらローズヒップですわ!! 感度良好!! 1号車2号車ともに異常なく進撃中!!』

いつになく気合いを満載した弾む声色で返すローズヒップ。緊張感をほぐすという点ではありがたいと思いながらオレンジペコは返答する。

「では予定通りにお願いします。おそらく前衛クルセイダー隊がそろそろ接敵の頃合いです。」

『りよーかいでござりますわ!』
「キヤンディーさん、そちらはいかがですか?」

続いて自分達の前方に展開している偵察隊と連絡をとる。

『前衛クルセイダー隊、いまだ接敵なし。』

「無理せずお願ひします。撃破ではなく誘いこみに徹してください。」
『了解!!』

今のところ作戦は予定通りに進められている。ペコは用意された紅茶を一口啜り先日行つた主要メンバーとのブリーフィングを思い

だし今一度作戦を確認していた。

「大洗はこれまでの戦いを鑑みるにこちらの陣を破綻させフラツグを孤立させる戦術に出てくる公算が高いと言えるでしょう。」

聖グロリアーナ女学院戦車道ブリーフィングルームではファイアードワークを参考にしたマップが広げられチームの主だつたメンバーによる会議が行われていた。

「ブラックプリンスは防御が優れているのでよほど三突やポルシェ・ティーガーの接近を許さない限りはおいそれとはやられることはない。しかし極力孤立してしまった場合は避けるべきである。」

室内的モニターにブラックプリンスのデータを映しつつ副隊長であるルクリリが大洗との戦いを思い出ししつつ進言する。それを待つていたかのようにオレンジペコが作戦を説明にかかりた。

「そこそこは浸透戦術と見せ掛けつつ…」

自陣を指揮棒で指し示しつつ戦車の駒を配置、先端でそれを少し動かしていく。

「ローズヒップさんがこの作戦の要です。僚機ともどもきちんと動けるかが重要となります。」

「かしこまりですわ!! 俊足なら負けませんことですのよ!」

相手が大洗とあつて俄然やる気満載なローズヒップであった。

「こちらペンギン、S8地点にてクルセイダー発見!!これより交戦にうつります!」

大洗女子の前衛隊、ペンギンさんチームがついに接敵となつた。
「椿ちゃん、撃つたら左へ回り込んで、難しいかもだけど雑木を盾にするの!!」

「まかせて!」

すっかりチームメイトを名前呼び出来るようになつたペンギンさんチームのメンバー達。場数も踏んで慣れを見せ始めた車長明日香澄の指示に操縦手野島椿が頼もしく返す。

「由岐ちゃん、初弾当てる気で頼むで。」

「もちろん!当ててくれよ!」

装填手の篠真厘と砲手の鞍馬由岐のコンビも気合いを入れる。

「目標クルセイダー、撃て!!」

ペンギンさんチームがクルセイダーとの交戦に入つた報告を受けたみほはIV号の車長席で考えを巡らせていた。

「前衛隊のペンギンさんが敵に遭遇……これが警戒線だとするともう1輛か2輛はいっていいはず……」

手元の地図に書き込みながらみほは敵の動きを予想する。優花里が振り返つて自分の考えを口にした。

「敵は最低限の偵察で防備を固めた浸透戦術で來るのでしようか?」「エキシビジョンの時はもつと機動戦を開いていたから今回もそう來ると思つたんだけど……でも挟み込むには大回りで迂回しないところないから時間もかかるし……」

『こちらアヒル!!敵の本隊と思われる集団を確認!!』
みほの思考は典子からの報告で中断された。

「相手は……5輛か……チャーチルを先頭にマチルダ4輛が並走してゐる。」

森林地帯の中央より敵寄りの地点、隆起した場所から即席の樹木による迷彩を施した八九式の後部ハッチを開いてリーダーの磯辺典子は双眼鏡を覗く。相手の命中距離ではないが例えマチルダの2ポンド砲でも八九式には命取りなのだ。

「フラッグが見えないな…」

木々の間に屹立してゐるはずのフラッグが見えないことに違和感をおぼえる。これまでのようになに隊長車輛がフラッグ担当ではないということなのかと思いながら双眼鏡をはずした直後、典子の目に驚くべきものが映つた。

「えつ…？」

慌ててチャーチルの後方に再び双眼鏡を向ける。それは決して見間違いではなかつた。

「な、なんだ!?あの戦車は!!」

遠目にもそれは威圧感を感じざるを得ない代物だつた。チャーチルより一回り大きく主砲も長い、ゆつくりとした動きは逆に自らの巨さをアピールするかの様であつた。

「こ、こちらアヒル!!敵のフラッグ車発見!!チャーチルよりも大きな戦車がフラッグをつけています!!」

「チャーチルより巨大?」

典子から報告を受けたみほは驚いた。

『チャーチルに似てますが明らかに巨大です。主砲も長いし大きい! 17ポンドクラスです!』

再度の報告が沙織から伝えられみほは右脇にいる優花里と顔を見合わせた。

「まさか…」

「ブラックプリンス?」

2人の予想は一致を見た。

「ブラックプリンス?」

「イギリス陸軍が開発させた最強の歩兵戦車です!!別名は『スーパー・チャーチル』。速力こそ時速20キロ以下ですが正面装甲は150ミ

リ!!他の箇所もセンチユリオン以上に頑丈ですからレオポンでもかなり接近しないと簡単には破れません。それに主砲にはあのファイヤーフライやセンチユリオンと同じ17ポンド砲を搭載します。」

優花里の説明で車内に緊張が走った。今まで苦戦を強いられ撃破を逃し続けてきたチャーチル、まほとのコンビネーションで初めて撃破でき、旧ソ連の重戦車オブイエークト279の130ミリ榴弾砲でさえも仕留め損ねたセンチユリオン以上に厄介な相手と大洗は今まさに対峙しようとしているのだ。

「全車停止!!フラッグのカメさん他はこちらと合流、偵察隊も撤退してください!」

ともかく正面からぶち当たるのは危険すぎる。ここは作戦を変更すべきと判断したみほは撤退を決めた。

『こちらアヒル、後退します。』

『こちらペンギン、クルセイダーは振りきれそうにありません!!交戦し隙を狙つての離脱を狙います!』

『こちらコブラ、ペンギンの応援に向かいます。』

「ペンギンさん、コブラさん、無理せずに自分の安全確保をお願いします。撤退をする際の予定通り北上して合流をお願いします。」

前衛偵察隊からの報告を受けて次の対応を思考する。お互い急げば10分ほどで後衛とは合流できるはずだ。ひとまず合流して安全を確保した上で次の手を考えることとした。

「見えた、後衛部隊です。」

砲手の早川建子の言葉にねこにやーとともにがー、そして装填手として臨時で組んでいる高屋のりこは息をつく。相手はまだこちらの陣営に入り込んでいないことは分かつているが味方に合流できて皆ホツとしたのだ。

「これよりカメさんを全車輛で護衛します。」

みほの号令一下カメさんチームのヘッツァーを中心に左にレオポン

ン、ウサギ、右にカモ、カバが配置されてあんこうが先頭、アリクイが殿となつて後方へ向かう進路をとつた。まだ敵の主隊が到着するには余裕がある。森林地帯から抜け出して次なる手にかかる腹積もりであつた。

「にしても驚きましたね、まさかブラックプリンスを持ち込んでくるとは。」

「聖グロは徹底的にこちらを潰しにかかるうとしているのだな。」

カメさんチームの武蔵とシャルルが発言する。とくにシャルルはフランスの將軍を名乗るソウルネームの持ち主だけあつてヨーロッパ系の兵器に詳しい。とにかく今は逃げの一手で改めて仕掛けようと皆考えていた。

そして大洗一同が森を抜けて北上にかかりつたときだつた。

ズドンッ！

「!? 撃たれた!!」

突如先頭を行くIV号の前で地面が弾けた。

「二時方向より敵襲!! 車輛2!!」

すぐさま梓が敵を確認する。そして彼女にはその戦車にどこかで見覚えがあつた。

「なんなの！あのスピードは!!」

隊列を組む大洗の前に姿を現したのは戦車暗色塗装を施されクルセイダー以上に高速を發揮する戦車であつた。エルヴィンが敵の正体を見抜き叫ぶ。

「なんてことだ!!あれは巡航戦車クロムウェル!! クルセイダーどころではない高速戦車だ！」

「おっほほほほ!! 真打ち参上ですわ！」

クロムウェル1号車で相変わらず紅茶のカップを揺らしながら高らかに宣言するローズヒップ。彼女に与えられたのはブラックプリンスと同じく新たに用意された巡航戦車クロムウェルであつた。

巡航戦車クロムウェル

全長6・35メーター

重量約28トン

正面装甲砲塔76・5ミリ

車体65ミリ

最高時速65キロ

主砲オードナンスQF75ミリ40口径砲

第二次大戦中最速とも称される巡航戦車。クルセイダーの次代を担つた戦車でその最大の特徴は英空軍のスピットファイヤ戦闘機に使用されていたマーリンエンジンをもとにしたミーティアエンジン。クルセイダーを20キロも上回るスピードを実現。史実ではヴィレル・ボカージュの戦いでミハイル・ヴィットマン指揮するティーガー重戦車と砲火を交えたが逆にたつた1両の活躍で15両を編成された一個大隊が壊滅的打撃を被るなどで歴史に語られる。

「まさかこんなものまで繰り出して来るなんて！」

驚くみほを嘲笑う様に大洗の集団を囲むように動き回る2両のクロムウェル。

「すばしつこい！」

「落ち着いて、しっかりと狙ってください！」

森林を抜け出したところで大洗7両は2両のクロムウェルに翻弄されてしまっていた。

「こんな密集していては煙幕で脱出も出来ない。」

戦車の多重衝突など考えたくもない。ポルシェティーガーとぶつかつたらそれこそ一発アウトであり動けなくなつてしまつたら即座にクロムウェルに撃たれるだろう。

「とにかく落ち着け!!」

浮き足立ちかけたメンバーを落ち着けようとエルヴィンが檄を飛ばす。

「しまった！クルセイダーも!!」

みほは別方向からクロムウェルに加わるべく大洗の前衛隊をかわしたクルセイダーが合流してきたのを確認した。もはや一刻の猶予も無い。

「麻子さん!!次にクロムウェルが右から来たタイミングで一気に前進してください！」

「ぶつける気か？」

「砲身は右に向けてください。うまくいけば左側の傾斜で転倒させられるかもしません。」

ここを突破しなければかなりますい。敵の本隊も迫つてきている中護衛がクロムウェルとクルセイダーに削られる訳にはいかない。「なんとしてもフラッグとチームを守ります!!」

強く宣言し自らの前方に視線を向けるみほ。軽い傾斜となつていることを確認した彼女は僚機へと反撃の指示を送る。

「澤さん、M3でクロムウェルをIV号の前方へ回るように牽制してください！」

「やつてみます！」

みほの意図を汲んだ梓の返答。彼女たちも伊達に昨年の激戦を潜り抜けとはいなかつた。

「おりやあ！」

「ここだつ!!

ダンツダダダダツドンツ

副砲手を務める大野あやが副砲と機銃で、主砲担当の山郷あゆみがクロムウェルを狙う。敵はおよそ戦車とは思えぬ機動音をさせて回り込んできた。

「下手な鉄砲、数撃つても当たりませんですわあ！」

「皆行くぞ！」

ローズヒップの余裕発言に合わせるようなタイミングで麻子の言葉が重なつた。

「なつ!?

思いがけないIV号の急発進にローズヒップとクロムウェル1号車のメンバーは驚愕した。

ガツシヤアアアンツ

「あらつ? あららららら?」

「てえ!!」

IV号の体当たりを受けて傾斜地へとバランスを崩したクロムウェル、スピードに乗っていたことも相まって左の車輪が浮き上がり後方からそれを見ていたカメさんチームは見逃しはしなかつた!

ズドンツ

「ノオーーー!!」

続いて叩きつけられた衝撃に叫び声を上げるローズヒップ。十兵衛の放った一撃が浮き上がった履帶部分を直撃しさらに勢いをつけて右へつんのめつた。

「華さん!!」

「はいっ!!」

ゆっくり狙う時間はない、つんのめつたと同時に動かし始めた主砲塔を急ぎ左へ旋回。華はスコープに飛び込んできた一瞬を見逃さなかつた。

「発射!!」

ドオンツ

IV号の砲弾は至近距離からローズヒップのクロムウェルを直撃し横へのつんのめりは勢いを増して車輌を回転させて白旗を上げた。

『聖グロリアーナ女学院、巡航戦車クロムウェル、行動不能!』

「やられましたわああ!!」

ジャッジの言葉と共に頭を抱えたローズヒップがハツチを開いて飛び出す。その直後だつた。

ズドオオオオンツ

「きやあつ?! なになに!!」

突如IV号を襲う衝撃、沙織は思わず叫んでしまつた。

『大洗女子学園、IV号行動不能!』

ハツチから身を乗り出して驚くみほの前にはためく白旗。自分達が抜け出てきた森に目を向けた時、彼女の目に映つたのは聖グロの切り札、ブラツクプリンスの姿であつた。

「作戦成功ですね。」

笑顔のオレンジペコの発言が聖グロの勝利宣言のように聴こえる。持ち前の歩兵戦車の強力な脚で不整地、森林地帯を突破し大洗がクルセイダーとクロムウェルに手こずつている間についに接近したブラツクプリンスが狙撃に入つた。可能ならばフラッグを狙うところだが他の車輛の陰にあるため撃破は難しくクロムウェルを撃破すべく突出したIV号が討ち取られたのだ。ペコはハツチから身を乗り出して戦果をその目に焼き付け言葉を発した。

「大洗女子にとつてみほさんは素晴らしい指揮官であるとともにアキレス腱なのです。」

大洗女子最大級の危機が発生したことをメンバーが確信した瞬間であつた。

激突!! 梓V.S オレンジペコです!

第64回戦車道高校生全国大会二回戦、大洗女子学園対聖グロリアーナは新隊長オレンジペコの指揮する聖グロの新兵器ブラックプリンス歩兵戦車によつて大洗隊長車輌の撃破という波乱の幕開けが演出されてしまった。

多くの観客詰めかける応援スペース脇、テーブルつきの席に陣取つている4人の少女がスクリーンへと食い入つてゐる。

「まさか大洗の隊長車輌をいきなり仕留めるとは。」

まず1人目は大洗と第一回戦で激突したゲルダム高校の黒部将美隊長だつた。今日は見学なのでパンツアージャケットではなく青と黄色が基調とされた制服である。

「クロムウェルにブラックプリンス、あれだけの車輌を揃えるあたり聖グロはそれだけ必死ということね。」

それに返すのはサンダースの隊長アリサだつた。腕を組み画面に表示されるIV号撃破の表示に目を向けて将美に続く。

「うちにの一ちゃん隊長も大洗は隊長車輌メンバーが一番厄介だと言つてましたね。これで大洗は万事休すでしようか?」

そして周囲に質問する3人目の人物、その声を聴いたアリサは少し顔をしかめてしまふ。初対面の人物相手には少々失礼かもしれないがアリサはその声に何か刺激されてしまうものがあつた。

グレーのふわふわロングヘアを太い三つ編みにした低身長寄りの少女。その服装は濃緑色の上着に赤いタートルネック、すなわちプラウダ高校の代物である。

「だとしたらわざわざ見に来たのに早くも勝負ありということですね。」

笑つて言つてのける彼女の名前はタチアナ・ヤコブレフ。プラウダ高校の新たな留学生、つまりクラーラの後輩にあたる。高身長だつたクラーラとは正反対に近く可愛らしさがあるが射撃の腕前は現隊長

の二ーナ（愛称に一ちゃん隊長）いわく『ノンナさんに迫るかもれない』と言われている。ちなみに彼女の従姉妹も同じく低身長でロシアの『白百合』という通り名で通じる戦車道選手だそうな。

そして残るはサンダース新入生の雁淵ひかりである。

「アリサ隊長…どうなんでしょうか？」

アリサの隣に座るひかりが不安げにアリサへと質問する。姉の孝美いわく『天性のものがある』とも評されたみほが撃破されてしまつたことは彼女にとつても衝撃的だつた。彼女と共に苦難を乗り越えてきた大洗のメンバーの受けた衝撃はそれ以上であろう。だからこそ聖グロとしては大洗攻略のためになんとしてもみほは序盤で仕留めておきたかったのだ。

「私はまだだと思うわ。とくに…」

ひかりにそう返しながらアリサは大画面に映るIV号の表示から別の1輛へと視線を送る。

「IV号には及ばないけど、副隊長の乗るラビットチームもなかなかのくせ者よ。」

「その通りですわ。」

アリサの意見に同調するかのように後ろから声をかける人物がいた4人が振り向くとそこには…

「あら、エクレールじゃないの。」

アリサが名を呼んだ相手はマジノ女学院の隊長エクレールであつた。彼女も大洗の試合を見学に来ていたらしい。彼女達マジノ女学院は第二回戦でプラウダに敗北して今大会はベスト8で終えた。つまり…

「マジノ女学院の隊長さんですね。先日はどうも。」

「あなたはプラウダのスターインの車長だつたかしら。」

彼女とタチアナは面識があつたのだ。

「まさか雪の煙幕でこちらを攪乱してくるとは思いませんでした。」

「長所も時に強敵になりうることがある。雪がつねに自分達の味方だと思わないことですね。」

雪原というプラウダにとつて有利な状況でエクレール達は知恵を

しぼつて戦いを挑んだが力及ばずスターイン重戦車にフラツグを撃破されたのだ。

「エクレール、君はまだ大洗が負けたとは思わんようだな。」

いつたん話が止まつたタイミングで将美が問う。

「M3チームの去年の戦いぶりを私達は身を持つて体験しましたの。」

去年の大会前の練習試合、大洗対マジノ戦後半で孤立したIV号とエクレールとの一騎討ちの間、残りの2チームはM3、38Tを相手にしていた。後にみほから教えられたがあのときは彼女が指示も出せず、2チームで作戦を立案し決行したこと。しかもそれを牽引したのは副隊長の梓だつたそうだ。初の聖グロ戦では素人も同然に逃げ出したチームとはとても思えず、その後の全国大会や北海道でも確実に実力を上げて いることが伺えた。

「あのウサギチームも絶対に油断なりませんわ。」

エクレールは一同に確信を持つて言つたのだった。

「さすがオレンジペコさん、見事に大洗の隊長を仕留めましたね。」

そしてこちらは聖グロ側のサポーター席、今回の演出に一役買つたダージリンにそう言葉をかけるのはキリマンジアロ。西グロでブラックプリンスを扱つてきた経験が敬愛するダージリンに認められ見事にオレンジペコが使いこなしたことでかなり上機嫌であつた。

「大洗は今まで隊長車輌だけはどの試合でも最後まで生き残つてしまつたがこれで戦力・士気ともに半減といつたところですわね。」

静かに返すダージリンは一口紅茶をすすりキリマンジアロとは反対側に座る人物へと視線を向ける。その人物は両手を頭の上に組み背もたれに深く背中を預けていた。

「さすがブラックプリンス、17ポンド砲の音は聴いてて実に爽快だねえ！」

こちらの女性の手元にはテーブルに似合わぬ瓶コートラが置かれており髪は橙がかつた薄めの金髪ロングのストレートにてつべんに癖のあるアホ毛がトレードマークで深く青い瞳から外国人であることがわかる。白シャツ白ズボンに革ジャケットで赤いスカーフを首に巻いている。そしてとにかく周囲の目を引くのはそのバスト。ドンツという擬音が実際にしつくり来そうなボリュームである。一見するとサンダース関係のアメリカ人に思えるがどっこい、彼女はれつきとしたイギリス人である。

「ウイルマさん、今回のご協力改めてお礼を言わせていただきますわ。」

ダージリンの礼にウイルマと呼ばれた女性が右手を挙げて笑って返す。

「かつたいこと言いつこなしよダージリン。だいたいマチルダばっかり使つて勝てるほど甘い相手ばつかでも無いでしょ。ほんとにあの学校の派閥は見えてないわねえ。」

なかなか辛辣な私見を述べる彼女はウイルマ・ビショップ。英國系のダージリンの大学に本場イギリスからやつて来た留学生である。イギリスの高校戦車道ではエース、というよりは纏め役として活躍してきた選手である。彼女のいたチームは歐州国際交流戦でも高い成績を修めておりその筋では一目置かれている人物でもあつた。

余談であるが高校戦車道ではプラウダ以外サンダースとマジノ、黒森峰にも留学生は来ていたりする。

卒業後も何かと後輩を気遣うダージリンはある時ウイルマ自身の興味本意もあつて聖グロの練習を見学させたことがあつた。

「チャーチルは良いとしてもマチルダⅡとクルセイダーしかここには無いの？クロムウエルがただの置物なんて勿体無いじゃない！」

しかしそこで飛び出して来たのはダメ出しのオンパレードと言わんばかりの感想だった。

「伝統伝統と言い続けて勝てるなら子供でもできるわ。精神論で通る

世の中はとつこの昔の事だつて分からぬのかねえ。」

トドメの一撃とも言える言葉を飛び出させウイルマは愛用の帽子を目深に被る。この日同じく見学OG会のメンバー数名は何か言いたげだつたが相手が相手であるため誰も発言できなかつた。そもそもこの辛辣な意見を聞かせることが目的ではあつたのだが：

「後輩を優勝させたいなら見直すべきね。少なくとも私のいた学校ではこれは無いな。」

とにかくも実力持ちの第三者意見が予想以上の力を發揮したことダージリンの説得を後押ししてめでたく聖クロ戦車隊はクロムウエルとブラックプリンスを扱えることになつたのであつた。

「しかしほんとのところ、まだダージリンは勝てたとは思つてないんでしよう？」

少しいたずらつ氣のあるニヤリとした表情で聞いてきたウイルマにダージリンは正直に返す。

「…そうね。」

並べられた菓子からクッキーの小袋をひとつ、実にそれだけでも優雅な振る舞いと言えそうな所作を見せて手に取り続ける。

「確かにみほさんは大洗の中心です。ペコの考えた通り彼女の存在は大洗の原動力でありアキレス腱と言える。」

小袋を開きチョコクッキーを取り出してつまみ上げる。

「でも最後の最後まで勝負事とは分からぬもの。第二次大戦のヴィレル・ボカージュしかし、不利な状況で勝利してきた人達もいます。そして何より彼女たちと私たちはそれを自らの手で昨年証明したも同じなのですから。」

昨年の大会における大洗女子の奮戦と大学選抜チームとの北海道決戦。数は同数といえども言わば寄せ集めと言われても仕方ないよ

うな高校生連合チームの快挙がダージリンの言わんとする事実であつた。

「それに大洗の副隊長のチームは昨年我が校との練習試合で逃げ出して撃破されました。しかしその少し後、エクレールさん率いるマジノ女学院との戦いで逃げることなく、みほさんに頼らずに作戦を立てルノーを撃破する活躍も見せてます。」

先ほどのエクレール同様に実際に見学に行つた時の彼女達の成長ぶりを見たダージリンはかなりの実力を持つているのではと見抜きつつあつた。それは大会で確信へと変わる。

「さらにその後には黒森峰のエレファントを仕留め、ヤークトティーガーを刺し違えで撃破、ローズヒップとの一騎討ちでも彼女を撃破寸前に追い込んでいます。」

昨年決勝戦でのウサギさんチームの活躍もさることながら聖グロヘ潜入した際のM3グラント強奪事件（戦車道のススメ）での彼女達の戦いぶりには素直に感嘆したものだ。

「決して油断ならないと？」

一通り話をして2つに割つたクッキーを静かに咀嚼するのを待ち、しばらく黙つていたキリマンジアロが質問する。完全に口内からクッキーを消し去つたダージリンは両目をうつとりとさせながら静かに答えるのだった。

「このあとペコと澤さんの戦いぶり、じっくりと拝見させていただきますわ。」

そして手に取つたカップの紅茶へ静かに口つけるのだった。

（ああ…カントリーマアム…幸せ…）

先ほど口にした菓子の感想は己の中だけで述べながら…

あんこうチーム撃破、それは大洗陣営に衝撃を与えるには充分すぎた。

ともかくもこの事態を収集つけるべく一旦退くこととなりエルヴィンの号令一下総員が後退したが敵は追撃して来なかつたため立て続けの被害は免れることができた。。

「どうするべきか…」

コブラさんチームを除き一旦下がつて北側の山でエルヴィンと梓、2人の副隊長と各チームのリーダーが中心に集まり作戦を練る大洗陣営。しかしメンバーはいずれも暗く精彩を欠いていた。何せ序盤であんこうチームが離脱することなど前代未聞の事態だつたからだ。

「ここは敵の後方に回つて背後を突く作戦で。」

「いや、敵はおそらくこっちを一気に蹂躪にかかるだろう。残るもう1輛のクロムウェルとクルセイダーに周囲を警戒させて容易に背後はどらせないつもりでいるはずだ。」

武蔵の提案はすぐに力工サルによつて即却下された。厚い装甲による防御と行進間射撃に定評のある聖グロだ。生半可な策では思つぽである。

「なによりあのブラックプリンスはかなり始末に悪い。正面装甲なんて厚さ150ミリを超えている。我々のⅢ突やレオポンのアハトアハトでも後方か側面を余程接近しないと撃破は難しい。」

「それだけではありませんぞ。あの主砲はファイアフライやセンチユリオンと同じ17ポンド砲、かなりの高火力だにやー。」

エルヴィンの発言に続くねこにやーの言葉で一同に嫌な緊張が伝播していく中典子が声をあげた。

「では私たちが囮になつて相手を…」

「それもダメだ。相手は囮や分断作戦を警戒しているだろう。現に昨年の大洗エキシビジョンではふらふら作戦を警戒して足並み揃えて

IV号を追撃していた。』

ちよこまか動き回れる八九式や脚の速いセンチネルで囮となり撃乱するのも現実的ではない。アヒルさんチームは昨年の黒森峰戦で見事にやつてのけたがエキシビジョンでは聖グロ・プラウダ連合が集団戦法に徹したことでこれを封じている。

「相手を倒す方法があるとするならそれは奇策しかない。しかし相手はおそらく我々の先手を読んでいる。これまでとは違う戦法が必要だ。』

これまで考えられたような作戦では駄目であることを確認させられて全員が意氣消沈してしまう。

『私達…ここで終わっちゃうのかな…まだ2戦目で…皆まだまだこれからだよ…』

エルヴィンと同じく副隊長である梓は拳を握りしめて悔やんだ。自分達に憧れててくれた新入生達をもつと高みへ連れていくしかつたこと…みほから預かつたチームを導くことができなかつたこと…この場で副隊長でしながら無力である自分…

『西住隊長、ごめんなさい。』

両目を閉じて心の中でみほに謝る梓。その時だつた。

『皆も歌つてください！私が踊りますから！』

梓の脳裏に浮かぶのは昨年の準決勝プラウダ戦。教会へ追い詰められた大洗チームの士気を上げるべくみほが突然あんこう音頭を踊り始めたシーンであつた。

『そうだ…あの時私達はかなり追い詰められてた…でも…西住隊長は…』

決してみほは諦めなかつた。それがやがてあんこうチームへ、そしてメンバーに次々と伝播し逆転への原動力となつたのだ。

梓はみほが示してくれた道を忘れかけた自分を恥じ、覚悟を決め

た。右腕を大きく振り上げて…

意氣消沈する全員の耳に聴き慣れたあの歌が届いた。驚く一同が目を向けた先、そこには梓があのあんこう音頭を歌つて踊る姿があった。

「あ、梓、どうしたの？」

突如の奇行に驚くチームメイトの山郷あゆみに梓は返す。「きっと今こに西住隊長がいたらこうする！私は西住隊長の分も闘うつて決めたの！だから皆、力を貸して！」

そう言いながらも必死にあんこう音頭を踊る梓。彼女の言わんとしていることが周囲へと拡がっていく。やがてその隣にチームメイトの紗希が、優季が、あゆみが、あやが、桂里奈が加わる。

「私だつて副隊長であり先輩だ！皆行くぞ！」

「根性だ！踊つて踊つて逆転行くぞ！」

続いてエルヴィンと典子が煽りカバさん、アヒルさんが踊り出せば今回からの新メンバー、もう1人ののり子（アリクイさん臨時装填手）としゅり（レオポンさん臨時通信手）が加わる。

「風紀委員だからって手は抜きません！」

「僕たちも負けないにや！」

「おうおうおう！こはひとつ即席あんこう祭りでえい！」

ゴモ代、ねこにやーがチームメイトを引き連れ続ければレオポンからは柳原まろんが引っ張つて次々と参加する。

「あたしらのあんこう音頭、日本じやあ二番目さ！一番は誰かつて？
西住隊長達さ！」

「関西ノリ、よう見とくんやでえ！」

「いついかなる時も真剣勝負！それこそがサムライ！」

「てやんでえ！祭りだ祭りだあ！」

建子が、真凜が、十兵衛が、まろんが、一年生メンバーが負けじとばかりに大声あげて踊り歌い舞う。決してやけくそではない。これこそ彼女達の勝利への雄叫び、鬨（とき）の声に他ならなかつた。

「あんこう音頭いつくよ～！」

「よつしゃ！ここ一番だ！おめえら！お嬢ちゃんに負けるようじゃレ
スラー失格だ！」

『うっす!!!』

一方で観客席の応援スペースでも大洗応援団によるあんこう音頭が開始された。驚きは並んだメンバーの中央でまるでレスラー達を率いるように位置しているのがなんと教官の愛娘、羽村晴香だつたことだ。ご丁寧に応援団に用意してもらつた子供用の法被を羽織つて小さな身体を左へ右へ踊り舞う。

「それっ！それっ！そ連れい！！」

彼女の後ろに立つた橋下団長の掛け声も交えつつ晴香と応援団によるあんこう音頭も熱を上げていく。

「がんばれえ!!」

両腕を組んで左右に腰振り大声で応援する晴香、その姿はすかさず居合させた一文字隼人がカメラにおさめていくのだった。

「始まつたわね。」

テーブル席で戦況を見ていたダージリンは微笑み浮かべてそう言つた。

「何だあれ？急にひょうきんなこと始めたな！」

思ひがけないダンスの開始に興味津々なウイルマ。彼女は根からのイベント好きなのだ。いつしか左手の指で音頭に合わせたようにカタカタとリズムを取り始めた。

「ダージリン様…あれは…」

かたや同じテーブルにつくキリマンジアロは驚きの表情をダージリンへと向けると確信したと言わんばかりに彼女は返してきた。

「大洗の反撃の狼煙だわ。」

そう言いながら先ほどとは違う抹茶味のカントリーマアムをしつ

かりとダージリンは掴み取っていた。

「この作戦はどこかひとつ崩れでも失敗する可能性があります。しかし、現状で私達にこれ以上の作戦は用意できません。」

あんこう音頭を終えて各戦車へと帰還したメンバーに梓が伝える。「各自の役割をキチンと把握して、立ち回ることが求められる。これは今までに無い戦法だからな。」

続けてエルヴィンも闘志をみなぎらせて伝える。先ほどは梓の活躍でメンバーに士気を取り戻せたのだから今度は自分の番だと意気込んでいる様だ。

「ふつふつふつ、武士（もののふ）の血が騒ぐわ、南無八幡台菩薩。」「必ず敵を引っ張り混みます。レオポンは万全です！」

フラッグを務めるカメさんチームの武蔵は気合い充分に返し、レオポンの車長を務める今年からの新メンバー和住媛萌（わずみ・ひめ）も自信満々に返す。彼女はツチヤが操縦を担当するためリーダーではないが車長のポジションに就いている。整備スキルはツチヤと立花のおやつさんお墨付きも持つ期待の人物だ。

「皆踏ん張りどころだよ。なんとしても敵に一杯喰わせよう！」

ペングインさんチームでは車長の澄がメンバーに声をかける。車長としての姿は練習試合に第一回戦と場数を踏んでなかなかに様になりました。

りつつあつた。

「大丈夫、こんな言葉を知ってる？『劣勢と敗北は必ずしも繋がらない

⋮』

そこで声をあげる砲手の鞍馬由岐。スコープに顔をあてたまま誰かのような言葉を放つ。隣で装填を務める真凜が質問する。

「それ誰の言葉なん？」

「デューク・東郷、またの名をゴルゴ13。」

そう発言した彼女の顔がスコープから離れた。するといつの間にやらその眉毛部分にどこかで見たような着脱式の太眉が装着されており、車内で笑い声が響くのだつた。

「こちらコブラ、敵主力は現在森林地帯手前で待機中の模様。ブラツクプリンスを中心に警戒体制を敷いています。」

今回のためわざわざ森林迷彩へとカラーリングを変更したうえに即席の枝葉で擬装、パーソナルマークもカバーをかけて隠したコブラチームが危険を承知で敵情の偵察に努めていた。

車長席からこつそりと頭を出して双眼鏡を覗く赤城烈和が報告しつつ愛用の時計を確認する。既にIV号撃破から結構な時間が経とうとしていた。

「！」

双眼鏡の中で突如聖グロ陣営が動き始めた。クルセイダーとクロムウェルが先に立ち山岳地帯を目指す。

「動き始めました。」

『よし！コブラさんチーム、偵察は一旦終了だ。ただちに山岳地帯の東側へ向かってくれ。指定ポイントはV-1地点だ。』

『了解！春田！パンツァー・フォー!!』

烈和の指令に春田聖がエンジン全開で発進。少し回り込む様にしてポイントへと向かうコブラさんチーム。敵に見つからないための考えであり少々時間をかけてしまうが相手は歩兵戦車に合わせて進軍しておりこちらは飛ばせば時速43キロにはなるのだから充分先回りは可能であつた。

「お茶もキッチンといたしましたし、あとはゆつくりと仕上げと参りましよう。」

聖グロ陣営では敵の隊長車を仕留める作戦が図に当たり全員が手応えを感じた。しかし勢いだけで熱くなつてはいけない。いついかなる時も優雅に冷静に、それを忘れぬように一旦メンバーに茶を配り自らも落ち着く。ローズヒップが早くも離脱を余儀なくされたが完全に流れを掴んでいるのはこちらであつた。

「全車ゆつくりと山地へと移動、麓に到着後機動部隊を散開させ偵察を行います。」

静かに発言して全車へと動きを伝える。高速の機動部隊と低速の主力をキチンと分けてそれぞれを活かす聖グロ得意の戦法だ。

「黒森峰戦のように高地からの砲撃を見舞うつもりでしようがそうはいきません。我々のチャーチルやブラックプリンスの正面装甲はそう簡単には破れん！逆に高台に陣取つた敵を引き付けつつ機動部隊を回り込ませ側面ないし後背を脅かす！」

気合い一閃ルクリリも車長席からハッチを開けて直に周囲を見る。統率の完璧な聖グロリアーナ戦車隊の雄姿が並び彼女を奮い立たせる。ルクリリもまた副隊長としてこの闘いを挑んでいるのだ。

「梓さん、あなたはどうするおつもりでしようか？」

そんな中でふとペコが口にしたのは梓の名前だつた。初めて会つたのは練習試合のとき、と言つてもお互いの名前すら把握しないままであつたが。それからマジノ戦にサンダース戦と見学し着実に力をつけていく姿をペコは認めた。

そして決勝の黒森峰戦ではエレファントにヤークトティーガーといつた重駆逐戦車を相討ちとなつたが仕留めてみせた姿には心から驚かされた。いつしかペコは自分と同い年であればどに実力を伸ばしていく梓に惹かれていたのだ。かつてダージリンがみほと初めて砲火を交わしたときに素晴らしいライバルを見つけたと発言したが今ペコにとつて梓がそれだつた。

「ローズヒップさんの借りは私が返します。」

梓達がグラントを強奪した時、クルセイダーで追撃したローズヒッ

プを彼女たちは撃破寸前に持ち込んだ。更にアッサムによる情報から聴いたところによるとサンダース高校においてみほ達の乗るIV号に梓達がM4シャーマンで闘いを挑み一步も譲らなかつたとのこと。

「梓さん、いざ勝負です。」

柔らかな笑顔を見せて発言するペコ。しかしその内心では自らにふさわしいライバルとの闘いを前にした熱い想いが渦巻いていたのだった。

続く

番外編

新チーム命名です！

練習試合が決定し、大洗女子学園戦車道一同は更なる訓練に励んでいた。特に新入生達は時間の許す限り戦車に向かい各機構のチェック、動かしかたのおさらい、素早く反撃に出るためのイメトレなど余念が無かつた。

「では私達のチームのマークはペンギンさんで決定!!」

練習試合を数日後に控えた放課後、スナックアミーゴにて戦車道新入生で砲手鞍馬由岐の嬉しげな声が響く。同じテーブルにつく3人の仲間が小さく拍手した。なお店内には他にお客はない。

「見た目は少し丸みがあつてで可愛いけれど一度スピードに乗れば翔ぶがごとく、そして見た目には分からぬハンターの嘴。センチネルにぴつたりだわ！」

続いて野島椿がそう言う。彼女もまたセンチネルのチーム名の決定を喜んでいた。

ちなみにセンチネルのスペックは…。

全長 6・32 m

全幅 2・77 m

重量 約28 t

正面装甲 65 mm 側面装甲 45 mm

最高時速 43 km

主砲 57 mm 6ポンド50口径砲

聖グロリアーナで使用されている巡航戦車クルセイダーは…。

全長 5・98 m

全幅 2・64 m

重量約20t

最高時速45km（ただしリミッターを使用している場合）

主砲57mm6ポンド43口径砲

装甲50mm

「それでは我らがセンチネルとペンギンさんチームの活躍を願つて乾杯!!」

「「乾杯!!」」

車長である明日香澄の音頭で各々が注文したジュースのグラスを持つて乾杯をする。実にほほえましい光景だ。

「おめでとう！これはわしからの気持ちだ。アミーゴ特製ピザサンド。」

そう言つてテーブルの真ん中に大皿をマスターの立花藤兵衛が置いた。特製のトーストサンドに付け合わせのクラッカーとピクルスのスライスなどが並べられている。そして鼻腔をくすぐる香りが4人の食欲を掻き立てる。

「良いんですか？立花さん。」

「構わん構わん。」

澄の質問に笑顔で答える藤兵衛。

「マスターほんまええ人やなあ。いただきまーす！」

篠真厘はそう言うなり早速一つを手にとつてぱくり。

「んん～！」

香ばしく軽くトーストされたパンに特製のトマトソースととろけたチーズの絶妙な風味、そしてスライスされたソーセージの旨味とピーマンのアクセントが口一杯にひろがつて真厘はチーズ並みにとろけた顔になつた。他のメンバーも手にとつて食べれば皆美味しい美味しいと続く。

「どうで立花さん。」

「ん？」

4人の食べっぷりに満足そうな藤兵衛に由岐が質問した。

「立花さんが学校に来てる間はお店どうしてるんですか?」

「ああ、今のところ留守中は店を閉めてる。」

「ええつ!?

「うそつ!?

事も無げに言う藤兵衛に驚く面々。

「なあに、心配するこたない。俺は整備が出来れば文句はないしキチ
ンと給料もでるんだからな。」

腰に手を当てて自慢げに言つてのける。

「それに、戦車をいじくるのがたまらなく楽しいんだよ。」

「立花さん…。」

優しい目で語りかける藤兵衛。4人は彼が心底戦車が好きなこと
が分かつた。

ここで真厘が思い出した様に言う。

「マスター、うちの教官が頼みに来たんやろ?」

「ああ、そうだ。そもそも…。」

藤兵衛は一拍の間をとつて続けた。

「わしと羽村は知り合いだつたからな。」

「「「えつ!」」「」

思いもよらない一言であつた。

「あいつが霞目基地に赴任してきた時に俺はそこの整備士だつたん
だ。」

先日のこと、みほと優花里は月江おばあさんからアミーゴのマス
ターのことを教えられ協力をあげないかとまず羽村葵教官と生徒
会長に相談した。生徒会長には断る理由はないと言われ高い額は出
せないが水準並みの給料は出してくれるよう手配することを約束
してくれた。一方の葵は異論はないが自分に説得させて欲しいと言
い出した。その時みほと優花里は葵とアミーゴのマスターが知り合
いだと教えられた。

「お願ひします！立花さん！力を貸してください!!」

訓練の指導を終えた葵はアミーゴのカウンターに手をついて藤兵衛に頭を下げていた。突然の再会、そして頼りにされていることが藤兵衛には嬉しかったが…。

「葵、わしはもう引退した身だ。今更だよ。」

気持ちとは裏腹な言葉が出てしまう。しかし…

「そんなことはありません！僕は立花さんだからこそ整備を託したいんです！お願ひします！一生のお願いです！どうか…この通り！」

再び頭を下げる葵の姿は藤兵衛の胸を打つた。

「仕方ねえな。」

そう一言呟くとガバッと葵は頭を上げた。

「こんな錆び付いた腕でも良いのか？」

再確認するように訊ねるが葵の口からは肯定以外の言葉が出るはずも無かつた。

「いえ、立花さんは錆び付いてなんていません！よろしくお願ひします！」

「よし、そうと決まれば早速明日学園を訪ねるとしようか。」

「ありがとうございます！」

またも頭を下げる葵の姿に藤兵衛は苦笑いしかできなかつた。

「知りませんでした。」

椿がそんなことがあつたのかと驚いてそう言うと藤兵衛は一旦力

ウンターへと戻りながら話を続けた。

「驚いたのはわしも同じさ。まさか葵の奴が大洗に来るなんてな。」

そして喉が渴いたのか冷蔵庫から作り置きしていたアイスコーンヒーを取り出してグラスに注ぐ。

「何だか運命的ですね。」

「ふむ…。ま、縁があつたと言うことだな。」

澄の感想に返して藤兵衛はグラスのアイスコーヒーを半分ほど飲んだ。よく冷えて苦味と酸味が程好い味わいであった。そしてグラスを置いて斜め上を見つめて思い返す。

「正直わしが戦車の整備士を続けたがってたことを気づいてたんだろうな。」

ありがたいことだと思う藤兵衛。そんな彼に椿が手を上げて質問する。

「あの…失礼かもしませんがちょっと良いですか？」

「ん？ 答えられることなら別に構わんが。」

「立花さんは何故自衛隊を辞められたんですか？」

藤兵衛の許可を貰つて聞いてみる。どうやら他のメンバーも気になつたらしく藤兵衛へと視線を向ける。

「…それはな…。」

『整備員が機械の気持ちを分からんで務まるわけ無からうが！』

整備員のツナギ姿の藤兵衛は右手にスパナを持って格納庫で若い整備員に向かつてそう言い放つた。

『わかんねえものはわかんねえよ！立花さんは時代遅れなんだ！』

一方の若いのは藤兵衛に強い調子で返す。周囲には何人かの同僚達が集まりなんとか2人を宥めようとしているが…。

『何を言うか！』

『もうそんな時代じゃ無いんですよ！』

『言つたな！こいつ!!』

その言い方について藤兵衛の怒りが爆発した。勢い任せに左手でパンチを繰り出した。思ひがけない一撃が若い整備員の頬に命中して相手は尻餅をついた。

『半人前の癖に何分かつた口聞いてやがる！お前なんか整備士失格だ

!』

藤兵衛は右手に持つたスパナを床に叩きつけた。

「とまあ若いのと揉めてぶん殴つちまつたつてわけさ。しかも殴った若いのはとある政治家の親戚でな。」

立花がかつて経験した修羅場に4人は息を飲んだ。同じにこれだけ真剣に機械を愛した人になんてことを言うのだろうとも思つた。「わしは機械に頼りすぎるなと言うつもりだつたんだが、どうにも上手くいかなくてな。そこでそんなトラブルを起こしたんだ。辞めるには充分だつたよ。」

そして一服のパイプに火をつける。ちなみにカウンター上には喚起せんのファンがあり彼女達に煙が向くことはない。「そもそも引退したら小さな喫茶店でもやつて好きなバイクでも弄るのが夢だつたんだ。それが少し早くなつただけだ。」

それだけ言うとパイプをくわえ直した。

「…立花さん。ごめんなさい！」

慌てて椿が立ち上がり頭を下げた。

「いや、良いんだ。とつくる昔話だ。」

そんな彼女に苦笑いで返すと今度は由岐が口を開いた。。

「でも立花さんは正しいと思ひます。」

「うちもや。立花さんは正しい!!」

由岐の考えに真厘が同調して続いた。

「うちも大工の家系やから分かる！手軽に頼つてばかりやつたらあかんのや！死んだお爺が言うてた、『家にせよ何にせよ結局は人の手で創るもんや。それは機械だけで創れるもんではない』って。」

その言葉に澄が、椿が、由岐が頷く。

「…皆、ありがとう！」

藤兵衛は正直嬉しかつた。自分を頼りにしてくれてこんなにも言つてくれる事がとても心地よく感じた。

「よし、嬉しいこと言つてくれたお礼だ！飲み物もサンドイッチもサービスだ！どんどんおかわりして良いぞ！」

その言葉に4人の目が輝いた。いの一一番に澄が両手を上げた。

「やつた～！」

「マスター大好き!!」

「立花さん男前やでえ!!」

「そうと決まれば行つてみよ～！」

椿、真厘、由岐と続く。

アミーゴはその日閉店まで店内が明るい笑いに溢れていた。

お祝いです！

4月半ばの土曜日。戦車道履修生達が夕方に染まる戦車倉庫からぞろぞろと出てくる。今日の訓練も無事終わり各々が明日の休日の過ごし方を考え、相談する。

「ねえねえ、明日どこ行こうか？」

「皆でセンタツキー行かない？」

「こないだ行つたじやん？ 74アイスにしよーよ？」

「いつそ連絡船で上陸しない？」

「それよりこれから映画見よーよ！ 「さよならジュピター」と「復活の日」、今日の夜届くんだー！」

「…（ぼくつ）」

「図書館でドイツ機甲戦術の研究しないか？」

「いやいや、ここはかつての歴史から学ぶべし。動乱の幕末ぜよ。」

「いや、それならば戦国こそうつてつけ。合戦に学ぼうではないか！」

「それじやあいつそみんな戦術シミュレーションゲームでも…」

「「それだ！」」

「よしつ気合い入れて明日はスポーツセンターだ！」

「「はい!! キヤプテン!!」」

「寄り道はほどほどにですよー！」

「休日の過ごし方も節度を持つてください。」

「皆様の風紀委員でーす！」

「トラブル起こしたらきびしいペナルティ課しますよー！」

と言つた具合である。

「では私達はここで。」

「参加できないのが残念です。」

帰り支度を完了して生徒用の玄関を出たあんこうチームの5人は校門で別れることになつた。

「また来週ね！」

「華さん、優花里さん、さようなら。」

「お疲れ…。」

優花里と華がそこから離れていく。みほと沙織、麻子の3人はそのまま校門である人物を待つていた。

「ごめんごめん遅くなつて。」

やつて来たのは教官の羽村葵であった。いつもの迷彩戦闘服やスーツ仕様の礼服ではなくラフな私服である。

「慌てなくとも大丈夫ですよ。」

「私達そんな待つてませんから！」

「うむ。」

3人の返事に葵は少しホツとした表情をして口を開いた。

「じゃあ行こうか。」

「ただいま！」

葵がそう言いながら扉を開くと玄関へ向かつて小さな影がとたとたと駆けてきた。

「パパ!! おかえりなさい!!」

「ただいまー！」

鞄と少々大きめの紙袋を上がり口に置いて走つてきた愛娘晴香（はるか）を抱き上げる。

「あなた。おかえりなさい。」

娘に続いて出てきたのは緑のロングヘアの少々背の低めの女性、葵の妻そして晴香の母、見晴である。

「見晴、ただいま。」

「パパ！今日がなんの日かおぼえてる？」

抱き上げられた晴香が問いかけると葵は微笑で返す。

「勿論、晴香の5歳の誕生日だ。誕生日おめでとう。」

「うれしい!!パパ大好き!!」

実は先日から似たようなことを度々晴香は繰り返している。これでは忘れる方が難しいだろう。

「ははつ、じゃあ早速パパからプレゼントだ。」

「!!なになに!?」

プレゼントと言う言葉に興奮する晴香を下ろす。

「はい、これ。」

そう言つて先ほど上がり口に置いた紙袋を渡す。晴香は急いで袋をとじているテープを剥がして中のものを引っ張り出した。

「!!かわいい！」

出てきたのは地元大洗のゆるキャラ『アライツペ』のぬいぐるみ。「パパありがとう!!」

ぬいぐるみを抱えて笑顔の娘を見て葵はジーンと來ていた。贈る方にとつても誕生日は楽しみなのだ。

「それだけじゃないんだぞ晴香。もうひとつすごいプレゼントがあるぞ。」

そう言つて葵は半開きのドアを開けて…。

「入つておいで。」

と外へ呼び掛ける。

「お邪魔します。」

「こんばんは。」

「失礼します。」

みほ、沙織、麻子の3人が入つてくる。

「…」

3人の姿を認めた晴香はしばし動かなくなつた。両目を見開いて目の前の事態が信じられないかのようである。

「こんばんは。」

晴香の前に立つたみほが少しかがんで挨拶すると晴香は彼女の膝

に飛び付いた。

「本物のみほお姉ちゃんだ!!」

「はわっ!?」

嬉しさを全身でアピールする晴香。一方のみほは突然の事態に驚く。他の4人はただその姿を笑顔で見ていた。

「本当にありがとうございます。」

「いいえ、こちらこそ招待していただきありがとうございます。」

ひとしきり晴香が騒いだ後、改めて葵は妻と娘をみほ達に紹介して2人にもみほ達を紹介した。と言つても2人はよく知つていたし何よりも晴香は大洗女子戦車道の大ファンだつた。

「♪」

憧れのみほをダイニングへも引っ張りテーブルにつく。晴香の左隣にみほが座り、右隣に見晴、さらにその隣には葵が座り麻子、沙織と続いてテーブルを囲む。今日の主役たる晴香はとてもごきげんであつた。

「それにしても…。」

改めて葵はテーブルの上を見回した。

「見晴、ちょっと作りすぎじゃないか?」

継ぎ板をたしたテーブルの上には晴香の好物を中心に様々なご馳走が並んでいた。切り分けた巻き寿司に鳥の唐揚げと添えられたマッシュユーポテト、色合い鮮やかなサラダなどの定番がところ狭しと並ぶ。

「華さんがいたら凄く喜んでたね。」

「足りるかなあ?」

みほと沙織の噂のために華がくしゃみをしたかは定かではない。

「だつて大事な日にお客様が来るなら張り切らないと。」

そう言いつつも少し見晴は顔を赤らめている。どうやら多少は調子に乗りすぎて作りすぎた感は否めないらしい。

「パパ、ママ、早く食べようよお。」

待ちきれないと言わんばかりに今日の主役たる晴香がせかす。

「そうだな。でも…」

「その前に…。」

そう言つて葵と見晴はビールの入つたグラスを手に取る。両親の意図を感じた晴香も手元のジュースのコップを持ち、みほ達も続く。

「晴香、誕生日おめでとう！」

「「「おめでとう！」」

葵が音頭をとつて皆で乾杯する。その中心にいる晴香はおそらく今日一番の笑顔だつたろう。

あれだけあつた料理もパーティーとあつてはスピーディーに無くなつた。最後のケーキまで食べ終えて、葵は晴香とお風呂に向かつた。

「見晴さん。」

「うん？」

残つた女性陣でお茶を飲んでいると沙織が見晴に訊ねてきた。

「羽村教官とは恋愛結婚されたんですよね？」

「えつ、うん…。まあ…。」

「どんなお付き合いされてたんですか？」

真剣な顔で更なる質問を浴びせる。所謂恋ばなどいうやつか…。

「どんなつて…。」

「お願いします！私戦車道だけじゃなくてモテ道も目指してますんです！だから経験のある人にじっくり聞いてみたかったんです！」

見晴が若干言いよどむが沙織は土下座せんばかりの勢いで頼み込んだ。

「さ、沙織さん…。見晴さん困ってるよ。」

「そうだぞ沙織、教官のプライベートなことだ。」

「…めんなさい。」

左右の2人に諫められて沙織は熱くなりすぎたことを謝った。その様子に微笑みながら見晴は答えた。

「ふふ、教えてあげても良いよ。」

「えっ？」

「私があの人と地元の高校で出会ったの。その学校にはある一本の樹があつてね…。」

『こんなちは！』

『こ、こんなちは。』

桜の花びらが舞う入学式の日、自分達の出身校のシンボルとも言える古木の前で見晴は葵に出会った。彼に見つめられた瞬間のまるで全身に電気が走ったかのような感覚を彼女は今でもおぼえていた。

目を閉じればその時からの様々な出来事も思い出せる。

「それから私は目立つように髪型をアレンジしたり、彼とわざとぶつかって気を引こうとしたりしてね。そして3年の春に初めてデートをしたの。」

春の中央公園、満開の桜並木を2人並んで歩いた。夏の海、売り子のお姉さんに無理矢理持たされ真っ赤になつたスプーンが2つ刺さつたかき氷。秋の学校、文化祭で2人一緒に校内を巡りめぐつた。冬のパーテイ、友人のクリスマスパーティーに呼ばれて満天の星空を2人で見上げた。

「2人でバルコニーから眺めた星空はとても綺麗だつたわ。」

ひとしきりの思い出を語り見晴は目を閉じた。

「そして忘れもしない翌日に卒業式を控えた2月末の日曜日、彼は私の友達を元気づけようとマラソンに挑戦したの。毎朝同級生に付き合つてもらつてジョギングして、スポーツセンターにも通つて、私も付き合つたりしたわ…。でも…」

3年生の2月、バレンタインデーを過ぎた頃に葵はマラソンに挑戦することになった。きっかけは見晴の友人美樹原めぐみの相談だった。自分がこの3年間を何もせずに過ごしてきたことを悔やんでいたらしいのだが葵も見晴もそんなことないと言つても自分は何も形に残せていないと彼女は言い張る。そこで葵は今からでも何かを始めて残せばいいことを体現すると言つてマラソンを始めた。

見晴としては彼の言うことに賛成であり応援もした。しかし日がたつにつれて見晴は辛さが増していった。めぐみのために走るのは彼の優しさであると分かっていても少し気になつてしまふ。毎朝マラソンの特訓に同級生の清川望が付き合つているのも、幼馴染みの藤崎詩織や友人の虹野沙希が毎朝サポーテしているのも、放課後に鏡魅羅とダンスやエアロビで鍛えていることも正直気に入らなかつた。

「自分では気づいてなかつたけど、周りの皆に私は嫉妬してたの…。そのくせ自分から彼のために朝や放課後に付き合えなかつた。意気地無しだつたのね…。」

見晴には何も無かつた。望や魅羅みたいに彼とトレーニングするような体力も根性も、詩織や沙希みたいに恥ずかしがらずに彼を支え

ることも出来なかつた。ほんの少し勇気がほしかつた…。

『葵君…ごめんなさい！』

『見晴!!』

放課後に彼と並んで歩く帰り道。見晴は彼に別れを告げた。もう辛い想いをしたくなかった。彼ならすぐに誰にでもお似合いの存在になれる。自分が彼を独占するなどあり得ない。そう思っていた。しかし：

『葵君…。』

部屋で1人になれば思い出すのは彼のことばかり。捨てようと思いつつ捨てれずに引き出しにしまつた彼とのツーショット写真を取り出しては涙を浮かべる毎日。自分から手放しておきながら見晴はそれをねだつてしまつていた。もしも…彼が許してくれるなら…。

『見晴？あれからも俺はトレーニング続けるよ。マラソン大会いよいよ明日なんだ。出来れば見に来てほしい。最初は美樹原さんを元気づけようと思つてたけど、それよりも今は見晴に来て応援してほしいって思つてるんだ。俺は見晴じゃないと駄目なんだ。他の子と親しくして君を傷つけてしまつたことは謝る…。ごめん…。ただ俺は今も見晴が好きだ!!』

マラソン大会前日の留守電は見晴に勇気を与えた

翌日、マラソン大会会場

『頑張つて！』

聞き慣れた声に葵はスタート地点近くから応援スタンドを見る。

『見晴…。』

ほどなくして見晴の姿を見つけた。いつものコアラヘアにコート姿の彼女が両手を口元に構えて大声を張り上げる。

『葵君!!頑張つて！』

『見晴!!ありがとう!!』

彼女のエールに手を振り大声で返す葵。

『大好きだよ!!』

『俺もだ!!』

2人には他の人も、何もかもが目に入つていなかつた。ただ遠目に見えるお互いの姿に向かつて思いの丈を叫んでいた。

「それから卒業式の日に私は彼に改めて告白したの。」

「見晴さんから告白したんですか？」

沙織が訊ねると見晴は頷いて続けた。

「うん、私の学校には卒業式の日に女の子から告白するおまじないみたいな習慣があつたの。」

『あなたとたつた3年の思い出になつて別れたくない。これからもずっと一緒にいたい。』

あの日出会つた伝説の樹の下で想いを伝えた見晴。葵は優しく彼女を抱き締めて答えた。

「…」

「…」

「…」

「そして高校卒業して正式なカップルになつたの。でも彼は九州へ行っちゃつた。」

そう言つてアルバムを閉じる。その表紙を2度、3度と撫でて見晴は続けた。

「でも帰つたら真っ先に私のところに来てくれたし、頻繁に連絡もとつてた。だから寂しくはあつたけど彼はいつでも私のことを想ついてくれたのが嬉しかつたわ。」

正直な言葉が3人に染み込んでいくとみほが口を開いた。

「…良いお話ですね。」

「みほりん…。」

素直な感想が出た。少し心配そうに沙織と麻子はみほを見た。

「私は何度も聴かされたよ。見晴さんのこと。葵さん本当に好きな人がいるんだなつて分かつた。」

おそらくみほは葵に好意を持っていたのだろう。彼を愛している見晴、そしていつも一緒にいる沙織と麻子には容易にそれが感じられた。みほはどこか寂しげな表情で少し俯く。過去は過去と割りきつたつもりでもそれはいかないのが人間である。

「みほさん。実はある人と私はね、お互い高校よりもずっと昔に一度会つてたの。」

「えつ？」

見晴の思わず言葉にみほは顔を上げる。

「まだ幼稚園くらいかな？ デパートで私は迷子になつて泣いてたら、1人の男の子が私を迷子センターにつれて行つてくれてね。」

見晴は話しながら居間を出ていくとすぐに何かを持つて戻つてきた。

「そしてその時、お互いの宝物だつたこの髪留めとバッジを交換したの。卒業式の日にこれを見せあつてね。」

見晴の手にあつたのは掠れて何が描かれていたのかわからない子供用の髪留めと辛うじてヒーローの絵が残つていたバッジであつた。

「私達はきっとそういう運命だったの。そしてそれは誰しもが思うことだと思うわ。」

それを握りしめて胸の辺りにまで持ってきて見晴は両目を閉じた。

「あなたにも、沙織さんにも、麻子さんにもきっと…。」

見晴がそこまで言い切った時、脱衣所から葵の声が聞こえてきた。

「見晴！ 上がつたよー！」

「はーい！」

その言葉に反応して見晴は脱衣所へ娘を迎えて行く。残された居間で沙織が声をあげた。

「素敵～！これよ！これこそ運命の出逢いなのよ！」

「まつ、確かに誰かさんみたいにすぐ惚れたのなんだの言つて自滅したりすぐ人の事情に首を突っ込もうとするよりは確かにドラマチックな話だ。」

「麻子！ その言い方ひどいよ！」

「真実だ…。」

「まあまあ。」

沙織と麻子のやり取りをなだめるみほ。しかしこれは麻子から幼馴染みへの心配の裏返しである。お互いそれは分かっている…はずだ。

「ごめんなさいね。晴香の我が儘に付き合っていただいて。」「いいえ、迷惑だなんて。」

その後、そろそろ帰宅をと言葉を出したら晴香がみほお姉ちゃん帰らないでとぐずりだした。宥める一同だつたが結局晴香は折れずみほは泊まることになった。

そして晴香の部屋で2人は並んで布団を敷き睡ることになった。

「晴香、みほさんを困らせたらダメよ。」

「はーい♪」

母の言葉にプレゼントされたアライツペのぬいぐるみを抱いて上

機嫌で返す晴香。その様子に思わずみほは微笑んだ。

「それじゃお休みなさい。」

「ママ、お休みなさい。」

「お休みなさい。」

見晴が電気を消して部屋を出ていく。布団に入つてみほは晴香の方に体を向けた。

「晴香ちゃん、いつも1人で寝てるの？」

「うん！」

自分の時はどうだつただろうかと思い出してみる。姉と並んで寝て、時々一緒の布団だつたような気もする。

「みほお姉ちゃん。」

「何？」

「戦車って楽しい？」

晴香の質問は今のみほなら答えは1つだつた。

「うん！楽しい。晴香ちゃんは戦車好き？」

「うん！わたしも大きくなつたら戦車乗るの!!」

晴香の夢は戦車道をすることの様だ。

「そうなんだ。」

「お姉ちゃん、また戦車乗つてテレビ出る？」

「うん、もう少ししたらね。」

月末から月頭には練習試合を控え、6月には今年の戦車道全国大会の抽選会がある。7月からはいよいよ大会が始まる。今年は大きく大洗はクローズアップされることだろう。しかしそれにおごる者はいない。皆昨年以上の激闘が待ち受けていると覚悟しているのだ。

「晴香、応援してあげるね！」

「本当？ありがとう！」

一旦真剣な表情を見せて大会への覚悟を自覚したみほはただ戦車に憧れる昔の自分のような晴香によつて笑顔に戻る。

「お姉ちゃん、わたし戦車乗れるかな？」

「うん、きつと乗れるよ。私が乗せてあげる」

「本当に!?」

みほが放った一言にガバッと起き上がった晴香が再度訊ねる。

「うん、約束したげる。きっと晴香ちゃんを戦車に乗せてあげるね。」「やつたー！」

すると晴香はベッドから降りてみほの隣にやつてきた。

「じゃ、指切りしよ♪」

小指を立ててみほの前につきだすと、みほが笑顔の二つ返事をした。

「うん」

「指切りげんまん嘘ついたら針千本のーます、指切った!!」

小指を絡め合わせて声を揃える。こんな約束お姉ちゃんとよくしだなあなどと思い出しながらいつか必ずと心に誓う。

「えへへ…。お姉ちゃん。」

「ん？」

しばし離れた小指を嬉しそうに眺めた晴香は問いかけた。

「一緒に寝ていい？」

「良いよ。はい。」

「ありがとう！」

みほが自分の布団を少しだらぐると晴香は自分のベッドから枕とアライツペのぬいぐるみを抱えて飛び込んだ。

「お休みなさい♪」

「お休み…。」

頭もとにアライツペを置いて枕を並べる2人。晴香はしばらく嬉しそうにしていたがはしゃぎすぎたためかすぐに寝息をたて始めた。それを隣で自分にもしも小さい妹がいたらこんな感じだろうかと思ひ、少しだけ姉の気持ちが分かつたかも知れないなどと感じつつみほも眠りに落ちた

練習試合・ショートです！

『月江おばあさんとセンチネルです！』

「ベンギンさんチームついてこい！」

知波単戦車道の一同がやけくそあんこう踊りを舞いベンギンさんチームを歴女軍団が賞賛している時のこと、副隊長のエルヴィンがベンギンさんチームをつれて大洗チームのベースとなるテントへと向かう。

「大洗女子学園、ベンギンチームを引き連れ参りました。」

案内された先にいたのは筑波さつき教官補佐とパイプ椅子に座る老婦人であった。

「ご苦労様。皆さん、こちらはかつて大洗戦車道の隊長を勤められた

⋮

「月江と申します。」

椅子から立ち上がり月江おばあさんが会釈するとエルヴィンとベンギンさんチームのメンバーが礼を返す。一同は以前みほからセンチネルがどのような経緯で大洗へとやって来たのか聞いており、初対面ではあるが月江おばあさんのことも聞き及んでいたのだ。

「大洗女子学園副隊長、エルヴィンです。」

「ベンギンさんチームリーダーの明日香澄です。」

エルヴィンと澄が自己紹介して野島椿、篠真厘、鞍馬由岐も続く。

「今日の勝利、おめでとうございます。」

5人の自己紹介を聞いた月江おばあさんは再び会釈しながら今日の勝利への賛辞を口にした。

「あ、ありがとうございます。」

大先輩であり、自分達の戦車に強い思い入れのある人物からの言葉に少し緊張気味に澄が返す。

「あなたがたのセンチネルの活躍、本当に嬉しかったわ。あの子に活躍の場を与えてくれて、本当にありがとうございます。」

優しい笑顔を浮かべた月江おばあさんの言葉がメンバーの心に染

み渡る。

「私達はあの子を試合で活かすことができなかつた。当時は本当に残念だつたけれど……こうして見ることができて感無量だわ。本当にありがとうございました！」

月江の終わらぬ賛辞にメンバーが少し震え始める。そきて澄は自らがチームを率い、センチネルをさらに活躍させるべく心の中で決意を新たにするのであつた。

『双子戦車です！』

「そうそう、みほさん。ちょっとウサギさんチームの皆さんを呼んでいただけますか？できれば戦車も二一緒に。」

隼人による写真撮影が終わるとオレンジペコがみほにそう語り掛ける。

「えつ？はい。」

呼び出しの要請にすぐさま携帯で梓に連絡する。

「ダージリン様から伺いました。あなた方にお見せしたいものがあります。」

テーブルの脇に集まつたウサギさんチームとM3リーを前にしてペコが用意された無線機のスイッチを入れる。

「ローズヒップさん、お願ひします。」

『かしこまりですわあ！』

いつの間にかいなくなつていたローズヒップからの返答。そして間もなくどこからかエンジン音が響く。

「あつ！」

「あれはっ!!」

「まさかっ!?」

エンジン音を響かせ接近してきた戦車を見たウサギさんチームの阪口桂利奈、大野あや、宇津木優季が声をあげ、いつもボーッツとしている丸山紗季が微笑み、山郷あゆみとリーダーの澤梓が驚きの表情となる。そして驚きから嬉しそうな表情へと変貌した梓が口を開いた。

「…グラント！」

そこに現れたのはM3リーの双子の姉妹、M3グラントである。彼女達のリアクションに満足した笑みを浮かべてペコが言う。

「以前グラントに会いたくて我が校に來たことがありましたね。」

改めて各チームが自分達の戦車について勉強した際にM3グラントの存在を知ったウサギさんチーム一同は聖グロリアーナ女学院まで潜入して会いに行つたことがあつた。その時ローズヒップに見つかり行き掛かり上でクルセイダーとタイマン勝負になつてしまつたがダージリンに仲裁されて事なきを得る一幕もあつたりした。

「ダージリン様からこのグラントをリーと並べて差し上げるようにと承り持参しましたのですわよ!!」

「ありがとうございます！」

ローズヒップがどうだと言わんばかりにグラントの上で胸を反らして言うと梓が礼を言う。

M3は第二次大戦中に活躍したアメリカ製の中戦車。アメリカが使用した車輛がM3リー、イギリスに供与された後仕様に手が加えられた車輛がM3グラントである。リーとグラントはまさに双子姉妹なのだ。

「…」

「リーとグラント…。」

「妹が来ててくれたあゝ！」

「姉妹の再会だね！」

「なんだか感動しちゃううう！」

紗季がグラントに近づいたのを皮切りにあや、桂利奈、あゆみ、優

季も続く。

「ペコさん、ありがとうございます。」

梓が思わぬサプライズに礼を述べるとペコが返す。

「いえいえ、グラントは私達の間では訓練用車輌。それがこんなに喜んでもらえて、私も正直に嬉しいです。」

一旦近づいたメンバーが梓とペコのもとへと戻つてきてあゆみが質問する。

「オレンジペコさん、写真撮つて良いですか？」

「どうぞご自由に。」

「写真撮影なら俺の出番だな。」

そのやり取りを聞いていた一文字隼人が自前のカメラを持つて言う。

『双子姉妹の再会』

翌日の戦車道新聞のバラエティ欄にこのような記事が載った。

『アメリカ生まれのM3中戦車。各校においてはいずれもM4シャーマン等と比べられて訓練用などで使用されている車輌であるが大洗女子学園ではアメリカ仕様のM3リーが第一線で活躍しており、昨年は決勝戦で重駆逐戦車エレファントを撃破し、ヤークトティーガーを刺し違える形で撃破、北海道で行われた大学選抜戦では包囲された味方を間一髪で助け、立て続けにM24チャーフィーを2輌仕留めるなど大活躍を見せ、本年度には副隊長車となつた。そして先日の大洗対知波単の練習試合において聖グロリアーナ女学院より大洗のM3リーの活躍を祝うために同校所有のM3グラントが現れ、M3リーに乗る大洗ウサギさんチームの面々はこの双子姉妹とも言うべき2輌の再会を喜んだ。大洗女子副隊長でありウサギさんチームのリーダーでもある澤梓さんは「聖グロリアーナの方達のご厚意に感謝すると共に、より一層の鍛錬を続けることで応えようと思います」とコメントしています。』

そしてリーとグラントの双子姉妹をバックに最高の笑顔のウサギさんチームの写真が記事に並んで掲載されたのであった。

大洗応援団誕生です！

5月の連休で行われた大洗女子学園と知波单学園の練習試合会場。観客向けに設営された屋台村の端っこにて

「鉄板ナポリタンおかわり!!あとミックスピザももう一切れ!!」

大洗にて開店していたアンツイオ高校の屋台にて設置されたテーブルに1人の男が居座つて次々とメニューを食べては注文していく。「お兄さん、もうこれくらいにしといたらどうですか？いくらなんでも食べ過ぎですよ。」

売り子をしているアンツイオ高校戦車道新入生本城玲奈ことボンゴレはあきれ半分で言う。このお客様1人で通算鉄板ナポリタン4杯、ミックスピザ、アンチョビピザ各2切れ、ミニガーリックトースト1本、ラザニア2杯、イタリアンソーセージ7本を平らげていた。

「いやあ、大洗が勝つたしあんこう音頭の太鼓を叩いたら腹減つちまつてよお。やっぱ応援のあの飯は最高だしな！」

そんな風に言うのは大洗応援団の橋下団長であつた。さすがにプロレスラーであるうえその中でも大食漢である彼のその食べっぷりは衆目を引く。

「ただいま～つて団長!!またこんなに食つてんすか!?」

各校の集まりから帰つてきたペパロニがこの状況に驚き呆れる。

「よおドゥーチエペパロニ、相変わらず旨いねえこのナポリタン!!」

そう言つて5杯目を口に運んでいく。

「あの団長さん。」

水のおかわりを届けにきたカルパッチョが横に立つて以前から思つていたことを口にした。

「どうして応援団を発足させたんですか？」

「ん？」

カルパッチョの質問に一旦フォークを止めて隣に立つた彼女を見

上げる。

「聞いたところによると団長さんが角谷会長さんに掛け合つて発足させたとか。」

「その通りだ。あれは去年のことだが……」

とくに秘密にすることでも無いので橋下団長は話始めた。

「レスラーは仲良しこよしじややつてけねえつてよ……。」

そう聞かされ、自分の家を訪ねてきた客人がしょんぼりとしている姿を見て橋下は彼の名を呼ぶ。

「越野……。」

「すまねえ橋下……お前とアメリカで一旗上げるつもりだつたのによ……。」

相手は越野洋正。橋下とは同期の親友でありお互い闘魂四天王という二つ名を持つライバルもある。

「何言つてんだ！お前は世界に認められてんだぞ。しつかりしろ。」

「……」

橋下のエールに越野は顔を上げる。

「俺らのことなら心配すんな。こつちは日本で頑張つてアメリカ野郎共を見返してやんだよ！」

「橋下……」

親友のねぎらいに笑顔を見せる越野。だがそれは少々無理矢理感の拭えないものであつた。

「はあ……。」

親友の手前ああは言つたものの橋下はショックだつた。思えば共

にプロレス道場の門を叩き、友として時にライバルとして歩み戦い苛め合いながらキャリアを重ね、気づけば闘魂四天王などと呼ばれるいる自分達がいた。そしてここに来て長年の夢だった海外進出、マジソンのリングに立つ日が現実になろうとしていたのだが…。

『俺達は越野だけを指名する。他のはいらない。レスラーは仲良しこよしでやつてけるものじやないぜ。』

アメリカ側からの言葉に越野は落ち込んでしまった。彼は自分に声がかかるやいなや橋下達も連れていきたいと申し出たのだが相手は越野だけを選んだ。長年の苦楽を共にした親友達を置いて行くことと友情に熱い越野は渡米を躊躇してしまったのだ。また橋下にしてみれば自分はまだアメリカ側の歯牙にもかけられないような人間であり、越野に劣っているということでもある。

「喜ぶべきなんだろうがな…。」

自社ジムの休憩中も思い出してしまう。いかんいかんと頭を左右に振つていると。

「やるなあ！大洗女子がついにベスト4だぞ！」

「最初に出場したつて聞いたときは一戦超えられればと思つてたが…。」

休憩中に何やら雑誌を見て話す若手を近くに認めた橋下は気分転換に話し掛けてみた。

「何話してんだ？」

「社長、戦車道ですよ！」

そう言いながら雑誌を勧める若手。橋下は受け取つて表紙を見てみた。『週刊戦車の極・高校生全国大会特別号』とある。

「戦車道？女の子の武道がどうかしたのか？」

はつきり言つて橋下には戦車道は女の子のことくらいしか知識がなかつた。

「地元の大洗女子学園が全国大会準決勝進出したんですよ！」

雑誌を渡した方とは別の若手が握りこぶしを作つて返答する。正しくはここはひたちなか市なので隣なのだが…。件の学校について書かれた記事を見てさらに質問する。

「大洗女子学園・強いのか?」

「強いどころか今年発足した素人同然の集まりですよ。戦車もバラバラで数も揃つてないのに強豪サンダース大付属や中堅どころのアンツィオ高校相手に勝利したんです!!」

「ふむ…」

若手の説明を受けてさらに記事を読み込んでみる。

「面白そうだな。」

自然とこぼれたその言葉に2人の若手は訊ねた。

「社長、行つてみますか?」

「面白いですよ!」

雑誌を閉じて2人に返しながら聞く。

「試合を?」

「はい! 今度の準決勝は興業休みに重なるんで何人かで観に行くんですよ。」

「そうだな: 気晴らしに行つてみるか。」

暗い考えに支配されるのはよろしくない。たまには他のスポーツでも見て気分を紛らわしてみようと思う橋下であつた。

戦車道全国大会準決勝戦、雪原を舞台にした大洗女子学園対。プラウダ高校の戦いは膠着状態になつていた。

「もうだめだ…。」

「完全に包囲されて劣勢どころじゃないぞ…。」

雪の降るなか傘をさしてカイロや即席湯タンポで暖をとる若手レスラーの諦めの声を橋下は聞いた。今大洗女子は市街地の教会に籠城している。プラウダお得意の包囲殲滅戦術に絡めとられてしまつたのだ。プラウダは三時間の猶予を与えて大洗女子に降伏を迫つている。

「…」

橋下はスクリーンに映し出された戦車の配置を見ながら考えてい

た。

『相手は包囲の一部をわざと薄くしてゐる。』

素人目にもわかる配置の隙間。大半の人たちはそこが狙い目と思うだろう。

「罠だ…。」

リングの上で修羅場を度々経験してきた橋下にはわかつた。相手はあそこに誘つてゐるのだ。

「たぶんプラウダは誘い込んで砲火の餌食にするつもりだ。」

もはや大勢決したかと意氣消沈する大洗側の観客達。すると画面に映されていた教会正面の入り口に大洗のメンバーが何やら妙な動きで集まり始めた。

「あれは…」

橋下は驚いた。

「あんこう音頭だ。」

彼女達は地元大洗名物あんこう音頭を踊り始めた。笑顔で自分達で唄いながら腕振り腰振り躍り舞う。気でも狂つたかと最初は思つたが彼女達の表情はとても力強く輝いていた。観客達にも分かつた。彼女達の士気はまだ衰えていない、最後まで戦うつもりだと…。

「相手の隙を狙うなら…」

橋下が呟いたその時、大洗戦車隊が籠城していた教会の正面から一斉に飛び出してきた。敵のフラッグを狙つての破れかぶれか…。いや違う!!

「一番厚い中央だ！」

彼にはわかつた。絶対有利に立つ相手を効果的に攻める方法、それは敵の技を破り隙を作ること。プロレスのリングでも自信満々の得意技を破るのは容易ではないが破れば一気にこちらに試合が傾く。大洗女子の作戦は理にかなつていた。

「やつた!!

「包囲網を破つた！」

見事敵の中央を突破して大洗戦車隊は包囲網からの脱出に成功し
何人かの観客が色めき立つ。だが…。

「まだだ!!」

橋下が力強く言う。敵はすぐに態勢を立て直して追撃に移る。大
洗女子の正念場はここからであった。

そこからは怒濤の展開だつた。38t軽戦車が敵に単身突撃を敢
行。多数の敵を走行不能に陥れ時間を稼いだ。続いてIV号とIII突が
街へと引き返し敵のフラッグ車を追撃する。次々やられる大洗女子
戦車隊。そして紙一重の差で大洗は先にプラウダのフラッグ車を仕
留め勝利した。

「これだ…これだ!!」

試合を見届けた橋下にある考えがよぎつた。もしかすると彼女達
なら迷つてゐる俺達に道を示してくれるかもしない。そう思つた
橋下は帰宅後すぐに越野に連絡をとつた。

戦車道の聖地、富士演習場。真夏の太陽が照りつけるここに橋下は
越野を招待していた。始めは慣れない場所とスポーツに少し怪訝に
思つていた越野だつたがすぐに彼も凄まじい砲撃戦を繰り広げるそ
の戦いぶりに引き込まれていつた。

「ヤバイぞ！」

「何てこつた！」

スクリーンに映し出された映像に2人が声を上げる。戦車道全国
大会決勝戦、大洗女子学園対黒森峰女子学園の試合中盤。なんとか籠城
していた高地を脱出した大洗戦車隊は追手を振り切つて市街地へと
向かつてゐた。その途中有る川でアクシデントが起こつた。

「まずいぞ、傾いてる。」

「黒森峰が迫ってきているぞ。」

観客席から何人かが声を上げる。川を渡っている最中にウサギさんチームのM3リーがエンストしてしまったのだ。川の流れが徐々に戦車を傾かせていく。このままでは横転してしまう。また敵の戦車が追つてきている。普通ならフラッグ車輌だけでもここから逃げるべきだ。

「あつ!?

誰かが声をあげた。隊長車輌から出てきた人物がロープを体にくくりつけてM3リー目掛けてジャンプしていく。

「隊長だ!」

「助ける気か!?

勝負のかかったこの場面で彼女は仲間を助けることを選んだ。それは敵が向かってきている現状、勝利を放棄することになりかねない。だが隊長の独断ではなくそれは全員の総意であることがすぐにわかつた。旋回砲塔を持つ戦車が後方へと砲を向けて砲撃を開始、隊長を援護している。全員が仲間を救おうとしているのが伝わってきた。

『隊長には指一本触れさせないぞ!』

『ここは守り抜くよ!』

『ひるむな! 撃ち続けろ!』

そんな声が観客席にいた橋下達の耳に聞こえてくるようだつた。もう彼らを止めるることは出来なかつた。

「頑張れ! 撃ち負けるな!」

「もう少しだ!! 踏ん張れ!!」

橋下と越野が立ち上がりスクリーンに向かつて大声を上げる。例え彼女達には届くことのない声援でも、声を上げずにはいられなかつた。たまらず周りにいた仲間のレスラー達も声を張り上げ、その輪は大洗応援席全体へと拡がつて行つた。

「やつた! 脱出したぞ!!」

誰かが叫ぶ。大洗戦車隊はM3リーの救出に成功した。応援の叫びが歓喜と拍手に変わる。街へとなだれ込む大洗戦車隊を見届け全

員が再び着席した。

「良いぞ。ここで敵を迎え撃てば…。」

橋下は咳く。圧倒的不利な戦力で格上に挑むのなら少しでも有利に戦える場所へと敵を誘い込むのは得策と言える。越野もそれに頷いてスクリーンに再び釘付けとなる。

それからも大洗は激闘を繰り広げ応援席を沸かした。マウスにルノーとIII突が立て続けに撃破されたときは運も尽きたかと思われたがヘツツァーの捨て身の作戦でこれを撃破したときには再び歓声が上がった。続いて市街戦では多数の敵を引き付ける八九式と強敵重駆逐戦車に挑むM3リーの戦いぶりに皆手に汗握つた。もちろん橋下達も声を張り上げ応援を続けた。

そして最終局面のIV号とティーガーの一騎討ち。皆固唾を飲んで画面を見ていた。ポルシェティーガーが撃破され黒森峰の車輛が攻め込んでくる。時間はない。

「次で決まるぞ…。」

今度は越野の咳きに橋下が頷く。

その直後、先に動いたのはIV号だつた。

『大洗女子学園の勝利!!』

「やつたーーー！」

「大洗ばんざーーーい！！」

勝利のアナウンスに沸き返る応援席で橋下と越野は両手を振り上げて歓喜の声をあげた。

「そして越野は渡米した。必ずマジソンで戦うことを約束してな。」

そこまで話して橋下団長は水を一口飲んだ。隣に立つカルパツ

チヨ、同じテーブルに腰掛けたペパロニ、店番を交代し同じく腰掛けたボンゴレは静かに次の言葉を待つ。

「大洗女子は俺達に教えてくれたんだ。本当に仲間同士助け合うことの大切さを。そしてそれに報いるためにベストを尽くすことを。」

その瞳には川を渡ろうとしてエンストしてしまったウサギさんチームを助けるみほ達の姿、そして黒森峰の重戦車エレファントやヤークトティーガーに敢然と戦いを挑むウサギさんチームの勇姿が浮かび上がる。

「越野は俺を引っ張ろうとしてくれた。だから今度は俺が追い付く番なんだ。そして俺が応援団をしてるのは大洗女子への恩返しだな。」いつしか橋下団長が食べていたナポリタンが載った鉄板は空になっていた。

「ふう、いつになく話しごんじまつたな…。」「…ずつ…ぐすつ…。」

そこで何かを啜るような音がした。音の出所は…

「本当に…良い話つすねえ…ひつぐ…えつぐ。」

アンツイオ期待の新ドゥーチェ・ペパロニであつた。やはり彼女は純粹と言うのか正直者なのか涙もろいらしい。

「おいボンゴレ、鉄板ナポリタン追加だ…団長にご馳走してやれ…。」「その前に鼻水拭け。」

そんな彼女に橋下団長はポケツトティッシュを渡す。

「でもやけにすんなり応援団結成できましたよね。あの夏の一件（劇場版）からすぐに発足させて…。」

記憶を辿つて親友カエルから応援団発足の話題が出た頃を思い出すカルパッチヨ。女子高生の応援団としてごつい男達が女子校に出入りするのはいささか問題があるので無かろうか…。

「ああ、角谷前会長に高級丸干しほしいも差し入れしたら即許可してもらえた。」

その返答にペパロニとカルパッチヨ共に納得である。

「それじゃ大洗女子の勝利にカンパーア!!」

そう言つて6杯目の鉄板ナポリタンを片手で持ち上げた橋下団長

は笑顔で再び食べ始めた。さつきまで泣いていたペパロニも、傍らに立つカルパッチョも、鉄板ナポリタンを運んできたボンゴレも思わずその食い意地と食べっぷりに笑顔になる。そんな彼らのいるアンツィオの屋台は今日もなかなか盛況だった。

謎の男です！

6月の梅雨まつただ中、そんな時期であるにも関わらずとても晴れ渡つた貴重なある木曜日。

「ここが大洗女子学園…。」

1人の男が大洗女子学園にやつて來た。愛車のバイクに跨がり黒のベストにズボン、赤いシャツに黒スカーフ、ブーツを履きサングラス、銀のヘルメットに背中に下げる黒のテンガロンハット（カウボーイの被るハット）にブーツの踵にはスパー（拍車、踵部分に付けられた車輪状のもの）とさながらカウボーイのスタイルだ。

「…」

暫く学園を眺めた男はアイドリングさせていたバイクをふかして走り去るのだつた。

「はい笑つてえ!! 良いぞ良いぞ♪」

カメラマンの一文字隼人は今日も今日とて大洗女子学園密着取材の写真撮影に訪れていた。ここは甲板舷側にあるテラス型の公園である。夕焼けに染まる中で隼人がウサギさんチームの6人を撮影していた。ちなみに格好は普通の制服である。

「よし、今日はここまで、お疲れ様。本当にありがとう!!」

「一文字さんもお疲れさまでした。」

「これでまたファンレターとか来るかなあ？」

「お母さんにまた雑誌送ろう！」

「うわあ今から楽しみだね！」

隼人のねぎらいにリーダーの澤梓が代表して返す。宇津木優季と大野あや、山郷あゆみがそんな会話をして丸山紗希はボーッと夕陽を眺めていた。阪口桂利奈はその隣で夕陽に向かつて何か叫んでいる。大洗女子戦車道が間もなく今年の全国大会の一回戦を迎える少し前のやすらぎの時なのかもしない。

「ようようよう、女の子何人も連れて良いぞ身分じやねえか。」

そんな風にしているといつの間にやらキナ臭い空気が漂い始めた。

「何人か俺達に分けてくれてもバチはあたんねえだろうよお？」

気がつけばなんとも嫌な感じの輩が7人、学園艦が寄港していると
こういう輩が増えていかんと風紀委員がぼやいていたことを一同思
い出した。

「ふつ、有象無象の輩の遠吠えだな。」

「は、隼人さんちよつとそれは…。」

意に介さず返す隼人がさりげなくウサギさんチームを庇うように立つ。彼の後ろでは梓は突然の事態と隼人の挑発に少したじろぎ彼を宥めるように小声を発する。あや、あゆみは視線に敵意をのせて男達をにらみ、優季は「やだあ、私達狼に狙われちゃってるう」等と言つて少し照れた様に顔を抑え、桂利奈は両腕をぶんぶん回して掛かつてこいと吠えるように言い放ち、紗希はボーッとの様子を最後尾から見ていた。

「何おう!?

「言つてくれるじゃあねえか!!」

1人がつかみかかろうとするやいなや隼人はカメラを梓に渡してファイティングポーズをとつて応戦の構えをみせる。ところが…。

「うおつ!?

いきなりどこからか飛んできたトランプのスペードエースがいきり立つリーダー格の顔にへばりついた。

「なんだこいつは!?

トランプを剥がした男が辺りを見回すとすぐに公園の入り口辺りでバイクを降りた男が何かを投げたようなポーズで固まっていた。それは先ほど大洗女子学園の校門前にいたカウボーイのような人物だった。

「てめ何しやがる!!」

他にはおらず間違いないくこいつが犯人だと認識したチンピラのリーダー格はカウボーイへ荒げた声を浴びせた。

「言いたいこと言つて粹がつて、他人のものを力ずくで奪つて楽しいか?」

「何だつてえ!」

「痛い目に遭いてえようだなあ?」

「俺達を怒らせるはどうなるか知りたいか!?」

近くにまで歩いてきたカウボーイ男は7人組を挑発しつつ値踏みするように見回して一言。

「お前達のその腕っぷし、日本じやせいぜい十番目さ。」

そう言つて肩を軽く揺らして笑う。

「なにおう!?俺たちより腕のたつ奴だあ!?」

「はつはつはつ、教えてやろう。1人はそこにいる男、一文字隼人。そして…。」

そこまで言うと彼は「ヒュー」と口笛を吹きチツチツチツと右手の人指し指を左右に降つて自らを親指で指す。

「俺さ。」

「なんだと?ふざけやがつて!!そこまで言うのなら勝負だ!たたんじまえ!」

7人の男が隼人とカウボーイにそれぞれ挑みかかった。そして…:
ブンツ ドカツ ガスツ バキツ ドシャツ ゲシツ

あつという間に7人の男達はやられた。しかも最初に隼人らが投げた2人は立ち上がろうとしたところでそれはさせるかと言わんばかりにウサギさんチーム一同に踏みつけられた。ちなみに全員スカートの下にはスパツツ等を履いているためその手の心配はいらぬい。

「ちくしょう、舐めやがつて。」

瞬く間にやられた連中のうち、カウボーイに蹴られて地面に倒れたリーダー格の男が立ち上がりつてナイフを取り出した。

「そんなものに頼つてるようじやまだまだ三下だな。」

「うるせえ!」

ナイフでカウボーイに挑みかかる。しかし…：

「ぐつ!」

かわし様に手首にチョップを見舞う。ナイフを落とした男が右手首を左手で抑えて痛みを抑えようとするその時をカウボーイ男は見

逃さなかつた。

「とおつ!!」

カウボーイが左手で帽子をおさえつつ高く跳ぶ。そして身体を回転させて

「ズバットアタック！」

最後に必殺の飛び蹴りを叩き込む。

「ぐえつ!?」

その一撃でリーダー格は完全にノックアウトされた。他になんとか立ち上がつた2人も隼人にラツシユを喰らいダウン。ウサギさんチーム6人に踏み続けられた2人はズタボロにされてものの数分でチンピラ7人組は全滅した。

「俺の親友、飛鳥五郎を…じゃなかつた！おい！二度どこの子達の前に姿を現すな！とつとと失せろ！」

リーダー格の男の服の襟を掴んで無理やり引き起こすとカウボーイはそう告げる。男はサングラス越しに突き刺さるカウボーイの眼力に震え上がつた。

「ひ…は、はい…。」

顔をひきつらせた男を返事を聞いたカウボーイが離すとすぐさま回れ右をして駆け出す。

「ま、待てよ！」

「くそ、おぼえてろ！」

口々に言葉を発して他の輩も後に続く。

「おとといきやがれ!!」

「あつかんべーだ！」

あゆみと桂里奈が逃げるチンピラどもの背中に言い放つ。

「あの…助けていただきありがとうございました！」

梓がカウボーイに近づき礼を言うと左手を軽くあげて返す。

「なに、礼にはおよばんよ。ねえ、一文字先輩？」

梓と共に近づいてきた隼人にニヤリと唇の端をあげて同意を求める。

「先輩？」

「お前やつぱり…。」

梓がカウボーイの言葉に首を傾げて隼人が確認するように言うと
男はサングラスを取った。

「お久しぶりです。」

完全に整った顔立ちのイケメンだったことで数人が思わず声をあげる。

「風見!! 風見志郎だな!」

隼人が風見と呼んだ男の両肩に手をあててとても嬉しそうに声をあげる。

「風見志郎、よろしく。」

「俺の高校の後輩だ。空手三段、柔道三段、プロレーサーでもあるな。」
一通り再会を懐かしんだ後で風見志郎はウサギさんチームのメンバーに名前を名乗り隼人が補足した。

「お前も相変わらずみたいだな。」

志郎の格好を見て隼人は少し呆れ気味な表情をする。例えはここがテキサスやメキシコなら違和感など無いだろうがここは日本だ。この奇抜なカウボーイスタイルは正直に周囲から浮く。

「ところで先輩、この子達は?」

「私達は大洗女子学園戦車道のメンバーです。私は副隊長の澤梓です。」

「大野あやです。」

「宇津木優季でえす。」

「あい! 阪口桂利奈です!」

「山郷あゆみです。それでこの子は丸山紗希。」

あゆみに両肩を後ろから掴まれて紹介された紗希が右手を上げて挨拶すると

「「「「6人揃って大洗戦車道、ウサギさんチームです!」」」

6人並んで紗希を除くメンバーが声を揃えた。

「君達面白いね。」

全員キッチンと揃えられたことと正直な称賛に全員喜ぶが、普通カウ

ボーアルツクに言われたくは無いのでは無かるうか…。

「あつ!? 風見さん、あのバイクは…。」

自己紹介したところで桂利奈が声を上げる。彼女の視線の先にあつたのは志郎が乗ってきた。バイクだった。皆の視線が集まる中で桂利奈がバイクに近づき…。

「ＧＴ７５０（ナナハン）だー！」

目を輝かせて大声を上げる。彼女のテンションはハイレベルにまで上がっていた。

「ん? このバイクが分かるの? 通だねえ。」

「色んなヒーローが乗ってきたスズキの名車!」

バイクの周りを回つて声をあげる桂利奈。もうその目にはバイクしか映つていない。

「その通り、そして俺は戦う正義の仮面ライダーＶ３!!」

「敵は地獄のデストロン!!」

興奮する桂利奈の言葉に少し調子にのつた志郎が右手で手の甲を相手に見せる様なＶサインを決めて左手を右腕の肘に当てるアドリブする。今まさに力と技の風車が回りだしそうな彼の決めポーズを見た桂利奈はさらに興奮して返答する。どうどうそこで2人は大笑いを始めた。

「やつぱり相変わらず変わったやつだ…。」

そう言いながらも久しぶりに会つた後輩の変わらぬ姿に隼人は笑顔を禁じ得ない。ちなみに紗希を除く全員が一步下がつた。

「しかし何でお前がここにいるんだ?」

「立花のおやつさんに呼ばれまして。」

そして隼人が疑問だつた突然の帰国について問う。

「立花のおやつさんつて…。」

「整備の立花さん?」

あやとあゆみが聞き覚えのある単語から答えを導き出す。

「ああ、俺と志郎は昔おやつさんが趣味でやつてたバイククラブのメンバーだつたんだ。」

隼人の説明で一同が感心する。あの立花さんはひよつとしたら前

自動車部のメンバーよりも多才なのではと皆思いました。

「久しぶりに帰国しておやつさんに連絡をとつたら『しばらく日本にいるなら代理マスターをしてほしい』て頼まれたんです。」

そこで志郎は隼人に向き直って疑問を口にした。

「ところで一文字先輩はお仕事で？」

「ああ、大洗女子学園の戦車道に密着取材してる。」

「へえ、おやつさんだけじゃなくて一文字先輩も学園にいるんですね。こいつは楽しみだ。」

「また一緒に転がすか。」

そう言つて両手でバイクのハンドルを握り右手でスロットルの動きをする隼人に嬉しそうな表情を見せる志郎。

「じゃ、俺はアミーゴへ行きます。お嬢さんがた、また会いましょう。」それだけ言うと彼はヘルメットを被りバイクのエンジンをスタートさせ颯爽と走り去つた。

「あいつが帰つてくるとはな…楽しくなるぞ。」

「一文字さん。」

走り去つた彼を見送つた隼人が笑顔を浮かべているとカメラを預かつたままだつた梓が彼に渡しつつ尋ねた。

「一文字さんのお友だちつて皆風見さんみたいな人なんですか？」

少し不安そうな表情で梓の問い合わせに隼人は笑顔を見せて返答する。

「いやいや…そんなことは…」

『お前さん、日本じゃあ2番目だ。』

『天が呼ぶ！地が呼ぶ！人が呼ぶ！悪を倒せと俺を呼ぶ!!』
『にっぽんいちのおー！ガンガンジー様やー！』

答える隼人の脳裏に浮かぶ友人達、風見志郎に海外にいる城シゲル、甲冑姿の矢田勘次、果たして彼らを普通の人の括りにいれて良いのか…。

「…無いと思う…かな。」

少し自信が無くなつてくる隼人、いつしか笑顔は少しひきつたものになつていたのであつた。

一方その頃…大洗女子学園戦車道チームの隊長である西住みほはチームメイトの武部沙織、秋山優花里、そしてレオポンチームのツチヤと教官の羽村葵と共に学園艦警察署へと来ていた。

「西住さん、間もなく帰ってきます。彼は実に優秀な若手で、きつとお役につことでしょう。」

警察署前にて出迎えた二宮と名乗る学園艦警察捜査係長がそう説明する。その柔らかな笑顔が来てからと言うもの緊張気味のみほに少しの安堵を与えた。

「みぽりん、どんな人かな？」

沙織がそう発言したところで一台の車が学園艦警察署の駐車場へと入ってきた。

「あの車かな？」

「そうです。あれが彼の愛車、マシンXですよ。」

「日産のスカイライン2000GTターボ、通称ジャパンだね。」

みほが呟くと二宮が答えてツチヤが補足する。黒塗りの少々レトロ感のある見た目だが実に頼もしそうな車だ。

「なんかすぐカッコいい感じ。」

沙織の発言がその考えを後押しする。間もなくマシンXが一同の前に停車するとドアが開いた。

「お待たせしました。自分が桐生一馬巡査であります。」

そして出てきたのはこれまたなんともイケメンであつた。長身にジーパン、黒シャツ、白ジャンパーの袖捲りでビシッと決まつた細いながらもガツチリとしたスタイル。少しパーマの入つた黒髪に端正な顔立ちで完成されたまさにイケメン。

桐生と名乗った刑事がみほの前で敬礼した瞬間、沙織が固まつた。

「す、すつごいイケメン…もうダメ！」

沙織の脳内認識能力が許容範囲を超えたためショートしそうに

なつていた。

しかしながら彼女達が警察へと来ているのか…それはまた次回にて

⋮

キャラクター紹介

キャラ紹介その1です！

羽村葵（29歳）『オリジナル』

大洗女子学園戦車道新教官。西住流の歴史の中で唯一西住流を学んだ男。高校卒業後熊本の西住流本家に弟子入りし居候。21歳で修了し国立戦車学校に入学と同時に自衛隊幹部候補資格取得。2年後卒業と共に恋人見晴と結婚。翌年には長女晴香誕生。劇場版では蝶野教官の代わりに東京で大洗を支援していたという設定。

羽村見晴（29歳）『ときめきメモリアル』

旧姓館林見晴。羽村葵の妻。高校の卒業式で葵と正式な恋人同士となり23歳で結婚、翌年に長女晴香を授かる。結婚後はトレードマークだったコアラヘアをやめてストレートにして左右に細い三つ編みを作った髪型にしている。

羽村晴香（5歳）『オリジナル』

葵と見晴の娘。大洗女子学園戦車道チームの大ファンであんこうチームとIV号戦車がとくにお気に入り。夢は戦車に乗ること。

明日香澄（15歳）『オリジナル』

大洗女子学園新入生。葵の友人の妹。戦車道に憧れて当初はサンダース大学付属高校を志望していたが第63回全国戦車道大会を観て大洗へと進路変更する。両親からは戦車道をすることを反対されたが兄とその奥さん（義姉）に後押しされて入学を果す。新戦力センチネルに乗るペンギンさんチームのリーダーとなる。

立花藤兵衛（57歳）『仮面ライダーシリーズ』

大洗学園艦でスナックを営むマスター。かつては陸上自衛隊の霞目駐屯地にて戦車の整備をしていた。面倒見も良く大洗女子戦車道の一団から全幅の信頼のもと戦車の整備を自動車部のメンバーと共に任される。パイプを愛用している。戦車のみならず自動車やバイクなどの整備にも精通している。

一文字隼人（33歳）『仮面ライダー』

フリーのカメラマンで数年前までは戦場カメラマンとして活躍。現在は大洗女子学園戦車道密着取材のため定期的に大洗女子学園に出入りしている。柔道6段、空手5段の猛者。実はイギリス生まれで父親は外交官。ダージリンらのいる聖グロリアーナ女学院の理事長らと交流がある。

風見志郎（32歳）『仮面ライダーV3』

プロレーサーで隼人の学生時代の後輩。かつて学生全日本モトクロス大会、鈴鹿四時間耐久ロードレースのチャンピオンとなつた。元体操選手でもある。レーサー業を少し休みたく帰国すると立花のために応じて大洗学園艦内の喫茶アミーゴで店主代理となる。剣道初段、柔道2段、空手3段の猛者。学生時代に両親と妹を事故で亡くし天涯孤独の身の上となる。

橋下団長（37歳）『実在の人物・橋本真也がモデル』

大洗女子学園戦車道公式応援団の団長。茨城に本拠を構えるプロレス団体「ワンゼロ」のリーダー。トレードマークは白鉢巻き、必殺技は最大衝撃180Gの大回転キック。大洗の試合を観て惚れ込み前生徒会長角谷杏に頼み込んで公式応援団を発足させた。二つ名は「破壊帝王」「闘魂継承」「爆裂シユーター」など。たまに大洗のメンバーを試合に招待したりアヒルさんチームの特訓に付き合つたりしている。

キャラ紹介その2です！

野島椿（15歳）『オリジナル』

大洗女子学園新入生、ペンギンさんチーム操縦手。出身は埼玉県さいたま市。趣味は読書で特にミステリーを好む。新入生相手の説明会でたまたま隣同士でセンチネルの説明を受けたことから明日香澄と友人になりペンギンさんチームを結成する。

鞍馬由岐（16歳）『オリジナル』

大洗女子学園新入生、ペンギンさんチーム砲手。出身は地元茨城県のひたちなか市。幼少より父親の影響でゴルゴ13を愛読し狙撃手に憧れ戦車道では砲手を志望。新入生連中のなかではアリクイさんチームの建子と共に射撃に秀でているとされる。趣味はシューティングゲームだが本人によればできればアーケードの筐体か屋台の射的が良いらしい。

篠真厘（15歳）『オリジナル』

大洗女子学園新入生、ペンギンさんチーム装填手。出身は兵庫県朝来市。常に物言いは関西弁。戦車道志望で当初は関西圏の学校を希望していたが第63回全国大会での大洗のファンとなり入学希望した。幼少より活発で山で毎日のように遊んでいたとは本人談。祖父は地元で知られた大工で一通りの日曜大工やペンキ塗りはなかなかのもの。他に趣味は釣り全般。

高野のりこ（16歳）『トップをねらえ！』

大洗女子学園2年生。昨年度後半に大洗に転入してきた。トレードマークは青い鉢巻き。もともとは沖縄中央女子高校で強襲戦車競技（タンカスロン）をしていたが虐めと主任コーチの離職、ボーランドとの死別と立て続けの不幸により挫折。沖縄から祖父母を頼つて大阪に一旦戻ることにしたが祖母から半ば無理矢理大洗女子学園に送られる。かなりのオタク女子である。

良波しゆり（17歳）『南国育ち・in沖縄』

大洗女子学園2年生、のりこのクラスメート。出身は沖縄県那覇市。中学の時に親の仕事の都合で茨城県ひたちなか市に引っ越してきた。同じ沖縄から来たのりこのことを気にかけ友人となる。ハイビスカスの髪留めで長髪をいつも高い位置で根本を団子にして少し後ろに垂らした独特な髪型がトレードマーク。趣味はマリンスポーツ。

天野晃一郎（30歳）『トップをねらえ！』

元沖縄中央女子高校の強襲戦車競技担当主任コーチ。現在は持病のため東京都内の病院で治療を受けている。鬼教官の渾名を持つほどのスバルタを行うことから苦手とする生徒が多くたがのりこにとつては恩師であり、羽村葵教官の戦車学校時代の先輩もある。

桐生一馬（26歳）『西部警察』

大洗学園艦警察署の刑事、階級は巡査。篠真厘の叔父（母の弟）で彼女の兄貴分。仲間内などからはリュウと呼ばれている。愛車は日産スカイライン2000GTターボ、愛称は『マシンX』。たまに愛車と共に自動車部にやって来るがなかなかのイケメンのため女子生徒が度々群がつてくる。関西弁は喋れるが基本標準語を喋る。

黒部将美（18歳）『オリジナル』

私立ゲルダム高校戦車隊長、3年生。出身は青森県八戸市。中学1年までは戦車道ジュニアユースの東北代表の1人だった。プラウダの前隊長カチューシャはその頃の先輩にあたり、逸見エリカとも当時面識がある。カチューシャとした強豪チーム作りの約束を果たすべく新設校の隊長に就任。いっぽしのチームを育て上げて大会に臨む。趣味はレトロゲームで好きなゲームは『突撃ファミコンウォーズ』『大戦略』等。CS放送の『ゲームセンターCX』を欠かさず観ている。キャラクター自体はオリジナルですが、彼女の高校名と設定等は一部

『仮面ライダー』に登場するゲルショッカー大幹部ブラツク将軍をモデルにしています。アフリカ軍団を扱うのはブラツク将軍がアフリカ砂漠からやつて来たゲルダム団の指揮官であるためと、力チューシャと知り合いなのはブラツク将軍が帝政時代のロシア出身であるという設定から作りました。

月江お婆さん（67歳）『ガールズ&パンツァー・コミックアンソロジー』

大洗学園艦に暮らすお婆さん。冷泉麻子の家の近所に住んでいる。大洗女子学園OGでかつては戦車道のエースとして四式戦車、五式戦車に乗りアメリカのアンリミテッド・クラスで大暴れをした優花里いわく大洗女子の偉大なる大先輩。アニメ本編では第3話にて聖グロリアーナとの練習試合に向かうIV号戦車に乗ったみほに挨拶をしたお婆さんというモブキヤラでしたがコミック・フラッパーの『ガールズ&パンツァー・コミックアンソロジー』にて名前付きで登場し、みほと優花里に自分がアメリカで戦った時のこと語ります。

キャラ紹介その3です！

宮本いつき オリジナル

大洗女子学園1年生、15歳。茨城県筑波市出身。新カメさんチームのリーダー、車長兼通信手兼装填手。趣味は穴堀りで千葉県で行われる日本穴堀り大会第三位になつたことがある。好物はモヤシ炒め。二天一流剣術の剣豪宮本武蔵を敬愛している。また海軍史にも詳しく好きな軍艦は戦艦武蔵。大洗新歴女チームとしてカバさんチームの妹分を自称している。

柳乙葉 『オリジナル』

大洗女子学園1年生、15歳。茨城県筑波市出身でいつきとは幼馴染み。新カメさんチームの砲手。趣味・特技は鍋奉行と行水、好物は鶏の水炊きで〆は雑炊派。剣豪柳生十兵衛を敬愛し常に眼帯を着けているが砲手をする際には両目でスコープを見るので外している。

鳩村瑠璃 『オリジナル』

大洗女子学園1年生、15歳。茨城県桜川市出身。いづき、乙葉とは中学からの友人。新カメさんチーム操縦手。趣味は焚き火、好物はカレーランド。西洋史を得意とする歴女でエルヴィンにライバル視されることが目標。背がカエサルと遜色ないくらいでソウルネームの由来はフランスのシャルル・ド・ゴール将軍。

早川建子 『オリジナル』

大洗女子学園1年生、15歳。アリクイさんチーム新メンバー。出身は茨城県水戸市。好物は納豆で納豆早食い世界大会に度々参加しているが入賞未経験。お気に入りのテンガロンハットをいつも被つているためしょっちゅう風紀委員に注意されている。趣味はギターだが歌唱力は今一つ。好きな言葉は『ズバツと参上！』。なぜか風見志朗を師匠と呼ぶ。

筑波洋 『新仮面ライダー（スカイライダー）』

筑波さつき教官補佐の兄で年齢31歳。風見志郎、一文字隼人の後輩。趣味はスカイスポーツで特にハンググライダー。大洗女子学園艦戦車ショップの店長代理。戦車道で使用する装備の调達・卸売業者もしており、改造・整備なども一通りこなせる。

津辻練馬 『ガールズ＆パンツァー・戦车道のススメ』

大洗女子学園に出入りしている戦車部品を卸している業者さん。文科省学園艦事務局の担当官辻濂太のそつくりさんで違いは頭髪の分け目。度々大洗に装備を調達してくれる頼りになる人物。コミックフラッパー「ガールズ＆パンツァー・戦车道のススメ」第6話にて登場しております。名前はオリジナルで辻濂太を若干いじった名前になっています。

二宮武志 『西部警察』

大洗警察学園艦分署の捜査係長、58歳。階級は警部補で桐生刑事の上司。少々きつめの眼鏡を愛用しており一部をコレクションしている。大洗に奥さん子供がおり寄港中は艦内の宿舎ではなく自宅へ帰っている。口癖は『何とかならんのかねえ○○くん?』。桐生達からはバックアップとして頼られており各種無線やコンピューターもきちんと取り扱う。高級ブランデーやウイスキーに目がない。

キャラ紹介その4です！

安藤理音（あんどう りね）『オリジナル？』

大洗女子学園1年生、15歳。茨城県大洗出身。レオポンチームの新砲手。グレーのバンダナと先代メンバーホシノ同様のタンクトップスタイルがトレードマーク。好物はインスタントラーメン。両親が国際結婚で父が日本人、母がアメリカ人のハーフ。セミロングの金髪とスタイルの良さは母親譲り、短所の方向音痴は父親譲り。仲の良い2匹のネコがおり整備の合間によくじやれている。趣味は機械いじりの他に時代劇観賞で好きな作品は『必殺シリーズ』と『大江戸検査網』。某ロボット作品の主人公とヒロインからもじつたキャラです。

柳原まろん（やなぎわら まろん）『ハイスクール・フリート』

大洗女子学園1年生、15歳。千葉県銚子市出身。レオポンチームの新装填手。ヘアスタイルは栗色のふわふわウェーブで口調は江戸っ子。好きなものは焼き肉と祭り。麻子や桂利奈並みに背が低い（146センチ）。主にエンジン全般に詳しく車の他バイク、舟等も整備可能。聖グロリアーナのローズヒップとよく似た声をしている。理音とは時代劇仲間であるが好きな作品は『木枯らし紋次郎』と『剣客商売』。名前の似てる篠真厘からお笑いコンビ結成を打診されるが全力拒否している。元ネタはアニメ『ハイスクール・フリート』の柳原麻侖ですが名前が真厘や麻子とかぶりやっこしいのでひらがなにしました。

赤城烈和（あかぎ れつか）『ウルトラ怪獣擬人化計画』

大洗女子学園1年生、16歳。東京都小笠原諸島多々良島（架空の島）出身。コブラさんチームのリーダー。大洗女子学園の戦車道の活躍に憧れて単身茨城へ出てきた。ポジションは車長兼装填手兼通信手でとにかくパワフル、大洗女子バレー部の仮部員。好物は唐揚げ。トレードマークはドクロの髪留めで趣味は筋トレと素潜り漁。風船

を見ると興奮する。多々良島に住む老夫婦の養女で養父が大工の棟梁なので篠真厘とは話題が合う。元ネタは『ウルトラ怪獣擬人化計画』のレッドキングから名前はオリジナルです。コブラをチームのシンボルにしたのは強そうなのとカメと同じ爬虫類だからです。

春田聖（はるた　せい）『ウルトラ怪獣擬人化計画』

大洗女子学園2年生、17歳。東京都品川区出身。大洗へ入学したのは本人いわくただの気まぐれ。1年時は剣道を履修。戦車道へと変更した理由はただの興味本意。ポジションは砲手で年長だが自らはリーダーの器で無いと烈和に任せている。白髪ショートカットでつねにつまようじをくわえ、歴女ではないが侍言葉をしやべる癖がある。好物は蟹チャーハン。独特な笑い方をして鉄を持つ人が変わることがある。元ネタは『ウルトラ怪獣擬人化計画』のバルタン星人からで名前はオリジナルです。

小森蘭（こもり　らん）『ウルトラ怪獣擬人化計画』

大洗女子学園1年生、15歳。大阪府大阪市出身。公立校で戦車道をしたいという理由から大洗へ単身やつて來た。明るめの茶髪のボブカットでよく左右に角の様な寝癖ができる。ポジションは操縦手で突撃好き。特技は柔道（黒帯）と体当たり、趣味は城見物でいつかこの手で城を破壊することを夢見てる。好物はたこ焼きとうどんにホルモン。関西出身のため篠真厘と仲がいい。元ネタは『ウルトラ怪獣擬人化計画』のゴモラから名前はオリジナルです。